俺はロリコンではない。ただ成熟した女性より未熟な体の女の子が好きなだけだ。

ユフたんマン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は激怒した。必ず、かの誘拐犯の神エヒトを撃ち倒さなければならぬと決意した。

俺にはこの世界のこと知らぬ。俺は、ただの小さな女の子が好きな高校の教師である。ロリコンではない。

教師として生活していた彼は、別に彼女がここにいるなら、この世界で一緒に暮らせるじゃないかと考え始めるが、ここには危険がいっぱい。

ならば危険は俺が排除しよう。彼女を守る為ならば、俺は世界の敵にでもストーカーにでもなってやる!!

目次

俺はロリコンじゃない。――――――1
俺はロリコンなんかじゃないんだからね！――――――15
俺はロリコンか？　否、否、否!!
29
俺がロリコンとでも思ったか！マヌケがァ～～！――――――45
俺がロリコンだと思っているのか？
60
俺はロリコンじゃないって言ってんだろ!?もういい!!俺は帰る!!ロリコンがいるかもしれないのに一緒の部屋で寝れるか！――――――76
一体いつから…俺がロリコンだと錯覚していた？――――――91
俺がロリコンだ等と…その気になっていたお前の姿はお笑いだったぜ――――――111
神は言っている、俺はロリコンではないとーー――――――126
俺がロリコンかだと…？俺に質問するな。――――――145
俺はロリコンではない…俺は…俺は…いや、ロリコンでもいいかもしれない…
162
俺はロリコン？違うね！ロリコンはお前

の方だなッ!! ―――――――― 186
人が鯨を見てデカイと言うように！海は深いと言うように！俺はロリコンではない!! ―――――――― 205
だから俺はロリコンじゃないって……ん？また俺何か言っちゃいました？ 217
俺がロリコンと言われるのは間違っている ―――――――― 232

俺はロリコンじゃない。

俺の名前は守山誠、２４歳独身の新米教師だ。
突然だが俺は小さな女の子が好きだ。小学生はドストライク。しかし俺はロリコンではない。断じて…
しかし女の子は歳を隔てるたびに変化し、中学生頃にはその魅力は激減してしまう。
そんな事実に俺は絶望した。俺は真実の愛を見つけられるかと…
俺はそんな絶望を紛らわせるように俺は勉強した。めちゃくちゃ勉強した。かなりいい大学にも入った。そんな俺が目指していたのは小学校の教師だ。
まさにそこはパラダイス。

ある偉人は言った。
『少女とは愛でるもの！性の対象としてみたりあまつさえ手を出すなど…紳士の風上にも置けん行為だ!!憎むべきは一部の卑劣な犯罪者のみ!!
ロリコン無罪！紳士無罪!!
いつでも心にＹＥＳロリータＮＯタッチ!!!!
!!』

俺はロリコンではないが、これを教訓に、毎朝横断歩道に立ち旗を持って、登校する小学生を見守っている。もちろんボランティアだ。

そして俺は大学で運命に出会った。

教師を目指すという先輩に話を聞きに行った際、その先輩は、同じく教師を目指すという知り合いを連れて来たのだ。

「畑山愛子ですー･よろしくお願いしますー･」

俺に電気が走る。小学生のような容姿に可愛らしい声、完全に俺の性癖にヒットした。ご、合法ロリだと!!?俺はこの時、初めて神を信じた。アーメン。

いや、俺はロリコンじゃないが。誤解しないでくれたまえ。

神は言っている…幼い子に手を出すのは犯罪…なら幼い姿のままの彼女を作れと…

畑山さんは俺より一つ年上、高校教師を目指しているらしい。マズい、そんなのダメですよ！男子高校生なんて発情したサルみたいに腰を振るしか能のない奴らじゃないか!!（男子高校生への風評被害）

ズッコンバッコン大騒ぎ♪だろ？（全国の男子高校生に謝れ）

これは俺が守らなくちゃならない。

この日、俺は小学校の教師から高校教師へと進路を変更した。この選択に俺は後悔はない。

▽▽▽

畑山先輩が卒業した…私は…悲しい…（ポロローン）

学校への行きがいがなくなってしまった。しかし俺はめげない。毎朝登校する小学生を見て畑山成分を補充する。うん、かわいい。因みに俺はロリコンではない。まったく、小学生は最高だな！

この畑山レスショックの悲しみを俺は勉学に向けた。

そして卒業、高校へと着任した。一年目は畑山先輩と違う高校だった。やはりそう簡単には一緒の高校にはいけない。高校など無数とあるのだ。

俺は色彩のない高校で2年働いた。

そして2年で異動となり、とある高校へとやってきた。

「守山誠です。まだまだ若輩者ですが、精一杯努めていきたいと思います！これからよろしくお願いします！」

職員室で先生達に挨拶する。俺の視界には1人の小学生にも見える女性が映っていた。

やはり俺たちは運命の赤い糸で結ばれているんだ！

▽▽▽

一番後ろの席で居眠りしている少年の脳天に教科書を叩き込む。

「クォラ南雲…何居眠りしてんだ。ペナルティな」

「そ、そんな～…」

クラスの中でクスクスと馬鹿にしたような笑い声が響く。みんな南雲を嗤っているのだ。いつも不真面目、授業中はいつも寝ている南雲。そして学校の美少女、白崎に気にかけてもらっているというラノベの主人公のような少年だ。妬み僻みが多いのだろう。

「おいおい南雲ォ～！昨日徹夜でエロゲしたからって授業中に眠るなよな！」

ゲラゲラと笑う檜山、斎藤、近藤、中野。彼らも南雲を妬んでいる男子達だ。まったく彼らも懲りないものだ。

「お前ら今授業中な。そんな大声で笑うな。お前らもペナルティ」

「「「マジかよ…」」」

ペナルティとは、居眠りを続ける南雲に向けて作ったプリントだ。

最初はペナルティなど存在していなかったが、南雲があまりにも寝るので実用化したものだ。本来寝ていれば意欲点が下がるが、それの救済措置としてプリントの提出を命じるのだ。勿論、寝てない生徒の方が意欲点はよくなるが…

基本俺は居眠りは数回までなら見逃すが、酷くなれば流石に見逃せない。俺の授業を聞かないことが気に入らないという思いも少しはあるが、やはり一番はその寝てる生徒のためにならないからだ。

因みに回数が増すたびにプリントが増えるルールのお陰で、南雲はかなり起きていることが多くなった。よしよし、それでいいのだ。

「あ…ペナルティのプリント数足りないな…昼休みまた持ってくるからな。後檜山、他の授業中にするんじゃねぇぞ。畑山先生が怒ってたぞ?」

○すぞクソガキ。畑山先輩に迷惑かけてんじゃねえ。

▽▽▽

昼休み、それは生徒にとっては至福の時間。しかし教員にとってはそこまで至福とは言えないのだ。軽く次の授業のあるクラスの準備をし、ココア味のカロリーメイ○を食べ、乾燥した喉をお茶で流し、ペナルティのプリントを持って南雲のいるクラスに向かう。

教室に入るとまず教卓で生徒と話す畑山先輩が目に入るが、話したい欲求を我慢して南雲の席へと向かう。その道中にプリントを3枚ずつ檜山達に配る。そう、こいつらは常習犯なのである。

そして珍しく起きて白崎と昼飯を食っている南雲に6枚のプリントを渡す。

「うげえ…」

「お前、頭はいいんだからもうちょい寝るの我慢しろよ。今は良い点数と提出物を出してるから成績にあまり響いてねぇがちょっとでも落ちたら欠点だぞ」

「はい…」

そう叱っていると白崎がウンウンと頷く。プリントが１０枚を超えた時、酷いやらやり過ぎやら言われたが、プリントがなければお前と一緒に卒業できないかもしれんぞと言うと、掌クルリと俺の味方についた。

「天之河、放課後職員室へ来てくれ。頼みたいことがある」

「はい、わかりました」

南雲への説教もほどほどにしておき、学校で一番といっても良いほどモテ男の天之河に用事を言い渡し、クラスを後にしようと一歩踏み出したところで異変に気付く。

床に魔法陣のようなものが突如現れたのだ。それは徐々に輝きを増していき、思い出したかのように生徒たちが悲鳴を上げる。

「皆、教室から出て！」と畑山先輩が叫んだのと魔法陣が爆発したように輝いたのは同時だった。

すぐに俺は畑山先輩が庇うように抱きしめ、次に来るであろう何かに構える。

大丈夫だ、俺が守る…!!ギュッと強く抱きしめていると、畑山先生の掠れた声と、周りから聞こえる甲高い声が聞こえてくる。そして空気が変わったことを肌で感じ、恐る恐る目を開け顔を上げる。

そこには赤面の畑山先輩と、見知らぬ大人の集団が跪いている姿があった。

なんだこれ？

すると煌びやかな服装の老人が前に歩み出てきた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いております、イシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

彼女の名は畑山愛子。今日は友人に誘われ、同じく教師を目指しているという後輩に会いに行くことになっていた。

（はぁ…一体どんな人なんだろう…）

実際に会ってみると、友人がイケメンやらずっと言っていた意味がハッキリとわかっ

た。

「守山誠です。よろしくお願いします」

日本人特有の黒い髪は寝癖か少し跳ねており、身長は１９０は超えているとではないかという高身長、顔もそこらのアイドルやモデルよりも整っていて、芸能人と言われても納得する美形の男性だった。

愛子も挨拶するが、声が裏返っているのではないかと心配になる。

それからも守山との関係は続いた。自分の幼い姿にコンプレックスを抱いていた愛子にとって、自分を特別扱いせず、先輩と敬ってくれる守山に徐々に惹かれていった。

卒業、それは学生にとって避けられない行事である。最近やっと距離が縮まり始めていた愛子にとっては絶望しかなかった。そして焦った。いっそ告白してしまおうとさ

え思っていた。あの日までは…

「私と…付き合って欲しい……！」

守山を紹介してくれた友人が守山に告白していたのだ。彼女はミスコンでも上位に入る美人であり、自分と違いプロポーションも良く、さらに性格もいい。まさに男の憧れの存在でもある彼女が守山に告白しているのだ。結果は明白だろう。愛子は走り出した。目から涙が溢れる。

（これが失恋ってやつなのかな…）

家に帰り布団に蹲る。もう何も考えたくなかった。

あの日から彼とは話すことなく卒業し、夢の高校教師となり働いていた。生徒達からは愛ちゃん先生と呼ばれるが、威厳のある先生を目指しているため、コラー！と叱るも、それすらも微笑ましくなり、愛ちゃん先生と呼ばれ続けている。

そして春、職員室で異動してきた先生を見て絶句する。

「守山誠です。まだまだ若輩者ですが、精一杯努めていきたいと思います！これからよろしくお願いします！」

彼だ…まさか同じ高校にくるとはどんな偶然だろうか。彼は私を見ると一瞬驚いたような表情をしてニコッと微笑む。それだけで顔が赤くなった。

そして自分が嫌になる。自分はいつまで引き摺っているのだろうか…

彼と飲みに行った際、告白された時のことを聞き出してみる。

「はえ？あれはおことぉりしましタァよ」

酔って滑舌が悪くなっている。しかしてっきり付き合ったと思っていたのに、断ったという彼に驚くと同時に小さな希望が芽生える。

「好きな人はいるんですか？」

「いますよぉ～…は」

「は？」

何かを言う前に彼は酔い潰れて眠ってしまった。今言いかけたのは『は』…もしかしたら私のことではないかと思う一方、自己評価の低い愛子はそれはないかな…と否定的

になる。

「今言いかけた言葉…私のことだったらいいな…」

愛子には前から彼に気に喰わないことがあった。時折感じる彼からの視線。偶に彼は自分を子供を見る親、もしくは保護者の目で愛子を見るのだ。

気に入らない…子供を見るような視線はやめて欲しい。自分を女として、彼に見てもらいたい。精一杯化粧を学んだりもしたが、それでも彼の目は変わらない。

彼には背伸びする子供にでも見えているのだろうか…

月曜日、私はいつも通りに授業をする。そして昼になり、生徒と談笑しながら弁当を食べる。そして暫くすると、プリントを複数枚持った守山が現れ、一瞬硬直する。入った瞬間、彼は愛子に目を向け微笑む。まるで微笑ましいモノを見たかのように。

多分、彼はお姉ちゃん達と話す小学生にでも見えていたのだろう。と愛子は考える。

守山はクラスのある意味問題児の南雲に説教を始める。

そうだそうだ！もっと言ってやれ！と思いながらも生徒と談笑を再開する。彼の説教もすぐに終わり、教室から出て行こうとした瞬間、床に魔法陣が浮かび上がる。

あまりの出来事に一瞬呆然としてしまうが、すぐに正気を取り戻し、悲鳴を上げる生徒たちに外へ出るように声を張り上げるが、時既に遅く、爆発したかのように魔法陣は光を放つ。

それと同時に誰かに覆い被さるように抱かれる。体は硬く、まるでアスファルトのようだ。そこには仄かな熱があり、まるで子供の頃、父に抱かれた時のような温もりを感じた。

「大丈夫だ、俺が守る…!!」

小さな声で囁かれる。そして今、自分がどのような状況に置かれているのか理解し、顔に膨大な熱量が頭部に集まる。ヤカンのように頭から湯気が立つ。

さらに周りから生徒の甲高い声が聞こえてくる。自分たちの今の姿がみんなに見られているのだろう。すると途端に恥ずかしくなる。

「あ、あの…そ、その…」

上手く言葉が発せない。それでも何かに気づいた守山は抱いていた腕の力を緩め顔を上げる。

「あ…」

離れていく温もり、それにもっとしていて欲しいという気持ちが少し出てしまったが、周りを見ることでそんなことを思っている状況ではないことを理解した。

「ようこそトータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いております、イシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

俺はロリコンなんかじゃないんだからね！

イシュタルと名乗る老人に案内され、大きなテーブルが幾つか並んだ大広間にやってきた。

全員席に座ると、メイドさん達が絶妙なタイミングでカートを押しながら入ってくる。一目見て、すぐに畑山先輩に視線を戻し、体調は大丈夫かなど、真剣な顔をしながら話す。真剣な顔も可愛いなァ…

イシュタルからの説明が始まる。

長かったので3行で纏めてみた。

○魔人族と人間族、亜人族がいて、魔人族と人間族が戦争をしている。

○魔人族が魔獣を従え始めた。ヤバイ、人間族ピンチ！

○なので特別な力を持った俺たちを召喚した。世界を救ってください！

ということである。みんなも授業中や集会での校長先生の話でも、こう纏めておけば楽に覚えられるぞ！多分。

まあ率直に言うと巫山戯るな、という話である。戦争やらはどうでもいいが、なんの関係もない俺たちを戦争に巻き込むな、という話だ。

エヒト様がどうたらこうたら言っていたが、恐らく宗教のことだろう。しかし押し付ける宗教は悪い文明。食べれる石鹸を押し付けるのも悪い文明。

帰れないということがわかると、生徒達は口々に騒ぎ出しパニック状態に陥る。すると何故パニックになっているのか心底わからない、エヒト様に選ばれておきながら、といった侮辱の視線をイシュタルは皆に浴びせている。ちょっとキレそう。畑山先輩もさっきプリプリと怒ってたし俺もそろそろキレていいかな?テメーらの価値観を押し付けんじゃねえ!って…

未だパニックが収まらない中、天之河が立ち上がりテーブルをバンッと叩いた。その音にビクッとなり注目する生徒たち。

天之河は全員の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

俺は心配だった。天之河は優しいのだ。所謂正義の味方、というやつだろう。しかし彼には決定的な短所がある…

それは…思い込みが激しく、自分の力を過信し過ぎているところだ。

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。…俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシュタルさん?ど

うですか？」
「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」
「俺たちには大きな力があるんですよね？ここに来てから妙に力が張っている感じがします」
「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」
「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」
ギュッと握り拳を作り、そう宣言する天之河。無駄に歯がキラリと光る。
ハァー、やっちまったな…
俺は頭を抑える。天之河には良くも悪くも高いカリスマ性がある。ほら、今の言葉で皆流されそうだし。
しかも最悪なことに、人望のある生徒達が続々と天之河に感化され賛同している。これでは他の生徒達も時間の…いや、もう手遅れだろうな…
「駄目ですよ～」
と涙目で皆に訴えるが、天之河の作った流れの前には無力だった。
そして俺に訴える畑山先輩。コクリと頷く。涙目可愛い、ペロペロしたい、めちゃく

ちゃ甘やかしてあげたい…いや、ロリコンじゃないけど…
というか…

テメエら先輩を泣かしたな…?

ダンッと机を叩き、天之河以上の音を出すと、またもビクッとした生徒達がこちらに注目する。先程までこれで勝つる気分だった場は静寂に包まれる。
というかビックリする先輩可愛い…
「天之河…テメエ本気でそれ言ってんのか?」
「っ…!!はい!そうです!」
「そうか…じゃあテメエに質問するが…畑山先生が受け持つ教科はなんだったか覚えてるか?それと今何処を習ってる?」
「勿論です。畑山先生は社会を受け持っていて、今は第二次世界大戦のところでしたけど…一体守山先生は何を言いたいんですか?」
そう聞き返す天之河に、ちょっとお兄さんキレちまったよ…

「何故畑山先生にそこ教えてもらってんのにそう簡単に戦争に参加するなんてほざけるなァ!!?」

周りは俺の怒号に背筋を伸ばす。今まで俺は本気で怒ったことはなかった。前に本気で怒ったのは姉さんにプリンを食べられた時ぐらいだ。

「先生に習ってねえのか!?戦争ってのは国同士が自分の意見を通す為に武力行使する最も最悪なもんだぞ!!罪のない国民が殺され、殺すことを知らないような人間まで死地に追いやられ…。テメエらは日本の負の遺産を見に行ったことはねえのか!?なくても知ってるだろ!!特に広島、長崎!!原爆で罪もない国民が何万、何十万と死に追いやられているんだぞ!!」

「ッ…!?それでも!!困った人を見過ごすことなんてできない!!」

生意気にも言い返してくる天之河。はあ?困った人?

「そいつら他人だろ?異世界の」

「な!?貴方は他人だからという理由で人々を、助けられる命を無下にするのか!?正直言って先生には失望しました!!まさかそんな人間だったなんて…貴方のような人間に育てられていたことが俺の、人生の汚点です!!」

「はぁ…何でお前には俺の言いたいことがわからない…俺が言いたいのはな…この世界に無断で呼び寄せたエヒトって神の言う通りに見ず知らずの人間を救えってことに、生

徒達を死地に向かわせる価値があるとは思えないってことだ。
　畑山先生もこれは同じ筈だ…俺たち教師はテメエら生徒を無事に家に帰すことも仕事なんだよ。そして何より…生徒たちが大切なんだよ」
「死地に向かわすだって?そんなこと俺がさせるわけないじゃないですか!!俺が全員を守ってみせますよ!」
「巫山戯るなって言ってんだろこのクソ餓鬼ッ!!!お前話理解してんのか!?頭パープリンなのか!?戦争に行くってことは敵を殺さなきゃなんねぇんだぞ!?殺せるのか!?平和な世界で暮らしてきた俺たち一般市民が!!ウサギを殺すのにも抵抗ある俺たちだぞ!?」
「俺が誰も殺させない、この戦争に俺が終止符を打つ!!」
「先生!守山先生落ち着いてください!」
　まだブチ切れそうになったが、畑山先生が腕に抱き付き俺を抑える。ん!?未発達な双丘が俺の腕に…!?て、天国だ…ここにエデンはあったのだ…
　よし、今ので大分落ち着いた…コイツはもう駄目だ。見捨てよう。何を言っても無駄だ。まさに時間の無駄ですね。
「テメエらは本当に戦争なんてロクでもねーのに参加しようと思ってんのか?結局は俺は俺、テメエらはテメエらだ。最後に決断するのは自分だからな。しっかりと考えてから、参加するか否か決めて欲しい。

戦争ってのは命のやり取りだ。周りに流されて決めるもんじゃない。
けど最後に覚えておいてほしい。俺たちは教師だ。途中で挫折しても、俺たちを裏切っても…テメエらが生徒であり続ける限り、俺たちはテメエらの味方だ。俺たち教師を頼れ!!
以上だ。そういうことなんでイシュタルさん、まさか子供を無理に戦争に参加させるというわけではないですよね?そして参加しない者を処分したりも…ね?」
「そ、そうですな…!戦いに向かぬ者もいらっしゃると思いますし、たった数人でも我ら人間族の味方になってくださるのであれば、それはそれは、大変光栄なことでありますしな。戦いに向かぬ者にも勇者様と変わらぬ待遇で保護させていただきますので、どうか気をお鎮めください…!」
言質とったどー!!けど待遇変えないのは当たり前だよなあ?
というか結構カッコいいこと俺言ったよな?な!?
女子生徒達がなんか白い目で見てる気がすんだが気のせいだよな?気のせいだよね!?俺の言ったことカッコよかったよね!?
「守山くん…ありがとう…」
アーーーーーッ!!(尊死)
やったぜ!

カッコいいこと言ったけど裏切った奴は許さん。特に先輩に危害を与えた輩は生徒であっても苦しめて殺すから覚悟しとけよな。

▽▽▽

その後、イシュタルに外へ案内される。どうやら今いる場所は神山であるらしく、その麓のハイリヒ王国とやらに受け入れ態勢が整っているらしい。

ここの聖教教会はその頂上にあるらしく、凱旋門的な門を潜るとそこには雲海が広がっていた。

何故かピッタリと横にくっついて来る畑山先輩とその光景を見る。

「本当に…ここは異世界なんですね…」

そう泣きそうな顔で言う。君に泣き顔は似合わないよ（さっき可愛いとかペロペロしたいとか言ってた奴）

大丈夫ですよ。俺が先輩を護りますから!

同じ視線になるようにしゃがみ、頭を撫でながら囁く。すると先輩は顔を桃色に染めながら満面の笑みで笑う。

「ありがとう!」

うはッ!!?クッ…!!何て先輩だ…!!鼻の奥が一瞬熱くなったぜ…

生徒達の視線が集まっているのに気付いた先輩は顔を真っ赤にして俺から離れる。

「ほ、ほら!何皆ボーッとしてるんですか!行きますよ!早く早く!!」

ああ、恥ずかしい…なぜ俺はあんなことを……いや待てよ…外堀から埋めていくのもいいかも知れんな…

生徒が先輩に「先生たちって付き合ってるんですよね!?」って聞いて付き合っていないというと「えー!?信じらんない!めっちゃお似合いなのにー!」

ってなって俺が「なんかこういうことを言われたんですけど…」「わ、私も…」「じゃあ試しに僕と付き合ってみませんか?嫌だったらすぐに別れてもいいんで」

ここで試しに、ということで難易度が下がるってある恋愛戦争漫画でやってた。

そして交際。そのまま両者特に不満なくゴールイン!見事な作戦だ。よし、これで行こう。

〜〜〜

僕の名前は南雲ハジメ。なんの特徴もない一般的な高校生さ。テンプレの如く世界の危機を救うために召喚された僕達は、状況を飲み込めないままとある大広間に案内されていた。すると美女、美少女のメイドさんが現れ、殆どの男子生徒がメイドを凝視する。

僕も興味はあった。何せリアルではおばちゃんの方が圧倒的に多いのに対し、ここは全員が美がつく女性なのだ。

しかし僕は白崎さんの凍てつく視線を浴びせられたため見ることは叶わなかった。

ふと守山先生を見る。僕はちょっと苦手だけど容姿端麗、文武両道、完璧と言ってもいい先生。なぜそのスペックで教師をやっているのかわからないが…

先生はチラッとメイドを見ただけですぐに視線を畑山先生に向け直し話を続ける。

やっぱりそういうところが女子に人気なんだろうなぁと思う。

イシュタルと名乗った老人の話が始まった。その内容は実にファンタジーでテンプレで、どうしようもないくらい勝手なものだった。

イシュタルは恍惚とした表情でエヒトという神のことを話し出す。イシュタルによ

れば人間族の九割以上が創造神エヒトを崇める聖教教会の使徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。

僕は、神の意思を疑いなく、それどころか嬉々として従うであろうこの世界の歪さに言い知れぬ危機感を覚えていると、愛ちゃん先生が立ち上がり猛然と抗議する。

しかし…イシュタルが発した言葉に先生は絶句する。

「お気持ちはお察しします。しかし…あなた方の帰還は現状では不可能です」

先生はストンと脱力したかのように椅子に腰を落とす。そして場に静寂が満ち、重く冷たい空気が全身に押しかかる。

「嘘だろ?帰れないってなんだよ!」

「嫌よ!なんでもいいから帰してよ!」

「これってドッキリとかそんなやつなんだろ?そうなんだろ!?そうって言ってくれよ!!」

パニックになる生徒達。

僕も精神状態は平気とは言えないけど、そういう創作物を読んでいたため、最悪のパターンではなかったのでまだ心に余裕がある。

因みに最悪なのは召喚者を奴隷扱いするものだったりする。

僕は守山先生を見る。先生は動揺していない。彼はジッとイシュタルを睨んでいる。

彼はイシュタルを見定めているのだろう。確かに彼の目には侮辱の感情が見て取れる。僕のような素人がわかるようなわかりやすい感情を出すなと言ってやりたい。

クラスのリーダー的存在、天之河光輝が戦争に参加することを決意する。それに続き、彼の親友の坂上龍太郎、そして二大女神と呼ばれる美少女の白崎香織と八重樫雫という、クラスのスクールカーストの上位の3人が賛同したことにより、後は当然の流れというようにクラスメイト達が賛同していく。

それを愛ちゃん先生は涙目で駄目だと訴えるが、光輝の作った流れの前では無力だった。しかし…

ダンッ!!と大きな音が部屋に響き渡る。誰もが驚き、その発生源、守山先生へと顔を向ける。

そこからは未知の世界だった。

いつも温厚な先生が声を荒げて光輝を叱ったのだ。マジギレ、ブチギレという奴である。しかしその言葉の中には、僕たち生徒を気遣うことが多々言われていた。そして何よりも心に響いたのは先生の最後の言葉だった。

「最後に覚えておいてほしい。俺たちは教師だ。途中で挫折しても、俺たちを裏切っても…テメエらが生徒であり続ける限り、俺たちはテメエらの味方だ。俺たち教師を頼れ!」

まさに彼は先生として最高の存在だろう。先生は自分よりも、生徒のことを一番に考えている。

光輝が周りで聞く必要はない！やら俺たちで世界を救うんだ！だの理想論を口に出し続けるが、その言葉を誰も聞いていない。そして誰もがこう思っただろう。

流されて決める。これは逃げだと。精神を守るための現実逃避だと。

そして彼は…先生たちはどのような境遇となっても…僕たちの味方であるのだと…

ひとまずこの場では、参加するしないは決定せず、今後ゆっくりと決めていくという方針になり、戦わない者も保護を受けるという言質を先生が取ってくれたため、本当にこれは自己判断となるだろう。

女子は守山先生に光輝以上の熱い視線を、そして男子は尊敬の眼差しを先生に送る。この場に光輝の相手をするのはイシュタルしか存在しなかった。

その後、イシュタルに案内され教会から外に出る。正面門から出ると、そこには雲海が広がっていた。しかし、そんな絶景を見る者は殆どいなく、その殆どは先生たちに視線を送っていた。

「大丈夫ですよ。俺が先輩を護りますから!」

そして守山先生はしゃがみ、愛ちゃん先生の目と同じ高さになるようにし、頭を撫でる。

その瞬間、周りには興奮する女子や、ショックを受ける女子がキャーキャーと騒ぐ。

そして愛ちゃん先生は顔を桃色に染めて、いつもより艶っぽい満面の笑みで…

「ありがとう!」

うおおおおおおおおお!!!!!

イシュタルが呆れた顔で騒ぐ僕たちを見ていた。

俺はロリコンか？　否、否、否!!

ロープウェイ的なやつで神山を降りた俺たちは、ハイリヒ王国の王宮に訪れ、玉座の間に案内された。

無駄に煌びやかな両開きの扉の前でイシュタルが勇者一行が来たことを大声で告げて返事も待たずに扉を開け放つ。

「先輩…これは…」

「うん…嫌な予感が…」

イシュタルは俺たちを引き連れ、すぐに王らしき人間の側に寄っていき手を差し出す。そして王らしき男がキスをする。

ここで俺たちは宗教が統治する国だということを悟った。

頭に不安が過ぎる。ピラミッドなどのような成功した宗教国家もあるが、清王朝の滅びの原因ともなった儒教。その宗教の教えか何かで中華思想がなんちゃらかんちゃらで、中国が火薬を発明したというのに、銃や大砲として実用化出来なかったとかなんたら（うろ覚え）

まぁどうでもいいか。しかしこれからこの世界の聖教教会とやらも調べて行ったほ

うがよさそうだ。今のところ帰還出来るかは不明なため、この世界で生涯を過ごすということもあるかも知れない。それなら先輩には安全に暮らしてほしいからな。俺が四六時中見守っといてやるよ!（唐突なストーカー発言）

その後は自己紹介やらこれからよろしく頼むやら挨拶を終え、自分の部屋となる場所へ案内される。

出来れば先輩と同じ部屋のダブルベッドで一緒にイチャイチャしながら寝たかったが、文句を言っても仕方ないので一人で寂しく謎に広い天蓋付きベッドで寝た。広過ぎて落ち着かなかった。

▽▽▽

次の日は座学と、一応戦争に参加しないとしても自衛手段は必要ということで訓練が始まった。

朝、集まった俺たちに銀色のプレートが配られる。どうやらこれはステータスプレートという、ゲームとかでよくあるヤツのようだ。ステータスを見る以外にもマイナン

バー的な身分証明書になるとか。

しかし騎士団長メルド・ロギンスだっけ？彼渋いね。渋メンだわ、マジで。歳上とか渋めなおじ様が好きな女性にはドストライクだろう。高収入だろうし。欠点はいつ死ぬかわからないことだろうか。騎士なんて危なそうな集団のトップだから仕方ないね。結婚したらその奥さん人質に取られそう。

どうやらこのステータスプレートは血を垂らすことで発動する、現代では再現出来ない神代のアーティファクトというやつらしい。原理わからんとかこの仕事やめたら？

（理不尽）

取り敢えず言われた通りに針で指を刺し、血をステータスプレートに擦り付ける。すると…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

守山誠　２４歳　男　レベル　：　１

天職　：　忍者

筋力　：　１０

体力　：　４０

耐性　：　１８０

敏捷　：　２００
魔力　：　１４０
魔耐　：　３０
技能　：　影分身の術・隠れ身の術・空蝉の術・変化の術・火遁の術・気配遮断・言語理解
＝＝

アイエエエ！ニンジャ!?ニンジャナンデ!?

俺が隣でニンジャリアリティショックに陥っていると、畑山先輩が作農師？農業関連のことかな？と首を傾げている。可愛い。

メルド団長が説明を続ける。さて、前回教えたように3行で纏めてみよう。

○この世界でのステータスの平均は１０
○戦闘職は貴重であり、生産職はそこまで希少ではない
○レベルの最高値は１００、そしてレベル関係なしに鍛錬やらでステータスは上昇する

である。レベルを上げても鍛錬しないと強くなれないというなんともめんどくさい仕様である。こんなゲームあったらそれ多分クソゲーだな。

あと纏められなかったのでここで言っておくが、城の宝物庫を全開放するらしい。序

盤から最高レアの武器入手とかマジクソゲーだな。

そして話が終わればステータスの報告会が始まった。まるで見せしめだな！これでステータスが低かったらイジメの元になるんじゃないか？一応先生としてイジメは見過ごせないのでメルド団長に提案してみた。

「あー…そういう問題は考えていなかった。すまない。ステータスが低くても皆の前では何も言わないようにしよう」

やったぜ！

順調に生徒たちは報告を終えていく。一瞬南雲のステータスに眉を潜めたが、小声で何か言った後、特に何も起きず報告は終了した。メルド団長に言っておいて正解だったかもしれない。

▽▽▽

あれから一週間が経過した。時の流れは速いものである。しかし技能の影分身は便利だ。ＮＡＲＵＴＯの影分身とほぼ同じ性能を持つ、所謂壊れ技である。いつかこれ修正されない？大丈夫？

分身が消えることで、記憶が本体に引き継がれるため、経験も俺に引き継がれるのだ。つまり、ＮＡＲＵＴＯで螺旋手裏剣の時にしていたあの特訓法が実現出来るのだ。しかも消費魔力はかなり少なく、魔法というか忍術を分身も使えるため、熟練度がもううなぎ登りだ。最初は膨大な情報に酔ってしまったが…

もちろん図書館にも俺の分身は存在している。他人の迷惑も考えて5、6人といったところか。図書館には生徒は南雲とそれを見守る白崎しか訪れていない。まったく…怠惰ですねぇ。

メルド団長に教えてもらったことだが、南雲のステータスはオール１０と平均値であり、天職もありふれた錬成師で、戦いには向かないそうだ。

先輩は戦いに向かわせたくないと言うが、俺は南雲の意思を尊重しようと思う。親ならまだしも教師にこれからを決める権利はないからな。

それよりも白崎とは今度二人きりで話したい。俺と同じシンパシーを感じる。

そして俺は今、新しい試みに挑戦している。影分身が出来るのなら螺旋丸も出来るのではないかと。

ＮＡＲＵＴＯでは水風船やらゴムボールを使っていたので、真似して水風船から始める。人数は１０人、これなら3日ぐらいで破れるのではないだろうか。

と思っていたら思いのほか早く出来た。ゴムボールもだ。チャクラと違い魔力は外に出すことが容易い。それに複数人で、少しでも出来ればそれを受け継ぎ、試行錯誤すること一週間、螺旋丸を完全に習得した。やったぜ！

破壊力はマチマチだがそれはしゃあない。螺旋手裏剣は諦めましょう。あれは無理です。そこまで根気ねぇから！

火遁はそこそこ。火遁豪火球の術を再現出来たが、威力は初期のサスケくんよりも低いだろう。しかも集団戦や模擬戦では使い勝手があまり良くないため、そこまで使用していない。

そして今話している俺が何処にいるか、君達は分かるだろうか…

ここだぜ!! 畑山先輩の後ろで気配遮断を使い彼女を見守っている。悪い虫でもついたら大変だからな。それに俺召喚された日にちょっとやらかしたからな。なんか裏で

暗躍してるかもしれんし彼女を人質にされたら俺は何も抵抗出来ない。ならば俺は彼女の安全を守らねば!!ついでに俺はロリコンではない。

ということで彼女をストーキングしている。ずっと発動しているため、かなり熟練度も上がり、新しい技能『完全気配遮断』を獲得した。ドラえもんでいう石ころぼうしのようなモノだな。生徒の中に遠藤浩介という影の薄いアサシンがいるのだが、ソイツよりも影が薄くなるといえば凄さが分かるだろう。

暗殺者はニンジャの下位互換、はっきしわかんだね。

ニンジャー…イヤーッ!!（迫真）

▽▽▽

訓練施設で何か異常がないか見守らせている分身から連絡が入った。檜山達四人組が南雲をボコボコにしたらしい。（語彙力）

おのれ檜山!許さん!!やってしまえ分身の俺!!（ピロロロロロー

ということで檜山達には俺の分身達とエンドレス訓練を始めた。今からの明日の朝

までだ。これに懲りたらイジメなんてものはやめて欲しい。イジメをする奴なんて兄姉だけで十分だぜ。
しっかりメルド団長の許可もとったのでよし！
俺の物量に呑まれて消えろッ!!
そういえばメルド団長がオルクス大迷宮に一度遠征に行くって言ってたな…俺は行かんでいいか…畑山先輩は絶対ここにいるしな。保護者代わりに分身を付けてやるか…

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

守山誠　２４歳　男　レベル　：　１８
天職　：　忍者
筋力　：　２８
体力　：　１１０
耐性　：　２８０
敏捷　：　４００
魔力　：　４２１

魔耐　：　６４
技能　：　影分身の術・隠れ身の術・空蝉の術・変化の術・火遁の術・気配遮断［＋完全気配遮断］・風遁の術［＋偽・螺旋丸］　・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

～～～
僕、南雲ハジメは困惑していた。自身の能力を数値化するステータスプレートをもう一度見直す。全て、オール１０という平均的な数値だったからだ。あれー？これってテンプレ的に強力な能力を持ってるんじゃないの？
勇者の光輝のステータスはオール１００と僕の１０倍もあり、技能も沢山ある。光輝以外の生徒達も、僕のステータスの倍もある。
自分の番が来た。メルド団長は僕のステータスをみた瞬間、眉を潜め周りに聞こえないように小声で錬成師という天職のことについてを教えてくれた。
錬成師の評価は低く、宮廷にもお付きの錬成師が何人かいる程の、ありふれた職業なのだとか…ちょっと泣きそうになったけど、メルド団長に励まされ、なんとか耐え列に戻った。これからどうしよう…

ひとまず戦闘ではあまり役に立てなさそうなので、まずは知識を身につけることにした。図書館に篭り、錬成師のことが載ってある本や、魔物図鑑的なモノを読んでいく。

すると、バタンッという音が聞こえ、守山先生が入ってきた。先生もこの世界の知識を身につけようとしているのだろうか。

「お、南雲じゃねえか。ん？勉強中か？勤勉だな。だがそれを学校でもして欲しかったんだが…」

「ハハハ…すみません…」

「じゃ、せいぜい励めよ」

「ハイ」

先生は僕から離れていき、高い場所から数冊取り出し、少し離れた場所にて5人いる守山先生が座ってる隣の席に座った。

僕も頑張って役に立てるようにしないと…!!

ん?何かおかしいような…もう一度守山先生の方を見る。一人…二人三人四人…五人六人…

「ってええ!!?」

「ンンッ!!」

「あ、すみません…」

何故か増えている守山先生を見て驚きの声を上げ、司書さんに怒られてしまった。いや、けどこれはしょうがなくない?

二週間が経った。廊下には所々に歩いている守山先生の分身が練り歩いていた。まさにカオス！

伸びないステータスに不満を持ちながらも、今日も今日とて訓練へと向かう。

訓練施設には自主練する生徒がいたり、雑談している生徒達もいる。どうやら集合時間はまだ先のようだ。しかし珍しくここには守山先生がいない。大抵何処かにいるというのにどうしたのだろうか…

するといきなり、背後から衝撃が走る。急過ぎた為、反応出来なかったらが、運良く支給された西洋剣で杖の代わりに重心を支える。

「よぉ、南雲。なにしてんの？お前が剣持っても意味ないだろが。マジ無能なんだしよ～」

「ちょっ、檜山言い過ぎ！いくら本当だからってさ～、ギャハハ！」

「なんで毎回訓練に出て来るわけ？俺なら恥ずかしくて無理だわ！ヒヒヒッ」

「なあ大介。こいつさぁ、なんかもう哀れだから、俺らで稽古つけてやんね？」

振り返るとそこにいたのはいつもの檜山率いる小悪党四人組。何がおかしいのかゲラゲラと笑っている。

元々メルド団長が皆に公開しなかった為、最初は何も言われていなかったが、同じ場

で訓練を続けていると、皆と僕との差が開き始め、気づかれてしまったのだ。突如、強力な力を持って自分に酔っているのか、よく僕に絡んでくるのだ。

檜山が僕に稽古をつけてやると言われる。彼が善意でそんなことをすると思えない。嫌な予感がして、やんわりと断るも、逆に上から目線で時間を作ってくれてありがとうございますだろ?と言いながら脇腹を殴られる。痛い…

そのまま僕は建物の死角になる人気のない場所に連れられ、彼ら全員から暴力を振るわれる。

背中を剣の鞘で殴打される。

炎の魔法、火球で燃やされる。

風の魔法、風球で吹き飛ばされる。

腕に激痛が走る。

腕から嫌な音が聞こえる。

頭を打たれる。

気を失いかけると、水球で水を被せ、窒息させようと顔の周りを覆う。

なんとか抜け出すと腹を蹴られ、飲んでしまった水を胃酸と共に吐き出す。

さらに稽古という名のリンチが続く。何故僕はこんな目にあってるんだろう…痛みの感覚も徐々に失っていく。

早く気絶しないかな…気絶したら全部…我慢したら全部終わる…

「ゲピッ!?」

そう意識が朧げになってきた時、檜山が何者かに吹き飛ばされる。

その殴り飛ばした人物は、召喚された日にも勝るとも劣らない怒気を含んだ顔で口を開いた。

「テメエら何やってんだ?」

「南雲くん!!」

白崎さんが必死な顔で走りより、僕に治癒魔法をかけてくれた。痛みが引いていき、感覚が戻ってくる。八重樫さんも白崎さんの横で僕のことを心配してくれている。坂上くんは下手人に呆れ、天之河くんは僕に非があるんじゃないかと言い放ち、小悪党四人組と一緒に叱られている。

結果、子悪党四人組は、一人一人守山先生に一発ずつ殴られ、明日の朝までエンドレス組み手の刑に処された。

けど、守山先生の言ったあの言葉…「大いなる力には大いなる責任が伴う」。

まさに的を得てる言葉だと思う。突然強大な力を持ったのだから、自分の好きに使いたいのはわかる。けど、好き勝手に使い続ければいずれ自分に全て返ってくる。力を持つこと自体は悪くないと思うけど、呑まれてしまうと、気づいた時には大切なモノを

失ってしまうだろう。

先生ってスパイダーマン好きなのかな?

けどあのエンドレス組み手は正直言って引いた。１００人くらいの先生が一斉に「イヤーーッ!!」と叫びながら檜山達に襲い掛かるのだ。檜山達は泣き喚きながら応戦していたが、物量に押されついには見えなくなり、悲鳴も遂には聞こえなくなった。南無三…

俺がロリコンとでも思ったか！マヌケがァ〜〜！

今日、生徒達は、【オルクス大迷宮】へと挑む為に遠征に出掛けている。ホルアドとかいう宿場町で泊まるそうだ。彼らにはいざという時の為に分身を3人着いて行かせたが、何やら胸騒ぎがするのは気のせいだろうか。

まぁ原因はわからないしどうしようもない。分身の俺を畑山先輩の部屋周辺に配置しておいたしひとまず寝るとするか…

〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜

マズいことになった。順調にオルクス大迷宮を進んでいた俺たちは天之河の一撃で、崩落した場所でグランツ鉱石という綺麗な鉱石を見つけたのだが、檜山が暴走してトラップ確認せずに触れてしまい、トラップが発動して何処かの階層に転移してしまう。

本当にいらんことをするのはやめて欲しい。分身として扱き使われ、畑山成分が補給出来ない今の状況でコレはないわ…やる気でねぇ…

「あれは…ベヒモスなのか…？」

恐竜のトリケラトプスのような姿をした、メルド団長が呟いたベヒモスというモンスターは咆哮をあげた。

「グルァァァァァァァァァ!!」

うるさい。おい、誠ツー。消えて本体に伝えろ。確かベヒモスってのは６０何階層の現時点で最強とも言われる魔物だったはずだ。はよ。

了解。

分身の俺が一人消える。これで本体の俺に今の状態が伝わっただろう。

すると背後からさらに大量のスケルトンみたいなヤツが現れる。あ、コレ図鑑で出てたやつだ！（ベネッセ）

たしかトラウムソルジャーってやつだったはずだ。

およそ…数百体…

ここは橋のような場所の為、まさにこれは全門の虎後門の狼だ。

「アラン！生徒たちを率いてトラウムソルジャーを突破しろ！カイル、イヴァン、ベイル！全力で障壁を張れ！奴を食い止めるぞ！誠は分身で奴の注意を逸らしてくれ！光輝、お前たちは早く階段へ向かえ！」

「了解した。増えよ、我が半身、〝影分身の術〟!!」

「「「ーーーー〝聖絶〟!!」」」

ドロンッと煙が立ち、中から数百の俺の分身が現れる。皆俺が指示することがすぐにわかったようで、全員嫌そうな顔で俺の命令を待っている。

「足止めするぞッ!!」

分身達は皆、嫌ーッ!!と叫びながら、展開された光の壁を乗り越えてベヒモスへと突っ込んでいく。出来るだけ攻撃が当たらないように動くが、図体もデカく、意外にも俊敏な為、次々と分身達がやられていく。

「グワーッ!!」

「アイエエエ!?」

「おい！落下する奴はすぐに消えろッ!!本体にまで影響が出ちまうッ!!」

クソッ!!マズいなコレは…分身達がまるで紙屑のように…!!

「先生!俺も戦います!あの恐竜が一番ヤバイでしょう!俺たちも…」
「勇者だがなんだかで自分の力量を見誤るんじゃねえ!!テメエらじゃ勝てねぇ!!俺たちでも…なァッ!!」
突然、周りで気を逸らしていた分身達を無視し、ベヒモスは騎士によって張られていた壁に衝突する。
「くそッ!!」
凄まじい衝撃波が起こり、殆どの分身達が奈落へと落とされる。追加で増やすも、既に時は遅く…
「グラァァァアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」
赤熱化して真っ赤になった頭部を壁に叩きつけることで、聖絶が破られてしまった。
「クッソ!!いいから下がれ天之河!!」
「嫌です!!団長達を置いていくわけには行きません!!絶対、皆で生き残るんです!
はああッ!!
神意よ!全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ!神の息吹よ!全ての暗雲を吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ!神の慈悲よ!この一撃を以て全ての罪科を許したまえ!ーーー〝神威〟!!」
俺とメルド団長の指示を無視して天之河は光の極光を放つ。それはベヒモスを飲み

込み、天之河が「やったか?」と呟く。
おい馬鹿やめろ!それフラグだ!!
砂煙が次第に晴れていき、無傷のベヒモスが現れる。
「危ないッ!!」
俺は天之河を押し飛ばす。クッソ…ここで終わりか…最後までいたかったんだが…
無理か…分身も全員蹴散らかされた
次の瞬間、俺の視界には何も映らなくなった…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜

頭に情報が流れ込んでくる。分身の俺が全てやられた。これは本格的に不味くなっ

てきたぞ…!!
　ひとまずオルクス大迷宮に一番近くにいる分身に向かうように命令し、俺は畑山先輩に知らせる。
「先輩!!」
「ピャッ!!?
!!い、いつの間にそこに!?」
　俺はロリコンではないが、反応が可愛い。しかしそれどころではない。
「生徒たちに同行させていた分身が消えました!!現在転移トラップを起動させてしまいベヒモスという確認されている中で最も強力な魔物と交戦中です!」
「な、本当に!!?」
「本当です!!ひとまず近くにいる分身に向かわせたのですが…恐らく間に合わないでしょう…」
「そ、そんな…」
「今は分身からの連絡を待つしかないです…」
　ああ…これは俺の失態だ…本体の俺が大迷宮に行っていればまた結果は変わっていたかもしれない…それに俺にもっと力があれば…
　無事に全員帰ってきてくれ…!

～～～

「天之河くん!」
「なっ、南雲!?」
「南雲くん!?」
皆が僕が来たことに驚いているけど、そんなのに構っていられる時間なんてない!
「早く撤退を!皆のところに!君がいないと!早く!」
「いきなりなんだ?俺のせいで先生がやられたんだ!なら俺がその責任を取らなきゃならない!それより、なんでこんな所にいるんだ!ここは君がいていい場所じゃない!ここは俺たちに任せて南雲は…」
「そんなこと言ってる場合か!?」
胸ぐら掴んで叫ぶ。天之河くんは何もわかっていない!
「君は先生が言っていた言葉の意味がわかってないの!?先生は引けって言ってたよね!?君がすぐに引いていれば先生はまだここで時間稼ぎを出来てたさ!!それに後ろを見て!!みんなパニックになってる!リーダーが、統率出来る人がいないからだ!!
一撃で切り抜ける力が必要なんだ!皆の恐怖を吹き飛ばす力が!それを出来るのはリーダーの天之河くんだけでしょ!前ばかり見てないで後ろも見て!!」
呆然と混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見た天之河くんは、ブンブンと頭を振ると頷いた。

「ああ、わかった。すぐに行く！メルド団長！すいませんが先に撤退します!!」
「ああ!!さっさと下がれ!!こっちももう限界だ!!俺たちはお前らを失うわけにはいかんからな!!」
　そう言って撤退する天之河達に、メルド団長が相槌を打つ。僕はすぐにメルド団長に案を伝える。
「…出来るのか？」
「はい、出来ます!!」
「そうか…では任せる!!絶対に生きて戻れよ!!」
「団長ッ!!もう持ちませんッ!!」
「来るぞ!!」
「グルァァァ

「〝錬成〟!!」
床には熱がまだ残っており、僕の肌を焼くけど、それを無視して錬成を続ける。
ベヒモスは埋まった頭を引き抜こうとするがそれは叶わない。なぜなら…
僕がいるからだッ!!
頭を抜こうとするベヒモスに、壊れる床を錬成で直していく。決してその頭を抜かせない!!

さらに隆起した地面はベヒモスの上半身を埋め込んでいく。
チラリと後ろを見ると、もう既に全員階段前に避難は完了している。ならそろそろだ……タイミングを見計らう。一度しかチャンスはない。やってやる…!!
「今だ!!」
数十度目の亀裂、その瞬間に最後の錬成を放ち、僕は一気に駆け出した。
ベヒモスはすぐに拘束を破り、地面から這い出る。僕との距離は一瞬で詰められるだろう。一人なら。
「放てぇえええ!!」
メルド団長の声が響くのと同時にあらゆる攻撃魔法の雨がベヒモスに殺到する。ダメージはないだろうけど、これで足止めは出来ているはずだ!!

クイッと一つ、魔法が軌道を逸らす。

「え？」

それは僕の目の前に炸裂し、来た道へと吹き飛ばされてしまう。や、やだ…!!ここで…死にたくない…!!

ベヒモスの凄まじい咆哮が鳴り響く。思わず振り向いて見てしまった。腰が抜けてしまう。動けない。

助からない…

最後に見たのは僕に手を伸ばして泣き叫ぶ白崎さんの顔だった…

～～～

死んだのが無能でよかったと王の間でほざいた貴族がいた…それを俺は許すことは出来なかった。

「よかっただと!?何がいいんだよこのクソ野郎!!」

貴族の胸ぐらを掴みながら叫ぶ。

「命に優劣をつけんじゃねぇよ!!」

「先生落ち着いてください!!」

生徒達に抑えられる。でもそれでも気が治まらない。傍観している王にも忠告する。

「テメエら人ごとだと思ってんじゃねえぞ?俺がその気になりゃあこの国を滅ぼすことも容易いんだぞ?俺が手を下さずにもな…!!偽の情報をありとあらゆる国に報告すれば連合軍との戦争が起きる…!!魔人族にも情報を売り渡すことも出来んだ…!!発言には気を付けろよこの蛆虫共!!次に俺が聞けばどうなるか、俺を敵に回すとどうなるかキチッと考えとけよ!!?わかったな!?」

「守山殿…!!気をお鎮めください…!其奴のようなハジメ殿を罵った人物は処分致しますので…!!どうにか寛大な処置を…!!」

「フゥ…ああ。もういい」

少し熱くなり過ぎた…生徒の前で何やってんだか…

しかしこれは俺も…覚悟を決めんとだな…

▽▽▽

一人、部屋で過ごしているとドアがノックされる。どうぞ、というと入ってきたのは白崎だった。

「白崎…? 起きたのか。体調はどうだ?」

「はい、大丈夫です…」

迷宮から戻ってきてから白崎は5日も寝ていたのだ。肉体には傷がなく、医師が言うには心の問題だとか。

「先生…私の代わりに怒ってくれてありがとうございます…雫ちゃんから聞きました…」

「ああ、八重樫から聞いたのか…」

「率直に聞きます…先生は南雲くんが死んだと思ってますか?」

「本当に率直だな…あの高さじゃ生存は絶望的だと思う…」

「先生…私の目を見てください」

そう言われて白崎の目を見る。そして驚いた。彼女の目には決意した人間の目をしていたのだ。まるで便秘気味だった母がトイレという戦場へと向かう時のような…

「私は貴方を責めません。本来ならあんな危険な目に遭いませんでしたし、誰も想定してなかったことですし私は気にしてません。

だからいつものように明るくいてください。南雲くんは死んでません！私は南雲くんが死んだなんて信じません！だからいつも通りの先生でいてください!!」

白崎の目から涙が流れる。そうだな…そうだよな…誰も南雲が死んだなんて確認してないしな…。生きている可能性はゼロじゃない。彼が帰ってくる時、笑顔で、いつも通りの俺で迎えてやらないとな…

「ああ、わかった…南雲は死んでいない…そう信じよう。だが生きていてもかなりの下層にいるだろう。助けに行けるように、強くならなくてはな…」

「はい…!!」

髪を撫でる。少しドキッとしてしまったのは悪くないだろう。俺も独自に動こう。先輩も守りながらな…

今度はもう誰も取りこぼさない…!!

俺がロリコンだと思っているのか?

　オルクス大迷宮から脱出した生徒達は、無事に出れたという安堵感から座り込んでしまう。中には大の字になり倒れる者や泣き出す者もいる。騎士達も同様に座り込んでしまう。俺もかなり疲労し、倒れ込みたい気持ちもあったが意地で立つ。ここで自分が倒れてしまうと、生徒たちが不安に思ってしまうかもしれないからだ。
　そして何よりあそこはまだ深層と言っても中間地点でしかないのだから…
「皆!!無事か!?」
　そう言って現れたのは誠だった。安堵から喜びあっていた生徒たちの目付きが変わる。それに気付いた誠はすぐに顔を歪めながらも、俺にあの後何があったか事情を聞いてくる。
　話すのを躊躇いかけたが、全て話すと誠の顔は真っ青になり冷や汗を垂れ流す。
「南雲が…奈落に…」
　誠はすぐに分身を出して消す。情報を本体と共有したのだろう。そしては誠は生徒たちの前に立ち、深く頭を下げる。
「本当にすまなかった…!!俺が…!!本体がいなかったばかりに…!!」

生徒たちの眼光が鋭くなる。
「困った時は…困った時は頼れって言ってたじゃないですかッ!!なんで先生は私たちが本当に困っている時にいないんですか!?」
一人の女子生徒の叫びを皮切りに生徒達から罵声と怒号が飛び交う。誠はそれを頭を下げながら全て受け止める。
見損なった！
あれは口だけだったのか！
先生はどこで何をしていたんだよ！
俺たち死にかけたんだぞ!?というか一人死んだんだぞ！

「落ち着けッ!!」
俺の一喝に生徒達は気圧され、皆誠から視線を俺に移す。まったく自分が情けなくなる。彼らはまだ子供なのだ。この世界のような争いのない世界からやってきた学生なのだ。なのに俺たちは勇者だ御一行だとまくし上げ戦いを強要する。魔人族を我々は悪としてきたが彼らから、第三者からすれば我々が悪ではないか…！

「誠…いや、守山先生…この度は生徒を危険に晒し、挙句には生徒を一人失ってしまい…誠に申し訳ありません…!!」

頭を深く下げる。誠よりもだ。俺が彼にあんなことを言ったばかりに…

誠は頭を上げるように言うが俺は上げない。ケジメを付けておきたいのだ。彼が自分のせいで教え子に責められるなど見ていられない。

「俺が守山先生に『今回は二十階層までしか行かないからついてこなくても大丈夫だ、俺たちが生徒たちを何があっても守るからな』と無責任にも言ったばかりに…生徒を…大事な教え子を失ってしまった…本当にすまない…!!」

「いや、俺も影分身の力を過信しすぎていた…天之河に言った本人がこうとは…そんな自分に反吐が出る…メルド団長に聞かずに同行すればよかっただけの問題なんだ。団長には何の非もない…」

俺は誠には少しでも休んで欲しいと思っただけなのだ。彼は四六時中、分身で城の警備、生徒の安全を守る為に見回り、各地での情報収集、護衛、この世界を知る為に勉強など、様々なことをし続けているのだ。本人は消費魔力が少ないから大丈夫だと言っていたが、彼がいつもフラフラになって部屋に戻っていることを俺は知っている。チリも積もれば山となるという教えてもらったことわざはこういう時に使うのだろう。

それが裏目に出て、しかも彼が大事にしている生徒を失ってしまった。俺は彼にどう

顔向けしたらいいのだろうか…

「それでも…だ。俺が悪いことには変わりない。皆も先生を責めるのではなく、俺を責めてほしい…俺の監督不行き届きだ」

沈黙する生徒たち。その静寂を破ったのは意識を失った香織を背負った雫だった。

「皆、もうやめましょう…彼らを責めてもどうにもならないわ。先生は神様でもなんでもない私たちと同じただの人間なのよ? 先生にだって手が届かない範囲だってある。今回のことだってちゃんとメルド団長の指示に従っていればこんなことにならなかったのだし、今先生たちを責めるのはお門違いよ。ねぇ檜山くん。さっき先生に怒鳴ってたけど貴方がメルド団長の指示を待ってグランツ鉱石に触れなければそもそもこんなことは起きなかった。違う?」

「いや…それは…えっと、そのー…」

いきなり矛先が大介に移ったため、彼は動揺しているが、すぐに止めに行かなかった俺も悪い。トラップの危険性も、どのような物があるかも説明不足だった。

「いや、それは檜山にも非があるかもしれんが俺が説明不足だったこともある。彼を責めないでやってくれ。

取り敢えずこの話は後に置いておいてひとまず城へ戻ろう。王にも話をしなければならない。今日は宿でゆっくりと休んでくれ。明日には町を出発する」

生徒達はそれに従ってトボトボと歩き出した。それを見ながら俺は無力感に打ちのめされていた…

～～～

たが、最終的には彼らは納得してくれた。
取り敢えず大きなリュックを持ち、中に必要になりそうな道具を入れていく。中身は殆ど魔力回復薬ばかりだが…
そしてリュックを背負い訪れたのは俺たちが呼び出された神山である。何故俺がここに訪れたのか…それは修行をする為である。
本体が城から席を外す為、彼らの確認が必要だったのである。因みに分身は百体ほど城に置いてきた。しかしそれでも前と同じ過ちを繰り返さないように、五人組というチームを作った。分身が行動する時は常に五人行動。一人は普通にいてもらい、後の四人は気配完全遮断で追いかけてもらうというチームだ。これであの時のようなミスは起きないだろう。
因みに頻繁になった先輩の仕事には、護衛の分身を十人程付けている。勇者の次に狙われそうな希少な天職だからしょうがないね。
ひとまず神山に登り、食べられそうな木の実や、ゼンマイのような食べられる野草を集めていく。今回の修行での食糧はその場で現地調達しようと思っている。なんか修行っぽいし。
今回の修行の最終目標はＮＡＲＵＴＯの仙人モードもどきだ。たしか自然エネルギーを外部から取り込むことで会得出来るものだったはずだ。

ならば神山で修行すれば結構いい線行くんじゃないかと試していく次第だ。今回の試みは失敗したとしても何かに役立つだろう。

適当な場所で岩の上で瞑想し、付近の魔力を感じる。これはすぐに出来た。そして取り込む。これが難しい。神山は通常の場所よりも魔力濃度が高い。それを体にそのまま入れようとすれば体が悲鳴を上げる。まぁそれでもやるしかないのだが…

影分身込みで二週間かけてやっと魔力を好きなように取り込めるようになった。これで影分身の魔力は困らないだろう。さらに修行する分身を増やす。俺はナルトのような才能も力もないのだ。魔力に際限がなくなったのだからもっと効率よくしないと獲得に年単位掛かってしまいそうだ。

最近ちょうどいい幅広い滝を見つけた為、螺旋手裏剣の練習も並列して始めたがめちゃくちゃ難しい。螺旋丸の比じゃない。これ、終わるのいつになるのだろうか…

▽▽▽

あれから一ヶ月経った。あれから俺は周囲の魔力の中に紛れ込む微かな反応しか示さない存在を感じることを目標に瞑想を続けてきた。そしてそれを三週間かけて見つ

け、そこから今までそのエネルギーを取り込むことを繰り返している。しかし分量を間違えたり集中が少しでも乱れてしまうと自然エネルギーに呑まれ魔物のような異形の姿になってしまう。

今ではかなり扱いをマスターしつつあり、現在は岩を削って剣山のようなモノを作り、その上に石板を乗せ座禅を組んでいる。ＮＡＲＵＴＯでもやっていたやつだ。

螺旋手裏剣の方は一旦中止している。二兎追うものは一兎得ずとも言うしな。あれは並列してやるには無茶だ。改めて、仙人モードもどきが使えるようになったら練習することにする。

というか最近幻覚が見えて来てヤバイ。先輩がなんか現れたり美味そうな飯が見えたり…なんだ俺…疲れてんのかな…（疲労困憊）

偶に騎士みたいな賊が襲ってきたが、そんなことはどうでもいいか…

それよりもかなり大きな洞窟を見つけた。中にかなりの数の影分身を向かわしたので、もう少しで連絡が…

中にドラゴンがいるらしい。一応対話出来るかどうか試したらしいが、問答無用で襲いかかって来たらしい。乱暴はやめてよね！相手は分身達に任せ、俺は虫や山菜を回収していく。虫は貴重なタンパク質だ。

▽▽▽

自然エネルギーを操作し始めて三ヶ月程、ついに俺は仙人モードもどきを会得することが出来た。魔力と自然エネルギーを練り上げて作り出したものの為、ＮＡＲＵＴＯのものとは少し違う。

まあ性質はほとんど変わらず、仙人モードには原作同様弱点がある。動くと自然エネルギーが供給出来ないというデメリットは原作同様影分身で対処する。あのドラゴンがいた洞窟が自然エネルギーに満ち溢れており、そこで分身達が自然エネルギーを貯めて座禅を組んでいる。

あとドラゴンは襲い掛かってきたけどなんか力を試してみただけなんだとか。なんか倒したら契約を結んでくれた。いつでも我を呼び出せとか…呼び出す機会はないだろうけど…

肌は何故か硬質化し鱗のようになり、顔の隈は目尻と眉の上に現れた。オデコには殺という形の隈も出来た。ダッサ!!やめてよそんなの!恥ずかしいので発動する際にはバーダックのようにバンダナを付けておく。

さて、ひとまずここですることは終わったな…早くリアルで畑山先輩をみたい。ペロ

ペロしたい、抱きしめたい。俺はロリコンじゃないが。
そういうことで今日は四ヶ月ほどぶりに城へと戻るのだった。
ええい！鬱陶しいぞ鳥め!!纏わり付くんじゃない!!

＝＝＝

〜〜〜

んな先輩の断りもなしに勝手に出て行くことは俺には出来ません。どうか、お願いします!!」

そういい深々と頭を下げる守山くん。こうして彼は私に頼るのはいつぶりだろうか…いや、初めてだった。

「守山くん…。許可を出す代わりに約束して欲しいことがあります。無茶をしないでください。定時連絡を分身でいいのでとってください。何かあれば…先輩である私を頼ってください。メルド団長から聞きました。私たちに負荷が掛からないように国からの依頼を沢山こなしてるって…

私を舐めないでください！貴方にそこまで過保護になられずとも私はここで生活していけます!!仕事だってやってみせます!!

だから…だから私を頼ってください！私は貴方と同じ先生でもあり、それ以前に先輩なんです！困ったことがあれば私は貴方に力を貸します！頼ってくれれば貴方に何処までもついていきます!!

だから…一人で全部背追い込まないでください…!!」

彼を一喝する。視界が少し歪むが気にしない。守山くんの体が震える。

「ハイ、頼らせてもらいます…先輩…！」

震えた声で返事が返って来た。啜る音も聞こえるけど、それは聞かなかったことにし

よう。

守山くんは王様とイシュタルさんに、依頼の受ける量を増やすのを条件に、心が折れてしまった生徒たちへの訓練の免除と神山への入山許可をもらった。勿論私も手伝います。生徒たちに危険な目に遭わせたくないし、守山くん一人で抱え込んで欲しくないですから!

その後、生徒たちにこの事を伝えるために、王宮の大広間に全員を集めて守山先生が皆に全て話しました。反応は皆薄かったです。それどころか守山先生を冷ややかな目

で見ている生徒もいます…

「以上だ。後、最後にもう一度謝っておく。本当にすまなかった！メルド団長はああは言ってくれたが俺は自分に非があると思っている…安全だと言われていても、今回のようなイレギュラーが起きる可能性も考慮して本体の俺が同行すればよかった…今こう、たられば を言っても後の祭りだというのはわかっている…こんな俺だがまた、教師として君たちと寄り添っていきたいと思っている…俺を許さなくていい、君たちからすれば当然の感情だ。だが、俺は今度こそは手から零れ落ちないように努力して行こうと思う…」

頭を深く下げる。殆どの生徒は戸惑いの表情を浮かべているけれど、数人はまだ厳しい目を守山くんに向けている。けどそれも仕方のないことだということはわかってる。私たちは生徒たちが命がけで戦っていた時は城で次の日の仕事に備えてゆっくりと準備していただけなのだから…

「先生、顔を上げてください。昨日の話、こっそり聞いてしまいました…すみません」

そう言ったとは八重樫さんでした。昨日の話ということは私の…!!?

恥ずかしくなって顔が赤くなってしまう。

「先生は私たちの負担が減るように今まで動いてくれてたんですよね？なら私たちが先生に何かを言う権利はありません。充分先生には無意識だったとしても頼らせていた

だきました。なら今度は私たちが先生を支える番です」
「そうですよ!南雲くんは死んでなんかいないんだから先生が気に病むことなんて何もありません!人間なんですから一つや二つ、間違えぐらい皆してますから!ね、皆!」
　クラス内でも男女問わず人気のある二人が守山くんを庇ったことにより、残りの生徒たちも「確かに先生に頼り過ぎてたかも…」と八重樫さんと白崎に賛同していく。
「まだ香織は南雲の事を言っているのかい?もう彼は死んでしまったんだ…いつまでも彼の事を引き摺っているといつか君の心が壊れてしまう…香織、大丈夫だ。俺がそばにいる。俺は死んだりしない…もう誰も死なせはしない。香織を悲しませたりしないと約束するよ」
　天之河くんがいきなり南雲くんの事を白崎さんの前で掘り返したため、八重樫さんが止めるも天之河くんは止まらなかった。
　しかしその暴走を止めたのは意外な人物だった。
「天之河…恐らくだが南雲は生きている」
「な、何を根拠に!?」
「実はあれからすぐに南雲を探すように分身を大迷宮に送り込んで奈落の底を見て来てもらった。そこに火種の跡が残っていたからな…生存の可能性はある」
「え!?本当ですか!?」

白崎さんが守山くんの言葉に食いつくが、守山くんは悔しそうに顔を歪める。
「ああ、だが敵が強すぎてな…分身が瞬殺されたため情報はそれしか入手出来なかった」
「いや、それでも充分なほどの情報です!!ありがとうございます!!やった…!やった…!!」
「だが喜ぶのはまだ早い。そこの階層に到達するには今の俺たちでは手が届かない。更に俺たちは力をつけなければならない。俺は神山へと明日の早朝よりここを立つ。分身は置いていくから俺に用があれば分身を通してくれ。こんな夜更まで話し込んですまなかったな。では解散!」
こうしてひとまず生徒たちとの蟠りは解消されたが、まだ生徒たちの心の奥底には少なからず彼への不信感が残っているはずだ。それをケアしていくのが私の役目…!!これから私も頑張らないと…!!

俺はロリコンじゃないって言ってんだろ!?もういい!!俺は帰る!!ロリコンがいるかもしれないのに一緒の部屋で寝れるか！

城へと戻るとまずは王に帰還したと報告し、全ての影分身の情報を全て共有する。莫大な情報量が俺を襲うが、全て難なく納める。

ふむ…なるほど…俺がいない間に帝国からの使者が来ていたとは…しかもそれに皇帝も参加しているとはなんとアグレッシブな王なのだろうか。まぁ実力主義の国ならそんなもんか。

それにあと必要そうな情報は…お、天之河達あのベヒモスを倒したのか…はえー、すっごい。やりますねえ。

けどまだ深層へはまだまだ先なんだよなあ…食物もないダンジョンは果たしてクリアさせるつもりがあるのだろうか…なさそうだなぁ…

後は気になるといえばランク〝黒〟の冒険者を〝青〟の冒険者がボコったという話だな…ランク分けでの最高ランクから3つ下の黒、それが駆け出し同様の青に負ける。

それはそれは圧倒的な強さなのだろう。騎士団にでも入っていたのだろうか…

報告では決闘スマッシャーという異名が付いているらしい。まさかデュエル脳の持ち主か？しかも連れのユエという少女は股間スマッシャーという異名を持ち、百体程の魔物を魔法で一掃したとか。可愛くて強いとか最高だな！因みに俺はロリコンではない。

しかし今回は帰ってくるタイミングが少し遅かったようだ。数日前に先輩は農地改革の為にウルという町に向かったとか。

仕方ない。俺が迎えに行ってやっかぁ。その前に城に残っている生徒達に挨拶をしておこうと思ったが、天之河といった最前線を行く彼らは既にダンジョンへと潜りに行ってるらしい。ならいいか。ウルへと出発!!

適当に城の馬を一頭貸してもらいウルへと向かう。人懐こくて可愛い馬だ。ヨォォオオオシ、ヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシッ!!（ムツゴロウ）

▽▽▽

湖畔の町ウルに到着した。どうやら俺がここに向かっている最中に清水がこの町で行方不明となったらしい。心配だな。元々彼は学校でも話す友達がいなかったように見えたし大丈夫だろうか…

取り敢えず寄ってきた小鳥に森で彷徨っている人間を探してきてくれと頼む。仙人もどきになってからなんとなくだが動物達とコミュニケーションを取れるようになった。メルヘンお兄さんだぞー!…やっぱりメルヘン少女の方がいいな…ロリコンじゃないけど。

ひとまず先輩と合流しようと仄かに香る先輩の匂いを頼りにフラフラと歩いて行った。

ゾクッ…!!

この町に禍禍しい魔力を持った存在が猛スピードで迫ってきている…!?ここに来るまであと数分といったところか…勝てるかはわからんが先輩だけは俺が死守して見せよう。生徒達もね!

身を潜めること数分、禍禍しい魔力を持った人間が中二心を揺さぶるバイクに乗って姿を現した。隣には金髪のエッッな少女、そしてその後ろにはウサミミの少女が…うん、ウサミミは俺の守備範囲外です。

「気をつけてください!!誰かそこにいます!!」

白髪の男がバイクを止めた瞬間、ウサミミ少女が反応する。いくら存在感を消しても音までは消せないからな。それは別の技能や魔法だし。

観念して男たちの前に姿を現す。

先手必勝影分身の術!!

姿を出した瞬間に影分身で念のために彼らの周囲を囲み、手に偽・螺旋丸を展開する。

「貴様は何者だッ!!」

そう男に問うも、彼は名前を教えてくれない。なんか腰にある銃らしきものに手を付けてることから俺を警戒しているのだろう。まぁ分身して包囲されてりゃそらそうだな。キース教官の真似をし続けるも反応しない。

すると金髪の少女が男に注意を促す。そして彼女は気になる言葉を放った。それは奈落に落ちてしまった生徒の名前…『ハジメ』と。

ん？待てよ…ハジメ？というか…よくよく聞くとこの男の声…それに禍禍しい魔力の中にほんの少しだけあるこの魔力は…!!

「緋槍!!」

「ユエ！ちょっ?!!待って!!」

焦った男の声が聞こえたと同時に金髪少女から放たれた炎の槍を空蝉の術で上着を犠牲にすることで回避し、分身と偽・螺旋丸を解除し手を上げ彼らに近づく。

こいつ南雲か？聞くと否定してくるが何か怪しい。なら厨二病を弄れば反応するだろうと、彼の容姿をもとに恥ずかしー!!とかそんなことを言ってハッハッハと笑うと目に見えて彼が落ち込む。確定だ…彼は…南雲はやはり生きていたのだ…本当に…彼が…

つい、衝動的に抱きしめてしまったがしょうがないじゃないかぁ（えなりかずき）

急に抱きしめたから南雲が驚いてるな…仙人もどきになってからデフォルトで存在感が薄くなったんだよなあ…自然と一体化したからだろうか…

けどそれよりも南雲に言って置かなければ…

彼に心からの謝罪をする。本当に俺の行動は軽率だった。けど、ここで会えたのも偶然ではなく、何かに引き寄せられたのではないだろうか。

少し体を仰け反らしている南雲を見ながら少し苦笑いをして…

「生きててくれて…ありがとう!!」

そんな俺を南雲は軽く笑って許してくれた。しかももう気にしてないという。本当に変わったな…俺みたいな口調や一人称だが真似してんのか?

荒ぶる南雲を揶揄っているとウサミミ少女がボソリと呟く。

「マズいですユエさん…私、新しい扉を開いちゃったかもしれないですぅ…!!」

「…ん、趣味は人それぞれ…いいと思う」

「いや、それは開かないでくれ!」

とんでもない誤解を生むところだった。俺はロリコンではないが幼い少女が好きなのだ。ゲイだとかホモだとか俺はそんなアブノーマルではない。ノーマルだノーマル。

取り敢えず自己紹介をしよう。挨拶大事、これ基本。

ウサミミさんはシア・ハウリアといい、金髪ロリはユエ、そしてハジメの女なのだとか

俺に電流走る。

ウッソだろお前?!南雲…お前…やったのか?白崎以外の女と…(テレレレレー)お前が付き合うのは…白崎だと思ってた…

だが俺は許さん!!ロリはNOタッチだ!!手を出しちゃいけないんだよこの野郎!!

「…失礼。これでも私、貴方より年上、敬いなさい…」

そうかそうか…彼女は合法でもあり…そして俺のロリガンセンサーではおおよそ俺より大分年上だろう。俺はロリコンではないが、南雲はロリコンだったのか…

なるほど…

「つまりロリババア…」

「…殺す!!雷龍!!」

空から龍の姿をした雷が俺に迫る。なんとか空蝉の術で回避し謝る。

土下座したら許してくれた。優しい!次はないって言われたけど。けどロリババアは俺の守備範囲なので全然気にしないでほしい。

「というか先生キャラ変わってんじゃねえか?前までそんな性格じゃなかっただろ…」

「…?そうか?うーん…まあ心に余裕が出来たというのが理由かもしれんな」

まあやけにフランクに話しかけるのは、久しぶりに生徒と話したからだろう。神山で話した奴なんてあのドラゴンぐらいだし、人に飢えていたのかもしれない。それに行方不明になっていた南雲と会えて舞い上がってしまったのもあるかもしれない。

俺は再度南雲の変わり果てた容姿を見る。

彼には聞きたいことが山程あるが、これは余り聞かない方がいいんだろうな。わざわざ苦しんだことを掘り返したくはないだろう。しかし俺は彼に言っておかなければならないことがあった。

これで俺は南雲の味方になれたのだろうか…後、白崎達には生還の件は言わないでおいてくれと言われた。何故だ？まぁ南雲がそう言うのなら何か考えがあるのだろう。

そして最後にじゃあなと言って南雲はバイクを消し去りその場から去る。彼ともう少し話していたかったが、仕事なら邪魔をするのも悪い。というかユエか…股間クラッシャーの冒険者と同じ名だ。それにさっきの魔法。確実に当たれば致命傷だっただろう。あれ程の魔法を人に躊躇い無く放てる。それに特段驚きもしなかった南雲…

もしかして誰か殺したのか…？

それに関してはまた南雲と２人きりで話すとしよう。だが流石に人殺しは生徒でも許容出来ん。影分身を尾行させるか。近づき過ぎては音であのシアに気づかれてしまうからな。気を付けて、さらに変化の術で変装して尾行させよう。

さて、尾行も付けたし俺は畑山先輩の元へと向かおう。さーて分身が言うにはあの山の近くの…分身から連絡が入った。

南雲と同じ店でカレーを食べているらしい。一緒に行けばよかったな…

取り敢えず畑山先輩の居場所へゴー！ゴー！

～～～

んだが…

「気配はない…なのに音がする…これは怪しいです!!」

「考えすぎじゃ…「バレてしまっては仕方ない!」…!?いたのか!!」

すぐに愛銃のドンナーを構えようと手をかけるがその前に、周りにボンッ!という音が鳴り響き、俺たちは完全に何者かに包囲される。しかも目の前にいるというのに気配も、魔力も感じない。存在自体がまるで幻のようにあやふやだ。

「貴様は何者だッ!!」

そう問われると同時に煙が晴れる。そして現れた顔に驚く。守山先生じゃないか…!?

「…フンッ、誰が初対面の相手に相手に名前を教えるか…!」

「そうかッ!馬鹿みてぇな名前だな!これから貴様には俺の相手をしてもらうッ!!」

いきなりキース教官の真似をしだした先生に反応しそうになるが、なんとか堪える。

「…ハジメ、気を付けて…相手から一切の魔力を感じない…少しでも目を逸らせば…見失う…!緋槍!!」

「ユエ、ちょっ!!?待って!!」

止めようと声をかけたが、ユエが先手必勝とばかりに緋槍を放つ。

それは後ろにあった森の一角を消し飛ばしたが今のは先生の分身だから大丈夫だろ

う。そう思うことにしよう。
　しかし全く違う場所に、上着を一枚脱いだ先生が現れる。まさかユエの詠唱なしの魔法を不意打ちで撃たれながら、それを初見で避けたのか!?
「ハジメ…まさかお前…南雲か…?」
「…違う。人違いです」
「ふーん…そうか…まあ南雲はそんな厨二病みたいな格好しないしな…!俺なら恥ずかしくてちょっとでも目立たないように変装するね」
　ハッハッハと笑われ、羞恥心に襲われる…。クッ!!せっかく忘れてたというのに…!!
「…せっかくハジメが忘れて…ってアイツはどこ…!?」
「ハッ!?いつの間にかハジメさんの目の前に!?」
「おわ!?」
　急に抱きしめられる。げえ!!辞めてくれ!!俺にはそんな趣味ないんだからさ!!にしてもさっきのあの反応はマズかったな…あれじゃ異世界人だって言ってるようなもんじゃないか…こっちには厨二病なんて言葉ないんだから。
「本当に…本当に…ッ!!お前が生きててよかった…ッ!!すまない…不甲斐ない教師で本当にすまない…ッ!!そして…」
　先生は少し苦笑いをしながら言い放つ。

「生きててくれて…ありがとう」

先生に謝られる。本当に先生は本体が同行してなかったことを後悔しているのだろう。けど、あれがなければ世界の真実も知らずに利用され続けていただろうし、何よりユエとシアに出会っていなかっただろうから、俺は先生を責める気は毛頭ない。それに先生が頑張ってたことはしってるしな。

「ああ…そうだな…別に俺はあの時のことはもう気にしてねぇよ。もう過ぎたことだしな」

「そう言ってもらえるとこっちとしてもありがたい…しかしその口調や一人称は何だ？俺の真似か？」

「違うわ!!」

「コラコラ、そんな怒ってちゃそのカッコよくなった顔が台無しだぜ？ほら、スマイルスマイル～」

苛つく…さっきの言葉撤回しようかな…と思っていると、シアがボソリと呟く。

「マズいですユエさん…私、新しい扉を開いちゃったかもしれないですぅ…!!」

「…ん、趣味は人それぞれ…いいと思う」

「いや、それは開かないでくれ！」

辞めてくれ…俺にはそんな趣味はない。少し後でシアの体に教えてやろうか…いや、

もちろんエッチなやつじゃないぞ!?

そんなことを思っていると先生達は勝手に自己紹介を始めてしまった。

「ドーモ。えーユエ…?＝サンとウサミミ＝サン。守山誠、南雲ハジメのクラスを受け持つ数学担当の教師です。貴女達は彼の何で?」

「あ、ご丁寧にどうも。ウサミミではなくシア・ハウリアです。えーと、ハジメさんの何と言われましても～…えへへ～」

「…ニヤニヤしない。私はユエ…ハジメの女」

「ちょっとユエさん落ち着こう!!」

先生がワナワナと震えている。待って欲しい。ユエは少女ではない！実質不老不死だから犯罪じゃないから!!

「な、ななな、南雲!!お前、幼女に手を出したのか!?俺が許さんぞ!!この世界ではよくても教育者として見過ごせん！こんな可愛いらしい子に手を出すなんて…!!」

「…失礼。これでも私、貴方より年上、敬いなさい…」

「つまりロリババア…」

「…殺す!!雷龍!!」

先生にユエの魔法が襲い掛かるが、先程と同じように回避している。しかし上半身は裸だ。恐らくだが空蝉の術でも使っているのだろう。

「す、すまんすまん！口が滑っちまった！悪かった！この通り！」
土下座してユエに謝る先生。幼女に土下座する先生とかみたくなかった…
「というか先生キャラ変わってんじゃねえか？前までそんな性格じゃなかっただろ…」
「…？そうか？うーん…まあ心に余裕が出来たというのが理由かもしれんな」
余裕が出来た…か。先生からは何も感知出来ない。ある程度実力が離れていれば気配遮断持ちでも感知出来るんだが何故か出来ない。それに何ら関係あるのではなかろうか。しかし恐らく今の先生は強い。俺たちが負けることはないだろうが苦戦は免れない。分身でゲリラとか恐ろしすぎる…!!
檜山達のエンドレス組手を思い出しブルリと震える。
「俺は南雲に奈落の底で何かあったかは聞かない。だが俺は教師だ。一度お前を守れなかった俺が言う資格はないとわかっている…けどこれだけは南雲に言っておく。俺は何があっても、何をしても俺はお前の味方だ。だから頼ってくれ」
そうか…先生はどこまで行っても教師なんだな…ある意味畑山先生とお似合いだよアンタは…
「ああ、わかってる。そろそろ俺は仕事で来てるから行くわ」
「おう、頑張れよ！あと最後にクラス全員にお前が生きていることを伝えて大丈夫か？白崎が心配してたぞ」

「やめてくれ。あんたが言わなくてもいずれ白崎には伝わる。だから話す必要はない」
そういい放ち別れの言葉を言いそこから去る。目的地は水妖精の宿って場所だったな…
チラリと後ろを見ると、まだシアが手を振っている。
「どうしたシア。先生が気になるのか?」
「うーん…なんて言えばいいんでしょうか…あの人の雰囲気が何か落ち着くんですよね〜…」
「…シア、多分それ、恋…。応援する…、それでハジメは私だけのモノ…」
「あー!!ズルイですぅ!!私が恋したのはハジメさんですぅ!!そう簡単に揺らぐものじゃないですからぁ!!」
腕にしがみ付いてきたユエを撫でているとシアが大きなメロンを反対の腕に押し当ててくる。ユエの方は…
すわっ!!殺気!?
ユエから殺気が滲み出ていたので俺は考えるのをやめた。

一体いつから…俺がロリコンだと錯覚していた？

水妖精の宿という、レストランにもうなっている建物に入ると、そこには憤慨するロリこと畑山先輩と生徒たち、そして先輩らに質問攻めされている南雲達の姿が。

途中、南雲の適当な受け答えに怒った騎士達が剣に手をかけたが俺はそんなことをさせない。ダメです。

「何者…ッ!?ああ、守山殿でしたか…その手を離していただけませんか？この男は私の愛k…イッ…グァァァァァッ!?!!」

「だ・れ・の何だって？ああ!?」

ちょっと聞こえなかったなぁ？もう一回言ってくれないかね。俺の先輩がお前の何だって？あーん？

「コラッー守山くん、気持ちはわかりますが強くし過ぎちゃ駄目ですよ！」

プリプリと叱られた…可愛い。ペッ！覚えとけよこの逆ハニトラ失敗ヤローめ!!

実はこの騎士達、教会から先輩を堕とすために護衛につかされたイケメン騎士である。しかし我がマイエンジェルの先輩は逆に騎士達を墜とすという偉業を成し遂げたのだ。流石先輩!!俺たちに出来ないことを平然とやってのける！そこに痺れる憧れ

るゥ!!

と言っても俺と先輩の間にはお前たちが入る隙間もねぇから諦めな!!

「お久しぶりです畑山先輩ッ!!修行は一旦区切りがついたので戻って来ました本体です!」

先輩と生徒たちは本体!?と口を開けて驚いており、騎士達は露骨に舌打ちする。殺すぞテメーら…

けど無理に南雲から情報を聞き出すのはダメだと思うぞ俺は。話したくない過去なんて誰にでもあるのだから。彼の厨二病感溢れる姿になったのも何か重要な秘密というか話したくないこともあるんだろう。そう先輩に言うと納得していたが、やはり空白の期間がやはり気になるようだ。俺も気になるからしゃーない。

南雲は俺たちに明確な拒絶をして二階の宿へと上がっていった。畑山先輩はかなり落ち込んでいた。落ち込んでいる先輩も可愛いペロペロ。

しかし南雲にはどうしたものか…やはり俺のせいというわけじゃなさそうだが、あの魔法の誤射に問題があるのか…それとも聖教教会に問題があるのか…

それとも奈落で彼の中が変わり切ってしまったのだろうか…

▽▽▽

夜になった。小鳥さんは人間らしきモノは見当たらないという。お礼に餌をあげておいた。可愛い。野に放った分身たちからも目撃したという報告は来ていない。

もう夜も深く、ほぼ全員が眠りについている。俺が今どこにいるかというと畑山先輩の部屋の前だ。ストーキングというわけではない。最初は分身に任せていたが、南雲が先輩の部屋に向かったことを感知し、変わり果てた南雲が先輩に危害を与えるか心配になって見張りにきたのだ。

俺は耳を澄ます。

ふむふむ、どうやら南雲は城に戻るつもりはないらしい。そして更に南雲たちはオルクス大迷宮を攻略し、この世界の真実を知ったのだとか。

その内容をいつも通り3行で纏めよう。

○神代の少し後の時代、三種族が絶え間なく戦争を繰り広げていた。それは神託からきた戦争で、人々は争い続けていた。

○その戦争に終止符を討とうとしたのが今で言う反逆者と呼ばれる解放者。リーダーは神々がこの戦争で遊んでいることを偶然知る。

○しかし彼らは神に仇名す反逆者と呼ばれ、守べき人たちから迫害され崩壊。中心人物だった7人が大迷宮を作りそこに潜伏することにし、攻略出来た者に力を与えるのだ

とか。

結構長くなったがこんなもんだろう。しかしこれは良いことを聞いたな。迷宮を攻略すれば強力な力を手に入れることが出来るのか…なら今度ライセン大峡谷にでも遠征に行こうかな…南雲も噂では数週間で攻略したというし短期で攻略できるだろう。

そして最後に彼はとてつもない爆弾発言を残していった。

「俺はクラスメイトの誰かに殺されかけたってことだ」

やはりか…薄々そんな気はしていた。魔法が誤爆したと聞かされたが、八重樫や坂上、ほんの一部の生徒がだが、あれは故意ではないかと分身に相談してきていたのだ。では誰がなぜそのようなことを…真っ先に思いついたのは檜山だった。アイツは南雲に白崎関係でかなり強い嫉妬心を持っていたからだ。

いや、それで決めつけてはいけない。嫉妬心なら他の生徒たちにもあった。

やめよう…生徒たちを疑っても何も解決しない。それに疑心暗鬼になるだけだ。本人も特定する気はないと言っているし部外者ではないが、当事者でない俺が首を突っ込むのも御門違いな気がしてやまない。

南雲が部屋から退室したのと同時に先輩の部屋へと入る。そこには両腕で自らの体を抱きしめている先輩の姿があった。自分の大切な生徒が仲間を殺そうとしていたか

もしれないとかそらそうなるよ。俺も最初その考えに至った時はショックを受けたしな。

「先輩、顔を上げてください」

そう呼びかけると先輩はビクッと小動物のように驚く。可愛い。

俺は先輩を励ます。俺なりの見解も入れて畑山先輩が元気になりそうな言葉を紡ぐ。勿論これは本心だ。別にちょっと良い感じにして話しても構わんのだろう？

流石に南雲が本当に死んでいたら俺は犯人を血眼になって探していたかもしれないが、今回は違う。南雲は生きているのだ。その犯人は人殺しをしていない。未遂だ。しかしこれで放っておくのも問題がある。

ならば俺たち教師が間違った道に足を踏み込んでいる生徒を正しい道へと戻してやろうじゃないか。

そんな感じのことを言うと先輩は安心したように頷き、そのまま寝てしまった。目の周りの隈を化粧で隠しているが、清水のこともあり今まで殆ど眠れなかったのだろう。俺には誤魔化せないぜ!!

というか本当に子供みたいな安らかな顔で寝てるな…ますます惚れてまうやろ!!

なんでや！（キバオウ）なんでこんなに可愛いんや!!

寝顔に見惚れていると気付けば既に空は薄らと明るくなっていた。解せぬ…

先輩の部屋から出ると、南雲達の気配が外にあることに気づく。このような朝早くに南雲達は依頼の行方不明者を探しに行くのだろうか。

▽▽▽

「一応聞こう…何してんの?」

南雲が俺に半眼になって視線を送ってくる。後ろで駄弁っていた園部優花、相川昇の愛ちゃん護衛隊の2人が俺の側へと寄ってくる。

「俺たちも連れてってくれや南雲。久しぶりに先生と話しながらな」

「却下だ。行きたきゃ勝手に行けばいい。が、一緒は断る」

「そりゃまた何で?」

「単純に足の速さが違う。先生も昨日見たろ?俺たちはあれで行くから」

そう言い何処からともなくバイクを取り出す。厨二感丸出しの仮面ライダーの敵が乗ってそうなバイクにバイク好きの相川が興奮している。

しかしここで諦めない。要求するだけでは交渉足り得ない。相手に何かメリットが

なければ南雲たちは頑固として俺たちを連れて行かないだろう。
俺が出すのは影分身だ。これがあるだけで捜索といった分野で人海戦術が使えるというのはかなり大きいだろう。しかも元は1人なだけあって運搬には困らない。俺って最高だな!
「あぁ…チッ…わかったわかった…連れてってやるよ。先生に聞くが何で俺と一緒に行こうと思ったんだ?アンタにメリットはなんかあるのか?」
メリット?ありますねぇ!!清水の捜索ですよ。清水の奴ここら一帯探し回ったけどどこにもいないんだよなぁ…もしかしたら南雲たちが目指す北の山脈地帯にいるのかもしれない。あくまで南雲たちの依頼の手伝いはオマケのついで、本命は清水の探索だ。
「ハハハ…!そっちの方が俺としてもやりやすい。で、後ろの奴らは?」
「付き添い」
南雲たちがいる場所へと向かっている最中にトイレに行っていた園部に見つかり何処に行くか聞かれたので答えると、園部と相川がついてくることになったのだ。清水が心配なのと、南雲が気になるのだろう。残りは先輩の安眠を守ってもらっている。
あと騎士たちのようなお邪魔虫を突っ撥ねるように…
南雲は何処からかハマーのような車を取り出し、その運転席へとさっさと座ってしま

う。その助手席にユエが座ろうとしていたが、なんとか席を代わってもらい助手席をゲットした。因みに相川は最後列で1人だ。

さあ、北の山脈地帯へとGO!!

～～～

こなかったのかという質問で、戻る理由がないからって…

「真面目に答えなさい！」

南雲くんに叱りつけるも、南雲くんは何ら気にせずにニルシッシルを美味しそうに食べてます。すると、まともに私の話を聞かない南雲くんに騎士のデビットさんが怒って剣に手をかけた。

だ、駄目ですよッ!!話を聞かないとしても南雲くんは私の生徒です！南雲くんを傷つけるのは…!!

「俺の生徒に何やってんだデビットさんよォ～…」

そう言ってデビットさんの腕を抑えたのは何処かに行っていた守山くんでした！一体何処に行ってたんですか！それよりも南雲くんが…って俺の生徒って南雲くんのこと、すぐに分かったんですか？

「え？あぁ、さっきそこで偶然会いましてね。感動の再会を終わらしたとこですよ先輩」

「感動って…」

なッ!?先に会ってたなら先に私に教えておいてくださいよー！それか一緒にこの宿に来て欲しかったものです！笑う守山くんに南雲くんは顔を引きつらせて苦笑いを浮かべている。その顔は、前までの南雲くんの苦笑いの面影を残しており、やっぱり南雲くんなんだな…と思いました。

「ああ、守山殿でしたか…その手を離していただけませんかな？この男は私の愛ｋ…イッ…グァァァァァ!?」
「だ・れ・の何だって？ああ!?後先輩の名前気安く呼ぶんじゃねぇぞ？」
　急にデビットさんが苦しみ出す。あ、守山くんの握る力が強いからですね！駄目ですよ、デビットさんが苦しんでます。生徒を守る為とはいえちょっと力みすぎじゃないですか？
「はい、先輩。ちょっと生存していた生徒がまたデビットさんに傷つけられると思ったらちょっと力が入っちゃって…」
　もう、本当に守山くんは昔からそうなんですから…！うっかりさんですね！
　彼はデビットさんから手を話すと、私にお久しぶりです！といい自分は本体というカミングアウトをしました。
「「「「「えええッ!?」」」」」
　これには私も生徒たちも騎士の皆さんも驚きました。神山で修行していた彼がここにいるなんで誰も知らなかったからです。
「分身で連絡してから来てくださいよ!!心臓に悪いです!!」
　そう言うと彼は笑いながら謝ってきます…彼の笑い顔は心臓に悪いので許します…

…いや、それよりも!!

「じゃあ俺らそろそろ上で休むから」

南雲くんは既にニルシッシルを食べ終えており、私たちに明確な拒絶を示して二階の宿の部屋に向かおうとしています。咄嗟に引き留めようと思っていると、守山くんにやめておきましょうと言われました。なんでですか!?と大きな声で返してしまいました。

「南雲に落ちた先での話を聞くのはやめておきましょう。天之河の話を聞く限り、今彼らがいる層よりももっと下の層に南雲は落ちてたと思います。あの時の俺とはいえ何をされたかわかりませんでしたからね…そんな場所に高くないステータスで落ちた彼のその後…先輩は聞きたいですか? 掘り返したいですか?」

そう言われて私は自分の頭を冷やすことに成功する。そうだ、私はなんてことをしようとしてたのでしょうか…守山くんが生徒たちに修行のことを伝えた時に、天之河くんが無意識にも言っていたことと同じことを南雲くんにするところでした…無理に聞いても南雲くんが苦しくなるだけでした…

「そんな落ち込まないでくださいよ。彼からまたいつか教えてくれるまで待ちましょう」

そう…ですね…南雲くんが教えてくれるまで首を長くして待つことにしましょうか…

じゃあ暗い雰囲気はここまでにして守山くんが今まで何してたか聞きたいです!!

「それは気になる…！」

「遠藤以上の気配遮断…俺じゃなきゃ見逃しちゃうね！」

生徒たちも気になるようだ。そこから夜まで彼が何をしていたのか語られ、生徒たちはドン引きしていた。

もう！幻覚見るまで無理しちゃダメですよ!!

夜、私は自室でソファーに身を深く預けながら火のない暖炉をなんとなしに見つめる。そして今日の出来事に思いを馳せる。

大切な教え子が生きていたと知った時の事と、本体の守山くんと会えた事を思い出して思わず頬が緩むも、南雲くんの代わり様と未だ見つけることが叶わない清水くんのことを思い出し溜息を吐く。清水くん…一体何処に行ってしまったのでしょうか…それにあの南雲くんの代わり様…どんなことを体験すればあんな性格に…

「なに百面相してるんだ、先生?」

突如誰もいないはずの部屋の中で声をかけられる。ギョッとして声がした方へ振り向くと、そこには扉にもたれながら腕を組んで立つ南雲くんの姿が…

なんであんな立ち方してるんでしょうか…普通に立った方が楽な筈では…なるほど、これがお年頃の学生…

ってそんなことはどうでもいいです!勝手にレディの部屋に入り込むなんて!!許しませんよ!!でも…守山くんなら別に…ッていや!?何考えてるんですか私は!!

「おい、話していいか?」

「あ、はい。すみません…」

南雲くんが話した内容に私は驚愕しました。それと同時に生徒たちのことを思い浮

かべて冷や汗が垂れる。このままでは私たちはエヒトの駒として戦争で利用され続けるのでは…!?

最初はこの狂った神を倒すために南雲くんは旅を続けているのでは…?と思い聞いてみるも、違うと言われてしまいました…

けどこの世界に呼んだのがエヒトなので、エヒトを倒さなければ元の世界に帰れないんじゃ…

「そうさな…相手が神であろうとも…それが敵であるならば俺は神をも落としてみせよう。敵は皆殺し、邪魔をする者も…だからな」

変なポーズをつけてちょっとカッコイイことを言う南雲くん。お年頃ってやつですね!知ってます!

けど敵を殺す…殺すっていうのはいけないと思うのですが…南雲くんのオーラ?威圧感が凄くて何も言えません…どの様な目にあったら彼はこんなことに…

「俺はクラスメイトの誰かに殺されかけたってことだ」

「ッ!?」

自分でも顔が蒼くなっているのを感じる…「原因は白崎との関係くらいしか思いつかないからな、嫉妬で人一人殺すような奴だ。まだ無事なら白崎に後ろから襲われないよ

う忠告しとくといい」と言い残し南雲くんは部屋から出て行った。
シンとする部屋に冷気が吹き込んだように錯覚し、自分の体を両腕で抱きしめる。大切な生徒が仲間を殺そうとした？なんで!?それも、死の瀬戸際で背中を狙う卑劣な手段で…？じゃあその生徒のせいで守山くんがあんなに苦しんだと言うの……!?
「先輩、顔を上げてください」
急に話しかけられ、ビクッと震えてしまう。そこには丁度考えていた守山くんが立っていた。彼はいつも、分身でも神出鬼没で何処にいるかわからないことが多い。
もしかして…今の聞いてました…？
「あぁ…はい」
場に静寂が流れる。威厳ある教師を目指してるっていうのに誰かは分からないですけど、そんな卑劣な手を使った生徒が許せない…南雲くんの命を奪おうとして、さらには守山くんの信頼を地に落とす。両方ともを実行した顔も知らない生徒…そんな生徒に情けない話、憎いとすら思っています…
「…まぁ先輩の気持ちもわかりますよ。それでも犯人は生徒、俺たちは教師です。不幸中の幸いというべきか、南雲は無事だったわけでその生徒は人を殺してないんですよ。ならまだその生徒に改善の余地はある、更生する機会はある。
道を踏み外した生徒を元の道に戻すってのが俺たち教師の仕事でしょう？」

「そう…ですね…」

そうだ…それが私たち教師の役目だ…！私たちはどんな境遇に生徒が陥ってしまっても味方であり続けることこそが私たち教師の使命！間違った道へと進んだ生徒は力尽くにでも、強引にでも正しい道へと戻す。これが私の理想の教師像だ…！

守山くんは私の目元をスルリと触る。急だったのでヒャッと声が出てしまいました。

「やっぱり…隈が出来てますよ。清水が心配で夜も落ち落ち寝てられなかったんでしょう？大丈夫です。俺がすぐに連れ戻すんで…先輩はゆっくりと休んでください」

守山くんに持ち上げられた瞬間、睡魔に襲われ私は深い眠りへと誘われた。

～～～

「お前は人を殺したことはあるか？」
　助手席に何故か座っている守山先生がいきなり突拍子のないことを口に出す。後ろの席では女性陣がキャイキャイと話しているため、俺らの声は聞こえないだろう。
「ある」
　そこで思い出したのは、シアと出会ったばかりに遭遇した、シアたち兎人族を狙っていた帝国兵だ。そういえばここで初めて人を殺したな…
「そうか…それでお前は何を感じた…？」
「何も」
　そう返す。すると先生は大きな溜息を吐き、俺を説得するかのようにゆっくりと話し始める。
「お前の目的は日本への帰還であってるか？」
　それであっていると相槌を打つ。
「なら何故人を殺す」
「敵だからだ。俺たちの目的を阻む者なら誰であろうと容赦はしない」
　そう、俺は奈落の底で決めたのだ。敵は殺す。そしてユエと一緒に俺たちの世界へと行くことを…

「なら帰った後はどうするつもりだ」

は?

「お前のような殺人鬼…日本の何処にも居場所はないぞ」

そう先生は俺を突き放すように言い放つ。しかしそう言われるとそうだ。この世界は命が軽い。だから殺しも犯罪者なら罪に問われない。だが日本はどうだ。たかが一人殺しただけで全国指名手配され、相手が犯罪者だとしても自分が犯罪者になってしまう程に命が重い。

「お前は後ろの少女たちも連れて帰るつもりなんだろ?じゃあもし南雲が日本で彼女らに手を出したからと相手を殺す、殺さなくても痛めつけたりすれば一転して全ての人間がお前の敵になる。日本ってのはそういうところだ。日本人を全員殺すか?全員殺しても次は世界が敵になるだろう。

南雲…そんな生き方じゃいずれ自分の身を滅ぼす。さっき初めて人を殺した時に感じたことを言えっていったろ？

初めて人を殺せば普通の人間は何かしら思うとこがあんだよ。恐怖心、高揚感、焦燥感とかな。

一番恐ろしいのはなんだと思う？高揚感でも快楽感でもない。それらは一応はそれがダメなこと、危険なことって理解しているからな。

何も感じない。これが一番、人間として恐ろしい。罪悪感も何も感じず敵を次々と殺していく戦闘マシン。それがお前だ南雲。お前は今のままじゃ日本に帰れても順応出来ない。ただただ世界を敵に回すだけだ」

そう…なのか…？しかし考えてみると先生の言っている通りだ。俺は…日本へと…帰ることは出来ないのか…？いや、何としてでも帰る、帰らなければならない。ユエと…ユエと約束したから…

「だがお前がそうなってしまったのは俺にも原因があるからな…ひとまず南雲は人を極力殺すな。罪人は然るべき法で裁け。一人や二人、この命の軽い世界で殺してしまうのは仕方ないだろうが殺すことに忌避感を持て。たとえ敵の魔人族への止めでも躊躇ってもいい。最悪はこの世界の人間に頼めばいいしな。

それにユエとシアには日本のルールをしっかりと覚えさせておけ。日本で刀やハン

マー、魔法を撃ったりしてしまったら敵わん」
「はい…」
何も言い返せない。それは全てが正論だからだ。これが俺に関係ないことならそれがどうしたと切り捨てるだろうが、これは俺自身の問題であり、ユエの問題でもある。最悪は前の世界との戦争になることだ。今のスペックなら難しくはないだろうが、やはりとてつもない被害になるのは免れない。
俺はユエと平和に日本で暮らしたいのだ。そんなことがあって絶対にたまるものか!!
「わかったよ先生、これからはなるべく人を殺さないように努める。だがユエたちに危害を加える奴らは約束出来ない」
「ああ、それでいい。今はな」
そう満足そうに頷くと、先生はもう話しかけてこなかった。俺も運転に集中する。
そして魔力駆動四輪は正体不明の異変が起きている危険地帯へと突入したのだった。

俺がロリコンだ等と…その気になっていたお前の姿はお笑いだったぜ

南雲の車に乗って揺られること数時間、遂に北の山脈地帯と言われる山脈の麓に到着した。ここは山脈がいくつも繋がっており、北へ行けば行くほど強い魔物が生息しているらしい。ひとまず南雲にも促されたので影分身をあたり一帯に放つ。

南雲も鳥のようなドローン的な奴で上空から探すそうだ。

ひとまず俺たちは冒険者たちも通ったであろう山道を進む。南雲たちが言うに、今日魔物の目撃情報があったのは山道の中腹より少し上らしく、そこらを調査していたはずだと言う。

かなり時間がかかるかなと思っていたが、案外早く着いた。生徒たちは既にバテバテ、ペースが早すぎたな、うん。途中から分身に背負わせてもらっている。

そこらに来たところで分身から連絡が入る。ここからすぐの場所にある川で冒険者の物らしき武器や鞄を見つけたとか。

南雲に知らせすぐにその場に直行する。取り敢えず俗に言う死んだ水ではなく、透き通った生きた水の川だったため、これが上流から流れてきた物ということで、上流へと

登っていく。分身の背中から悲鳴が聞こえたが気のせいだろう。南雲のスピードに合わせたから是非もないよね！

少し走ると、次々と争いの形跡が見られた。ここで冒険者たちが戦っていたのは間違いないだろう…しかしこれは…

木は薙ぎ倒され、地面は陥没、折れた剣や血が飛び散った痕が…こりゃ多分生きてないな…っと、一つだけ反応がある。

ご立派ァア!!な滝の裏にある洞窟、そこに一つの反応がある。ユエが何やら魔法でモーセのように滝を真っ二つに割り、その洞窟へと突入する。

その中には俺より少し年下ぐらいの青年が青い顔をしながら眠っている。鞄を漁ってみると食料は残っていたため、青ざめた顔をしているのは、恐らく仲間を失ったからだろう。特に体には異常がなかったためほんの少量の自然エネルギーを流し込む。

「ビリッときたあああああ!!?」

青年は叫びながら飛び起きる。本来自然エネルギーは危険なものだが、そもそも自然エネルギーはそこらかしこにあるものであり、今回のようなほんの少量なら体になんの影響もないのだ。摂取しすぎると魔物のような異形となって最終的に石像となるが…

まあ少量ならジョジョの吸血鬼特攻がない波紋だ。一応水上歩行も出来るし。波紋は立たなかったけどな。

「お前がウィル・クデタか?クデタ伯爵家三男の」
「いっっ、えっ、君たちは一体、どうしてここに……えっ、えっ!?えっとうわっ、はい!そうです!私がウィルクデタです!はい!」
どうやら彼が南雲が探していた相手のようだ。しかしデコピンの構えをとって名乗るように催促するのは先生感心しないぞう!
そこから青年の長い話が始まった。
長かったのでこれまた3行で。
○調査中、数十の魔物と遭遇し戦闘。逃げるが強制エンカで逃げれない。
○途中で漆黒の竜が乱入。
○俺たちに任して逃げろ!後で必ず追いつく!
そして現在へと至るというわけだ。かける言葉が見つからない。するとウィルは顔をグシャグシャにして泣き出す。仲間が死んだというのに、自分は生き残れて嬉しいと思ってしまったことに嫌悪感を抱いているらしい。それを南雲がカッコいい言葉を投げかけ、ウィルは無事に立ち直った。目はもう未熟者のようなものではなく、覚悟の決まった戦士の目をしている。
南雲も成長したんだな…先生として誇らしいぞ俺ァ…!!
ひとまず下山しよう!といったところで話に出ていた黒竜が現れる。はえー、おっき

い。見た感じかなりの力を持っているだろうが、神山にいたドラゴンよりは低いな。恐らく力量はこの竜の方があるかもしれないが、あのドラゴンは内包している魔力と自然エネルギーは桁違いだ。恐らく南雲以上のエネルギーを溜め込んでいるだろう。一体何者なんだあのドラゴン…っと、そんなことよりコイツの相手をしなくちゃな。

影分身で黒竜を翻弄し、何百という分身が黒竜に纏わり付く。まるでアリが大きな獲物に集っているようだ。

しかし防御力がやけに高くダメージが全く入っていない。相手の魔力を消耗させているだけだなコリャ…いつまで続くんだろ…ハジメの銃も大したダメージにならず、極太の光線を放ち、分身を振り落とそうと大暴れする。生徒たちに被害がいくのもアレな為、遂に仙人モードもどきを解禁する。

肌は硬質化し鱗のようになり、目元と額に隈が現れる。

『『殺』』

を隠すために赤いバンダナを巻き完成。仙人先生誠ニンジャである。ロリコンニンジャとか言った奴、後で職員室へこい。俺はロリコンじゃないから。

「イヤーーーッ!!!」

手に螺旋丸を作り出し黒竜に押し付ける。四代目の技、仙法・螺旋丸である。偽だけど。

螺旋丸は黒竜を巻き込み爆発、黒竜が悲鳴のような雄叫びを上げたと同時に脳天をかかと落としをお見舞いする。

「イヤッッ・イヤーーーッ!!」

かかと落としを喰らいふらつく黒竜、首にしがみ付き、突き刺すように地面へと頭を叩きつける。

それと同時に…南雲がパイルバンカーを黒竜の尻穴へとブッ刺した。

〝アッッーーーなのじゃあああーーーーーー!!!!〟

くわっと目を見開き悲痛な絶叫を上げる黒竜。俺は尻を押さえて黒竜に同情した。しかし話せるのか?あのドラゴンのように力を見定めたかったとかそんな感じか?けどそれで人間を殺すとなるとまた話が違ってくる…一体どういうことだってばよ…?

○勇者が召喚されたと気づき、竜人族を代表して視察に来た。

○疲れて一休み!と思ったらその間に洗脳される。

○穴に凄まじい痛みが走ったため洗脳が解けた。

といった感じらしい。竜人族は伝説の生き物であり、今や絶滅したと言われている種族だ。まさかその生き残りがいたとは驚きである。

まぁひとまずは挨拶だ。これ大事、テストに出るから復習しておくように。どうやらティオ・クラルスというらしい。

何か南雲がＳＭのようなことをしだしたので相川と園部の目と耳を塞いでおく。教育上に悪いからな。南雲？アイツは知らん、もうヤってるし。相川が暴れまわったが容易い容易い。すぐに押さえつけてやったぜ。

その後、誰に洗脳されたのかという話になり、闇魔術の天才とティオが称したところで俺にはある生徒が思い浮かんだ。それは…清水幸利。行方不明となっていて俺が今探している生徒だ…

いや、考えすぎだろう…魔人族だ魔人族。きっとそうだ、うん。大量の魔物を洗脳してウルへと攻めているのも魔人族が操っている魔物だ。そう願おう…

しかし現実は非常である。

〝いや、あやつは黒髪黒目の人間族じゃったぞ〟

▽▽▽

さーてさて、ウルに帰って参りました。ティオは人の姿に戻れるのを見た俺は神山のドラゴンも姿を変えられるのでは？と考えたが声からするに男なのでどうでもいいか。

ティオに関してはウィルとの問題やら色々あったが、最終的にまずは迫りくる魔物の大軍の問題が終わってからという話で纏った。

しかし魔人族ではなく人間族、そして黒髪黒目、更に勇者に妬みを持つ者…妬みは知らないがそれ以外は…

畑山先輩にもそれを伝え二人で話し合うが、やはり本人に直接聞かなければ分からないという極当然な話になる。

南雲が依頼はウィルを連れ帰ること、だからもう帰ると言い出したので必死に止める。俺一人でも一応は何とかなるが負担が凄まじいことになる。結構難航したのでクッソ恥ずかしいことを言ってようやく許可を得た。やめてよね本当!!

敵は数万の魔物…仕方ない…先輩と生徒を守るためだ!!

全て駆逐する！

さぁ、ショータイムだ!!

～～～

も傷一つ、ダメージも与えられなかった防御を容易く先生は打ち破ったのだ。一体先生はどんな修行とやらを…

いや、先にこの黒竜を倒すことが先決だな。そろそろ俺もトドメを刺そう。宝物庫からパイルバンカーを取り出し、倒れる黒竜に固定し射出準備を開始する。

しかし凄まじい咆哮を上げた黒竜は、暴風を生み出し先生の分身を撒き散らし、パイルバンカーが刺さっていた地面ごと持ち上げ脱出する。しかし…

「イヤーーーッ!!!」

先生が飛び立つ黒竜の首を掴み地面へと突き刺す。首が地面に埋まりめちゃくちゃ痛そうだ。これからもっと痛くなるんだがな…

そして横たわる黒竜に、パイルバンカーの杭を持って尻の穴に突き刺す。竜人族を元にしたことわざで竜の尻を蹴り飛ばすといったものもあるほど竜にとって、鱗のない尻は唯一の弱点なのだろう。ならば狙わないわけがない。

〝アッーーーなのじゃあああーーーーーー!!!〟

女の艶かしい叫び声がその場に響き渡り空気が冷める。絶対零度だ。

「うわー…ないわー…」

先生は顔をドン引きといった感じで呟く。いや、集団リンチしてた先生に言われたくないんだが…

取り敢えずイラついたので黒竜の尻に刺さった杭をガンガンと叩きながら事情を説明させる。

「ドーモ。ティオ・クラルス＝サン。守山誠です」

「ンンッ／／!!あ、よろしくの、キッチリとこんな状態の相手に挨拶とは礼儀正しい人間よな」

「我々の国では挨拶は奥ゆかしい作法であり、せねばスゴイ・シツレイだからな！」

ハッハッハと笑う先生。いや、初めて聞いたんだが…というかそれってニンジャスレイヤーの忍殺語じゃないのか？そういえば掛け声もイヤーーーッ！だし天職は忍者だからな…まさかあの先生がニンジャスレイヤーを知っているとは…ＮＡＲＵＴＯなどのメジャーもメジャーなアニメとは違い、普通の人はあまり見ないニンジャスレイヤーを知っている…まさか先生って俺と同じオタクか？人は見かけによらないとはよく言ったものだ。

そう思いながらも尋問は緩めない。何か痛みに悶える声から喘ぎ声に変わってきたのは気のせいだろう。

どうやらティオは何者かに操られていたらしい。最初は魔人族かと思っていたが、黒髪黒目の人間族ということがわかり先生の顔色が悪くなる。しかもそいつは万を超える魔物を引き連れウルの町へと侵攻しているらしい。

はっきり言うが今回は俺は関与しない。あくまで俺たちの依頼はウィルの捜索と保護であり、ウルの町の防衛ではない。元クラスメイトの相川や園部に色々と言われるがそれをバッサリと切り捨てる。

「さっきも言ったが、俺の仕事はウィルの保護だ。保護対象連れて、大群と戦争なんかやってられない仮にやるとしても、こんな起伏が激しい上に障害物だらけのところで殲滅戦なんてやりにくくてしようがない。真っ平御免被るよ」

「まぁ、ご主じ…コホンッ、彼の言う通りじゃな。妾も魔力が枯渇している以上、何とかしたくても何もできん。まずは町に危急を知らせるのが最優先じゃろ。妾も一日あれば、大分回復するはずじゃしの」

押し黙った元クラスメイトたちへ、後押しするようにティオが言葉を投げかける。しかし今変な呼び方をされかけたような…気のせいだろう。

「もう既に町には連絡を付けている。今は畑山先生があちらで指揮をしてくれている」

そう言い出てきたのは守山先生だ。恐らく分身で伝達したのだろう。念話以上に便利かもしれない…いや、他人とは意思疎通出来ないから半々ってとこか…

「ティオさんは手伝ってくれるってことでいいんだよな?」

「そうじゃの、ここまで奴らの戦力が大きくなったのは全て妾の責任じゃ。魔力も枯渇同然じゃが、自分で犯した責任は自分でとらなきゃダメじゃからの。後、妾のことは

ティオと呼び捨てでもいいのじゃぞ」
「そうか、ありがとうティオ…そして南雲…頼む!!俺と一緒に魔物と戦ってくれッ!!」
　先生が頭を下げる。しかし先生が頭を下げるとこなんて久しぶりに見た。前に見たのは教頭のヅラを誤って取った時だろうか…いや、今はそんな事を考えている場合じゃないな…
「……意外だな…生徒を大事にしている先生が生徒の俺に戦えと?さっき言ってたことと真反対な気がするんだが…それに先生なら影分身で殲滅出来るんじゃないか?」
「あぁ…出来ない…ことはない。全力を出せば殲滅は出来るだろう…だが問題はその後だ。影分身は分身の記憶、経験、そして疲労、傷の痛みを引き継ぐ能力がある。それで万といる俺の影分身からの膨大過ぎる情報量、痛み…というか幻肢痛のようなものが一斉に俺の脳に襲い掛かる。恐らく俺は死ぬだろう。生きていても目が覚めるのはいつになるやら…」
「じゃあ先生は何故それが分かっていてここから去ろうとしない?アンタにはこの町がどうなろうと関係ないだろ?」
　それが謎だ。見捨てるのに抵抗があるのはまだ分かる。だが自分の命が掛かっているというのなら、大事なモノがない限り逃げても損害はない筈だ。先生は何故命を捨てる覚悟を持って町を守ろうとするのか…

「あ、先に言っておくが俺は死ぬつもりはない。意識不明になるつもりもない。そうなりゃ悲しむ人が出ちまうからな。それに何故逃げないのか…ハハッ…そうだな…本来なら生徒たちの静止を振り払ってでもここから撤退したいところだが…

先輩は確実にここに残る…今のお前なら分かるんじゃないか?恋した女にゃずっと笑顔でいて欲しいってな」

……は?

「「は?」」

俺と相川、園部の声が重なる。

「えぇぇぇぇぇ!?マジっすか先生!!」

「恋した女にゃずっと笑顔でいて欲しいってな!…キャーーッ!!トクダネトクダネ!!皆に伝えなきゃ!!」

真剣な雰囲気を一瞬でブレイクする二人。某カードゲームで言うなら相川がWブレイカー、そして園部はTブレイカーのスピードアタッカーだろう。

先生の顔は真っ赤に染まっている。あれ、結構恥ずかしかったんだな。俺は別にそこまで恥ずかしいとは思わないが…

だが先生の気持ちはわかる。俺もユエにはいつも笑顔でいて貰いたい。あの優しい

愛ちゃん先生のことだ。きっとあの町が守れなかったり、守山先生が死ねば全て自分の責任として背負って生きていくだろう。そういう人だ、あの先生は。
「ハジメさん…」
「…ハジメ」
　俺を見つめるユエとシア。そんな目で俺を見なくたってわかってるよ…ハァ…
「しょうがねぇな…そこまで言うんなら手伝ってやるよ…だが最後に聞かせてくれ。先生はこの先何があっても、俺の先生か？俺がどんな決断しても、それが先生の望まない結果でも…俺の先生でいてくれるのか？」
「そんなの当たり前だろ？初日に言ったじゃねぇか。裏切ろうが何しようが、お前たちは俺の生徒だってな」
「そうかい…わかった…ひとまず町に戻る。戦うにしても相手の数は膨大だ。準備がいる。戻るぞ」
「ああ、ありがとう、南雲…だが南雲は最低限の援護でもいい。流石にさっきああ言ったばかりだからな」
「やるならトコトン…ってやつだ。先生が気にすることねーよ」

まったく…先生は俺みたいに変わらないでくれよな…

▽▽車にて▽▽

「お前があそこで切り捨てるって言ってれば日本に戻った時にも同じこと出来んのか！って言うつもりだったんだけどなー」

「それ絶対断れねーやつじゃねぇか…」

神は言っている、俺はロリコンではないとーー

待ってくれ、それだけはやめてくれ!!先輩だけで十分だろ!?なあ、やめろ…やめろォオオオ!!!

「聞け!ウルの町の勇敢なる者達よ!私たちの勝利は既に確定している!なぜなら、私たちには女神が付いているからだ!そう、皆も知っている〝豊穣の女神〟愛子様だ!!そしてさらに!!神秘の化身、〝自然神〟誠様だ!!この二神がいる限り、私たちの敗北はあり得ない!!

ささ、誠様!貴方様の御力の一片をお見せ下さい!!」

と俺に行ってくる南雲。おい、巫山戯るなよ。先輩は天使から女神にグレードアップしたからいいが俺を自然神とか…俺、災害級の魔法とか使えねーぞ…!

「先生、何かド派手な魔法を一発頼む。因みに拒否権はない。俺を巻き込んだ代償だ。先生にも彼らの偶像となってもらうぜ」

き、貴様ァァァァ!!!?謀ったな南雲!!俺はそういうの苦手なんだよ!上がるタイプの

人間なんだよ!!

ハァー…これって適当にやったら指揮に関わるやつだよな…?まったく面倒臭い。それにド派手な見栄え重視の魔法…

あ、確か一つだけあったような…一度開発したはしたが結局普通にした方がいいと使わなくなったアレが…!

分身を三十体程出して螺旋丸を作り出す。本来一人、又は二人で作り出すモノを三十人で作るとどうなるか…答えは簡単、デカくなる。ＮＡＲＵＴＯでは少人数でポンポンとデカいのを作り出していたが俺にはまだ出来ない。大勢のサポートがあれば制御出来るが、少人数でなると暴発して失敗してしまう。

一瞬で螺旋丸は膨れ上がり、小さな山一つ飲み込む程の大きさとなり俺の腕を軸として浮かび上がる。更に周りに火遁の術でコーティングし、ミニ太陽が完成する。最も、太陽程の熱量もないため、威力は絶大、殲滅戦には向いているが、時間もかかり周囲の被害も尋常じゃないため使っていなかった魔法だ。

これ使えば南雲達の手助けいらなかったんじゃ…いや、周囲の山が燃えて消えるから駄目だな。

『燃え尽きろ、これは裁き、神罰である、終焉の時来たれりーー〝太陽滅災〟』

適当に作ったそれっぽい詠唱を終え、ミニ太陽を、地平線に見える魔物の群勢に投げ

付ける。
それはゆっくりと俺の元を離れ魔物達に迫る。そして魔物と接触したその瞬間、凄まじい爆音と共にミニ太陽は炸裂し、爆発の中心にいた大勢の魔物は当然のように消え去り跡形も残さない。しかもそれだけではまだ終わらない。余波…熱を帯びた暴風が周辺の魔物と木々に襲い掛かる。
魔物は余波で灰になり、十分な距離があったとしても、熱風に耐え切れず肌が焼け爛れる。しかしそれと同時に周りにあった山が融解し大惨事になっている。まさに焼け野原という奴だ。やり過ぎてしまったがあの中に人の気配はないからまぁ大丈夫だろう。
「あぁ…や、山が…」
「これが自然神、誠様の御力だ!!誠様は魔物を率いる輩を罰せんと、天から遣わした現人神である！愛子様は『豊穣』と『勝利』をもたらす女神!!神々は我らの勝利は決まったも同然である！」
唖然とする町人。すみません、すみません、魔物しかいないけど山破壊してすみません…
すると南雲は自分のことを〝神々の最終兵器（ファイナルウェポン）〟と言い出し、マシンガンで魔物を駆逐していく。そのパフォーマンスもあり町人たちのボルテージが上がっていく。南

雲ェ…

町人達の俺と先輩コールが終わると南雲はボソリと何かを呟き「じゃあ行くか」と言いバイクに乗り駆け出した。それに俺も続く。

さぁ、戦いの幕開けだ!!!

と言ってもこれは殲滅戦、見どころというものも一切ない。ドーンッ!という音が響きすげえ魔法使ってんなぁ～ぐらいである。ＢＡＮＧ　ＢＡＮＧ!と銃音も…ドパンドパンという銃声も山脈に響き渡る。静かに戦えよな～ほんと。俺が一番静かなんじゃないか?影分身たちで一体一体螺旋丸を打ち込んでいってるだけだからな。まったく…俺を見習ってくれよな。

最初の一撃で魔物の数は大分削れた為それほど苦戦は強いられなかった。現在

フィードバック無しで出せる分身の数は約２万、その内約５千体が各地に散らばり情報を集めたり国の仕事に回している為、現在総数約１万５千体。もうすぐに殲滅完了である。

「「「「イヤーーッ!!」」」」

分身たちと同時に残っていた魔物に螺旋丸をシューッ!!超エキサイティンッ!!

よし、これで殲滅完了、ミッションコンプリートだ。

さぁ…これで清水に話を聞ける…

～～～

い。

本当にあの世界が嫌いだった。イジメも受けた。なのにそれで学校に行かなくなれば家族から白い目で見られ…

だからこの世界、トータスに転移した時は舞い上がりそうになる程嬉しかった。俺は特別なんだ！俺は主人公なんだ！あの物語のように華麗に活躍してハーレムでも築いてやるんだって息巻いてた…けど、やっぱりこの世界も俺のようなモブには優しくなかった。

どんなに頑張ろうと、努力して強くなろうとも、あの天之河、勇者にはステータスでも技能でも容姿でも何一つ勝ることが出来なかった。女子も、王宮の女も全員勇者勇者天之河天之河…ッ!!いい加減にしろよッ!!主人公は俺だ！俺が特別なんだ!!何で皆あんな男に惹かれるんだ!?俺なら全員の気持ちに答えてやれるのに!!愛してやれるのに!?

けど、そんな憎悪を抱いていた俺は一瞬にしてそんな大層な器でないことを自覚した。してしまった。

クラスメイトが目の前で死んだのだ。仲良くもない、話したことも殆どない男が死んだ、同郷という身近な人間が死んだという事実が俺にのし掛かった。そうだ、これは現

実なんだ。小説の俺ツエーとは違うんだとようやく理解した。
それを理解した瞬間、死の恐怖に足が動かなくなる。鼓動が早く脈打ち冷や汗がダラダラと垂れ吐き気を催す。そう、俺は死の恐怖に屈服してしまったのだ。怖い、あまりにも…怖い…
守山先生が絶対に守るって言っていた。けど守ることは出来ずに結局一人死んでしまった。もう先生は信用出来ない。信用出来るのは自分だけだ…

訓練場に覚束無い足取りで向かうと、そこにはあの怪物、ベヒモスと正面に向かい合っていた天之河たちが訓練に勤しんでいた。なぜ彼らは恐怖に打ち勝つことが出来たのだろうか…恐怖を乗り越える力…精神…それが俺に足りない主人公としての素質なのだろう。少年漫画を見てみろ。強大なラスボスにも怯まず立ち向かう主人公を…俺にはどうにも真似出来そうにない…
スゴスゴとその場から立ち去り、図書館へと向かう。この世界に日本のような娯楽はないため、本を読むことしかすることがないのだ。俺の天職は〝闇術師〟の為、それに関する本を数冊手に取り自室へと戻る。
そしてその内容を読んでいく内に、俺は闇術師にドップリと嵌ってしまっていた。そ

れだけ心が折れた俺にとって魅力的な内容だったのだ。
それは極めれば〝洗脳〟という技能を獲得出来るのではないか…と考えた俺は直ぐに行動し会得することに成功する。
そして俺は今までの苦悩が全て吹き飛んだ。洗脳、それはつまり好きな人間を好きなように出来るのだ。そこから俺はドンドンと水を得た魚のように加速していった。罪悪感も殆ど感じなくなり、恐怖も一気に治った。
洗脳は言葉の通り対象を想いのままに操ることが出来る。しかし欠点もあり、自我を持つ存在には何時間、何十時間と洗脳を掛け続ける必要があるのだ。これでは真面に使えないし、バレた時のリスクも高いと考えた俺は、イシュタルのある言葉を思い出す。

魔人族は魔獣を操っている。

これなら洗脳でも出来るのではないか…という考えに至った。思い立ったが吉日、すぐに城外に出て雑魚の魔物を実験台に使い、数十日目で遂に洗脳を掛けることに成功した。上手く行った時の俺と言えば過去最高の笑顔で飛び回っていただろう。それ程までに舞い上がっていた。
少し思っていた結果と違ってしまったが、それでもこの力が有れば俺は主人公になれ

ると確信した。けどまだ練度は低い。もっと練度を上げて天之河を越えなくては…

畑山先生がウルの町へと向かう?そんな話を聞いた俺は即座に参加すると先生に伝えた。交流のないクラスの奴らは驚いていたが、先生は何も聞かずに了承してくれた。ありがたい。丁度洗脳の練度も上がってきたところだ。今回の遠征で新たに強力な魔物を洗脳して支配してやろう。

ウルに着いたと同時に俺はすぐに先生たちから離脱し山脈へと向かう。配下の魔物を集める為に行方を眩ませたのだ。しかし今回、というか毎回だと思うが、守山先生の分身が付いている為、見つかるのも時間の問題だろう。凄まじい人海戦術よりも恐ろしい情報戦はない。バレればアウト、しかし急いで洗脳をする。その為に眠る時間は極力削るというハードワーク。しかしそれでも、二週間となると限界も訪れ、一時中止と夕方頃に作業を終えたと同時に後ろから声をかけられる。

魔人族だった。俺は即座に魔法をいつでも放てるように準備し警戒するが、魔人族に

は戦う意思は皆無のようで、手を上げながら取引をしないかと言う。
内容は畑山先生の殺害、報酬として殺害した暁には俺を魔人族陣営で勇者として迎え入れてくれるという。
俺はすぐにその話にのった。悪くない。今のように周りくどいことをせずに畑山先生を殺すだけで勇者になれるのだ。これに乗らない手はない。それに魔人族は人間族と違い見る目がある。俺が勇者の下で燻っているのは勿体無いとさ。そうだ、そうなんだ。俺は必要な存在なのだ。一人ぐらいいなくてもストーリーに何の影響もないモブとは違うのだ!!
そしてここからが俺の人生の山場だと思っていた。
偶然グッスリと寝ている強力な黒竜を発見した。洗脳するのに丸一日も掛かったが、そのお陰でより強力な魔物を手に入れることが出来た。それに魔人族からの支援もあり、魔物の総数およそ１０万。これなら確実に先生を殺害できるだろう。そう満を待して大群を町に差し向けたのだが…

「グッゾゾォオオオッ!!!!誰なんだよこの厨二野郎ッ!!オイッ!テメェだよ!後ろ向くんじゃねぇ!!」

美女を侍らした白髪の男に取り押さえられ、先生たちの目の前に放り出されていた。そう、俺は負けたのだ。それも完敗…一切の被害も出さずに俺の群勢は全て無に返されたのだ。山は被害にあったが…

「清水君、落ち着いて下さい。誰もあなたに危害を加えるつもりはありません……先生は、先生たちは清水くんとお話がしたいのです。どうしてこんなことをしたのか…どんな事でも構いません。先生に、清水君の気持ちを聞かせてくれませんか?」

そう膝立ちの俺の目の位置を合わせるようにしゃがんで覗き込んでくる畑山先生。その少し後ろでは、戦場にて最も煩かった守山先生が静かに俺を見下ろしている。俺の気持ち?なんで先生たちはわかってないんだよ…

誰も彼もが勇者勇者…!!どいつもこいつも俺を無能呼ばわりしやがって…俺は南雲のような雑魚の無能とは違うんだ!特別な力があるんだ!世界をもひっくり返せる能力があるんだ!!俺のが上手く出来るのに…気付きもしないで無能無能と…モブ扱いしやがって…!!

チラリと兄弟の顔が脳裏に映るがすぐに追い出す。不必要だあのようなモノ…!!

「そう、沢山不満があったのですね…でも、清水君。皆を見返そうと言うのなら、尚更先生には分かりません。どうして町を襲おうとしたのですか?もしあのまま町が襲われて…多くの人々が亡くなっていたら…多くの魔物を従えるだけならともかく、それでは君の価値を示せません」

そうゆっくりと俺に語りかける畑山先生に伝える。人間族には価値を示せない。当然だ。逆に危険分子とされるのがオチだろう。だが…

「…示せるさ…魔人族になら」

「なっ!?」

その場にいた白髪の男以外は顔に驚愕の表情を浮かべている。そうだ。その顔が見たかったんだよ先生。たけどなぁ…何で…何で１０万の魔物が負けるんだよ!守山先生の危険性は十分に理解していたさ!その為の１０万だからな!!だがそこの厨二野郎…お前さえいなければ…いなければ俺は特別な存在になれたんだ!!何で異世界にあんな近代兵器がいるんだよッ!!

「清水君…君の気持ちはよく分かりました。特別でありたい。そう思うの気持ちは間違っていません。私もそう思ったりします。人として自然な望みです。けど、君は方法を間違えました。これ程のことを出来る君ならすぐに人間族の中でも特別になれます。だから魔人族側には行ってはいけません。君の言う魔人族はそんな君の思いを利用し

たのです。そんな人に先生は大事な生徒を預けるつもりは一切ありません…清水君…やり直しましょう。まだ今なら引き返せます。皆に戦って欲しくはありませんが清水君が望むなら先生は応援します。君なら天之河君とも肩を並べて戦えます。

そしていつか、皆で一緒に日本へ帰りましょう?」

……クククッ、まだわかってないのかよ先生…だからアマちゃんなんだよクソが…今更やり直せる訳ないだろ…それに今回魔人族から受け取ったあの強力な魔物…そこの厨二野郎にぶっ殺されたが本来なら勇者の天之河をも凌ぐ強さなんだよ…こんな化け物をポンポン渡せる魔人族に人間族が勝てる訳ないだろ…

もう俺は後に引けないんだよ…!!

「動くなぁ!ぶっ刺すぞぉ!」

手を差し出してきた先生の手首を掴み俺に引き寄せ、首筋に魔物の毒針を添える。脅迫すると皆焦った顔をして武器を手放す。勝った…これで俺は勇者になれるんだ…!!

「フン…やっぱり先輩の命がテメェと魔人族との取引か…」

先程までずっと黙って見ていた遂に動きだし守山先生が俺に向かって歩み寄ってくる。

「く、来るな…!!刺すぞ!?本気だぞ!?」

「テメェは本当に刺せるのか?殺す…口に出すことは誰にでも出来るがそれを実行する

となると難易度は一気に上がる…魔物達に殺させようとしていたテメェが殺れんのか？」
「刺せる…刺せるさ…!!本気だ!!俺は先生を殺して魔人族の勇者になるんだ!!」
「勇者…か。清水…正直言うがテメェが魔人族側につくって話…俺は駄目だと言うつもりはない」
「も、守山く…グッ!?「黙ってろ!!」」
守山先生の言葉に反応した畑山先生の首を強く押さえ黙らせる。しかし俺が魔人族側に行くことを止めないのか…？
「まぁイシュタルが言うには魔人族は悪らしいが…俺から言えば戦争を始めた時点でどっちも悪だ。戦争なんてもんは自己主張の押し付け合いでしかないからな。だが清水…テメェは勇者になりたいんだよな？今のテメェ自身を客観的に見てみろ。
どうだ？テメェの今の姿…そんなテメェが勇者になれると思うか？逆に聞くがテメェは人を人質にする奴がヒーローとして敬われると思ってんのか？主人公でならいるかもしれんが勇者だぜ？魔人族だって人間と同じなんだぜ？まぁ会ったことはねぇが…そら、魔人族もテメェを見限ったようだぞ？」
守山先生は一瞬にして俺が持っていた毒針を奪い取り俺の頬を殴り飛ばした。一瞬それを理解出来ず、急に空が視界に映った時はパニックになり、殴り飛ばされたと理解

すると頬に激痛を感じる。
「オラァッ!!南雲ォ!!」
「あそこか…!!」
　先生の手に風が現れそれは球体となり、遠距離から放たれた蒼色のビームのような水流と鬩ぎ合う。次第に螺旋する球体は大きさと共に威力を上げていき水流を打ち消す。
　そして死んだ筈の南雲の名を呼び、それで何故か反応した厨二野郎が銃で遠くに薄らと見える魔人族を狙い撃つ。
　まさか…まさかそいつが…南雲だとでも言うってのか…?は…?雑魚が…雑魚だったアイツが…?何故…?何であんな雑魚が俺の群勢を滅ぼす力を手に入れてんだ…?嘘だよな…俺以下だと思っていた奴が…特別になっているなんて…
「逃げられたか…で、どうする清水。こうして見限られた今、テメェの居場所は無くなった。魔人族に一度裏切ったテメェを人間族が受け入れるかとなると俺や先輩が頼んでも難しいだろう。これからどうする?勇者になる以前の問題に直面したわけだが…何か進路の面談みてぇだな。今は関係ぇねぇがな」
　顔が青くなっていくのを感じる。そうだ…魔人族のあの男は俺を殺そうとした…ならば俺はこれからどうすればいいんだ…人間族も俺を受け入れてはくれないだろう。最悪、勇者の一行の一人が裏切ったという事実を揉み消そうと俺を暗殺するかもしれな

い…!!よくても幽閉生活だろう。

「た、助けてくれ先生…!!俺はまだ死にたくも捕まりたくもねぇ!!前に言ってただろ!?生徒なら裏切っても味方でいてくれるんだろ!?だったら俺を「甘ったれてんじゃねぇ!!」ヒッ!?」

「まだテメェは今回しでかしたことを反省してねぇな!?その目を見ればそれくらいわかんだよ!!罪を償う、味方になる以前の前にテメェには道徳の勉強をする必要があるなテメェは!!下手すりゃ今回の魔物の群勢で関係ねぇ人間が被害を出すとこだったんだぞ!!自分で責任を取れねー餓鬼が好き勝手に都合のいい大人に頼るんじゃねぇ!!

まぁ…お前がそうなったのもあの時大迷宮について行かなかった俺の落ち度でもある。だから居場所と身の安全は俺が保証してやる。他は全てテメェが何とかしろ。一度自分をゆっくりと見つめ直せ」

すると次の瞬間、俺の腹に衝撃が走り意識が朦朧とする。

「これは先輩の首を絞めた分だ。次はねぇぞ」

なん、だよ…それ…

俺は意識を手放した。

～～～

程かあいい。

と、清水のことは心配しなくても大丈夫だ、問題ない。ひとまずこいつは神山に連れて帰る。自然と触れ合ってれば心も落ち着くだろう。しかしそうするにあたって厄介な存在は先輩の護衛としてついて来た騎士達の存在だ。このことを先輩に相談すると、先輩はウルッとした顔で騎士達に頼み込めば嬉々として「我々は何も見ていない。魔物を操っていたのは魔人族で清水は魔人族の人質として捕らえられていた」と事実を変えやがった。

おいおい、それでいいのか騎士達よ…まぁ俺もあんな顔されたらどんな頼みでも断れんだろう。先輩、恐ろしい子…!!

ひとまず俺は気絶した清水を担ぎ乗って来た馬に跨る。名前はブラックキング、真っ黒の毛並みをしたオスの馬だ。可愛いだろ？

「そ、その馬は…!?あの暴れ馬と有名なブラックキングではないか!?ブラックキング…その血統の馬に乗りこなすにはある思想が必要というが…まさか貴方が…!!」

へぇー、そんな設定が…こんなに懐っこいのになぁ…

一応試しに騎士の近くに連れて行けばブラックキングは騎士を蹴飛ばしてしまった。本当なんだなこいつ…

もしかして俺の黄金の精神に反応したのだろうか。スターァァアプラチナ!!オラァ

!!って感じで。

まぁ詳細はわからないみたいだしそれでいいか。先輩に会えなくなるのは残念だが仕方ない。

では、サラダバー！

俺がロリコンかだと…？俺に質問するな。

神山へと戻った俺はまず消さずに残していた大勢の分身を数十人単位ずつ消していく。消していくのと同時に流れ込む魔物を殺す感触が俺を蝕み嘔吐してしまう。まだ魔物を自分の手で殺したことがなかったから忌避感がすごいなこれ…今までは幻影やらだったし他の人間がトドメを刺してたからな。

絶対に一気に消さない。確実に俺の精神状態がやばくなる。歪んでしまう。吐く、忌避する、これが正常だ。正常なんだ。

とまぁ丸一日苦しんで翌日、回復した俺は清水と正面から腹を割って話し合っていた。やはり清水は特別扱いされている天之河に強い嫉妬の感情を持っていたようだ。まぁ、俺もそこそこラノベやアニメを嗜む者として共感出来ることもある。実際に無双してモテモテって展開を妄想ってのも若い頃はよくやったもんだ。

だがそれは二次であるからこそいいのだ。現実と二次元を一緒にしてはならない。前にも言ったがハーレムを許す寛容な女性などかなりの少数派だろう。南雲たちは例外だが…因みに俺は一妻多夫は断固として認めん。周りならいいが当事者になるのは絶対やだ。やっぱり好きな人には自分だけを見ていて欲しい。その気持ちが強いとヤンデレとかになるのだと思う。俺は全然大丈夫だがね。何かいいじゃん?自分のことを監禁したくなるぐらい愛されるなんて。

いや、監禁は嫌だな…まぁ自分があの伊藤〇みたいなことしなきゃ刺されないわけだし全然オーケーです。

それと清水に好きな人はいるか?と聞くといないらしい。白崎と八重樫は二大天使とか言われて高嶺の花ってやつだから除外。

ならハーレムに加えたいと思う人物はいるのかと聞くと、王宮でも上位に入るベッピンさんや胸が一番大きいと評判のメイドなどなど、有名どころの女性が出るわ出るわ。

「正直言うけどさ…特段好きでもない女性に言い寄られても嬉しくなくないか?」

涙を流しながら憤怒の表情をした清水に頬を思いっきり殴られた。理不尽ッ!!取り敢えず痛かったので殴り返しておいた。

中学生の時ぐらいだったか…自分で言うのもあれだが俺の容姿は整っていると思う。告白告白、ウハウハリア充人生だったよ?俺イケてるッ!って中坊が考えそうなことか

なり考えてたよ？けどさ…俺の知り合いの初々しいカップルを見て認識が変わったんだよなぁ…

なんか急に虚しくなってさ。そう感じた俺は取り敢えずその知り合いのようになりたいって思ってすぐに行動に移したわけよ。まずは気になってる人を思い浮かべたさ。そして出てくるのはテメェらでいう白崎や八重樫のようなマドンナ？的な女子でさ…顔が良いってことぐらいしか相手のことを知らねぇってやつよ。それによくよく考えると好みじゃなかったし。

あの時は流石に焦ったね。自分の好みってやつがわからなかったんだよ。雑誌、エロ本、俺が好きそうなタイプの女性を探そうと必死になったけど進展なし、息子は反応するけど何かしっくりとこない感じだ。

そんな中、俺は高校へと進んだ。まだ答えは得ていない。けど俺はここで転機に訪れた。隣の席の少しふくよかな男子生徒が、ランドセルを背負った美少女の絵がプリントしてあるクリアファイルを取り出したのだ。その美少女を見て俺はピンときたね。これが俺のタイプかッ!?ってね。

「つまりは？」

「ちっさい女の子がタイプだ」

「つまり先生はロリコ「俺はロリコンじゃない！」ンだったんですね」

「言い切るんじゃないぞ清水!」

途中でぶった斬ったというのに最後まで言い切りやがった。やりおるわ此奴…というか俺はロリコンじゃない。

因みにふくよかな彼とは今でも続く親友でもある。

よし、話を戻そう。まぁ俺が言いたいのは一夫多妻を目指す目指さない関係なく、まずは一人を愛することから始めろってことだ。これは何度失敗しても俺はいいと思う。それも恋愛ってものには付き物ってやつだ。粉砕玉砕大喝采ってな。

一人を十分に愛せない奴が複数人を愛せるわけがねぇからな。

はぁ?愛せるだって?どの口が言ってんだか…率直に聞くが恋愛経験は…?

うん、先生が悪かったから泣かないでくれ。

当初は説教や説得を試みようとしていたが、いつの間にか恋話へとシフトチェンジしていった。男二人で何やってんだか…

だがこれでも清水の心を動かすには効果的だったようだ。今までこのように本音で語り合える友人がいなかったとか…悲しい

▽▽▽

あれから数十日が過ぎた。時の流れは早いものである。ひとまずハーレムを築こうと必死になり修行をしている清水を見ながら微笑む。動機は正直不順だが、天之河への妬みが薄まったのはいいことだ。因みに清水がハーレムに加えたいという女性のうち数人とは何度か話した事があり、その全員が天之河に恋愛感情を抱いていなく、恋人が

いないことを伝えると俺に土下座して修行をつけてもらうように頼み込んできた。
ええ……（困惑）
もともと頼み込まなくても既に決定していたため問題はなかったが…
清水は先日、俺と馬鹿笑いをしながら色々と語り合っている内に色々と吹っ切れたらしく、キャラ崩壊か!?という程に明るい雰囲気を醸し出すようになった。そして自分のしでかした事の重大さを理解した清水は、被害のあった冒険者の身内に謝罪に向かうようだ。勿論、本人も許してもらえるとは思っていないらしく、せめてもの罪滅ぼしをしたいと考えているそうだ。勿論、それは俺も出来る限り協力する。
明日出発だ！っというところで天之河達と一緒に大迷宮に潜っていた分身から連絡が入った。
「どうしたんですか先生…顔が険しくなってますけど…」
「…今、オルクス大迷宮で天之河が魔人族と交戦中だそうだ」
「な!?」
「清水、ついて来い！何とかする方法があるやもしれんッ!!」
今度は絶対に駆けつけるッ!!どんな手を使ってでも…!!必ず…!!
もう取りこぼさないッ!!

～～～

「全員退避ィィイッ!!」
守山先生が大声で叫んだ瞬間、先生の身体は真っ二つに引き裂かれる。白い煙が立ち切り裂かれた先生が消えるのと同時に別の位置から新たな先生が現れる。
「やっててよかった五人組ッ!!さっさと下がれテメェら!!」
先生の怒号に反射的に全員体を動かし部屋から出ていたわ。次の瞬間、大広間は先生の分身がギチギチに詰め込まれていたわ。何これ…
すると分身の先生たちは竜のような異形へと姿を変貌していき、最終的には石像となり大広間を埋めつくす。
「逃げるぞ!ありゃ魔人族の仕業だ!しかもかなり強力な魔物を引き連れてやがるッ!!」
するとガラガラという石像が崩れた音が中から聞こえてくる。破壊しながらこちらへと向かっているんだろう。
「でも先生!ここで逃げても結局魔人族とは戦わなくてはいけません!ここで戦う方が!!」
「無理だ!!平地なら勝算はあるがここじゃ俺の分身の強みが余り発揮出来ない!!それに魔物の妨害があるから迎撃は難しい、よって撤退だ!!」
「この程度であたしの妨害だぁ?甘く見られたもんだねぇ」

光輝が先生にまた意見しようとした次の瞬間、入り口付近の石像が破壊され、妖艶な雰囲気を醸し出す魔人族の女性が現れた。そんな魔人族に見惚れている男子が何名か…ちょっと今はそんな時じゃないでしょ!!

「天之河、八重樫!!テメェらで皆を先導して上へ上がれ!ここは俺が時間を稼ぐ!!」

「しかし先「わかりました!早く行くわよ光輝!!」…くッ!!わかった…!」

また光輝が先生からの指示に何か言いそうだったので遮る。ベヒモスの時みたいに遅れてしまったらまた南雲くんのような被害者が出てしまう!

先生の指示通り上の階層に上がっていくが、その階層の魔物たちに襲われてなかなか早く進むことが出来ない。いつもならすぐに倒せる魔物が焦りのせいかなかなか倒せない。連携が取り辛くなっている!このままじゃ…!!

ドカンッ!!

突然の砲撃音に皆の動きが鈍る。咄嗟に香織と鈴が〝聖絶〟を唱え結界を張るが、それはすぐに硝子のように容易く破られる。

「グオッ!?」

重格闘家の天職を持つ永山くんが〝金剛〟を使って皆を庇うが、余りの威力で吹き飛ばされる。私たちの中で一番防御力の高い永山くんが結界で威力を少しでも和らいだ何かで吹き飛ぶほどの威力だ。私たちが喰らえば一撃で戦闘不能になるだろう。

砲撃された方を見るとそこには砲台を背負った亀のような魔物がこちらに砲台を構え照準を合わしている。
「マズッ!!皆伏せて!!」
結界師の鈴は複数枚の聖絶を作り出し、亀から撃ち出された砲弾を斜め上に受け流すことに成功する。
「よし、これで道を開くッ!!ーー〝天翔剣四翼〟!!」
光輝の聖剣から四つの光の斬撃が飛翔し、亀の魔物に迫る。これは見事に遠くにいた亀に直撃し、悲鳴と共に爆煙が巻き起こる。
これでここは…!!ッ!?
そこで私は疑問に思った。何故こんなに黒煙が酷いのか…私たちのの場所までは来てないけどすぐ近くまで来ているし一向に治る気配がない…そして今、一瞬空間が揺らめいだ。
「香織ッ!!危ない!!ガッ!?」
私は刀を振り香織を見えない脅威から守る為に前に出る。しかし見えない敵の攻撃を防げるわけもなく腕から鮮血が舞う。けど…大体の位置が分かれば…!!
腕を振り見えない敵に流れ出る血を浴びせ、ある程度姿を視認出来るようになった瞬間、首を狙い刀で一閃。

魔物の首が落ちるのを確認した私は一息付き皆に注意を呼びかける。
「すまん、全く気づかなかった。まさか姿だけでなく自然エネルギーでさえ感知出来ん魔物とはな。時空間系の固有魔法か…?」
背後からピギャッ!という音が聞こえ振り返るとそこには首がなくなった魔物の蛇のような尻尾を掴んでいる先生の姿があった。先生が掴んでいる尻尾をよく見るとピクピクと口らしきものを開けて痙攣している。まさか完全に仕留め切れてなかった!?
「あ、ありがとうございます…」
「ああ、しかしまだ油断するなよ。よく目を凝らせば空間の歪みが分かる。今下で俺が魔人族を止めているからまだ時間はある。ゆっくりでいい。焦らず掛かれば倒せない敵じゃあない」
「雫ちゃん!!大丈夫!?」
「あー、うん。助かったわ香織」
香織が私の腕を魔法で治してくれた。凄いわねこれ…血も元に戻ってる…結構今更の話なんだけどね…ッ!!
飛びかかってきた魔物を斬り捨て残っていた胴体を先生が消し飛ばす。
「よしー!テメェら!!行く……」
声が途中で聞こえなくなり、怪訝に思い先生の方を向くとそこには私たちを守るよう

に通路に分身で蓋をするかのように魔法を受け石化した先生の姿だった。
「…え?」
「クッソ…どっかからショートカットしやがったな?下で分身が魔物たちに群がられてやがる…」
　すぐに新しい先生が出て来た。心臓に悪いからやめて欲しい。けどショートカットしたってことはまさかすでにここに魔人族が…
「へぇ、あたしの〝落牢〟を防ぐとはねぇ。やっぱりあんたは情報通り、ある意味勇者や豊穣の女神以上に厄介な奴だ」
「おお、あんがとさん。で、俺らに何のようだ?対応からして歓迎ムードじゃないのはわかってんだろ?大迷宮に挑むんなら俺たちは邪魔しない。だからトットと去って欲しいんだが…」
「出来ればそうしたいんだけどこっちにも事情があってねぇ。で、勇者がそこのアホみたいに無駄にキラキラしてるそこのアンタかい?」
「あ、アホ…う、煩い!魔人族なんかにアホ呼ばわりされるいわれはないぞ!」
　光輝が隣で軽くキレたが龍太郎が抑えてくれている。
「はぁ〜、こんなの絶対いらないだろうに…どっちかと言えばそこの先生の方が欲しいぐらいなんだけどね…まぁ命令だから仕方ないか…一応聞いておく。そこのキラキラ

したアンタ、あたしらの側に来ないかい？あたしらの仲間に…さ」
か、勧誘が目的で私たちを…!!それに用があるのは光輝だけみたいで他は全員どうでもいいらしい。けど当然、光輝はそれを断る。当然だ。いつも正義正義言ってる馬鹿は普通の人間とは一味も二味も違うのだ。
「そうかい…まぁ知ってたけどさ。アンタは？先生さん、あたしら側に付けば人間族以上の待遇を保証するよ」
「興味ないね」
「本当にそうかい？じゃあ新たな力には興味ないかい？あたしら側につけばもっと力を」
「全然興味ないね」
「魔人族の美女を侍らすことも出来るんだよ!?こう言っちゃあれだけどあたしも美女の枠に入っていると思う。けどそれ以上の美女があたしらの国には…!!」
「全然興味ないねぃ、というわけで喰らえ!!」
魔人族に業火が襲い掛かる。しかしそれを土の壁で防ぎ、余裕そうな声を出した瞬間、先生が風の球を投げたことでかなりの威力の爆発を起こす。
そして顔に醜い火傷を付けられた魔人族は怒りの表情を見せ魔物たちに命令する。
「一匹残さず駆逐しろッ!!」

魔物たちの雄叫びが大迷宮に響いた。

〜〜〜

「我と誠が繋がる…其方ら風に言えば合体…という奴だ。それなら我が存在と誠の存在を同一化することができ、分身越しに召喚出来るやもしれん。やったことがない為、絶対とは言えんがな」
「それでいい!やってくれ!!」
　藁にもすがる思いでドラゴンに頼む。それしか方法がないのなら失敗しようがやるしかない。それしか俺があいつらを助ける方法がないのだ。
「だが、我の力は強大故、下手すれば我が力に飲み込まれ戻って来れぬやもしれぬ。それでもやるのか?」
「ああ!!」
「そうか…ついにこの時が来たか…よかろう。我について来い」
　ドラゴンについて行った先には隠し扉的な物があり、その中には膨大な自然エネルギーが溢れている。ここで力の制御に失敗すれば俺は石像となってしまうだろう。だが、俺はもう後に引けない。俺がやらねば誰がやるッ!!
　空間の中央の岩で座禅を組み、自然エネルギーを体の中に取り込んでいく。そして発動したのは仙人モード擬き。肌が鱗になり準備はバッチリだ。
「では…行くぞッ!!」

ドクンッ

ジリ

なんだこの音は…煩い…めちゃくちゃ煩い…

「誠くん、誠くん!朝ですよ、起きてください!」

ジリジリという音は止み、体を揺さぶられる。それによく聞き馴染んだ声が……ッ!?
ガバッと勢いよく飛び起きると、そこにはエプロン姿の畑山先輩がいた。
「え…?先…輩…?」
「へ?急にどうしたんですか?そんな昔の呼び方をして…ってそれより今日は入学式の日ですよ!早く起きてください!」
そう言われてすぐにダブルベッドから出る。
どこだここは…何がどうなっているんだ…!!
先輩の指には銀色の指輪が嵌められていた。

俺はロリコンではない…俺は…俺は…いや、ロリコンでもいいかもしれない…

あれから一年が経った。

「さぁ、今から授業を始める」

トータスに行く前と何ら変わらない生活。どうやら俺は畑山先輩…いや、愛子と数年前に結婚している。結婚式の記憶はないが、徐々に記憶に刷り込まれていき、今では結婚式の内容を薄らと思い出せている状況だ。そしてトータスでの俺の記憶は逆に薄まって来ている。あの教皇…名前は何だったか…向こうで出会った人物を殆ど忘れている。

そしてどうやら愛子はトータスのことを全く知らないようだ。あの転移した年から既に１０年程経っている。俺が体験したあの出来事は夢だったのだろうか…

授業を終え、来週の授業の準備を終え帰宅する。

そして迎えてくれるのは俺の愛しい愛子。こんな幸せな日々を俺が送ってもいいのだろうか…いいんだ。俺は十分動いた。あれは夢だったんだ。あれは…悪夢だったんだ…

今日は南雲と白崎の結婚式だ。俺たちはそれに招待され、スーツを着て式場へと赴いた。

南雲は卒業後、親の会社に就職。次期社長として仕事を頑張っているそうだ。白崎は看護婦となり病院で働いているとか。二人とも俺の賃金を軽く超えていき悲しい…

というかようやく結婚したんだなぁ…もっと早く結婚すると思ってたんだが…どっちも忙しくて結婚出来なかったのだろうか。

「先生!!」

近づいて来たのは八重樫と坂上…いや、坂上雫と坂上龍太郎…だな。この二人、実は一年前に結婚している。かなり意外なカップリングだった。てっきり天野之河とくっ付くと思っていたんだが。

そうそう、天之河は現在行方不明となっている。裁判官を目指して頑張っていた彼だが突如、神隠しにでもあったかのように数年前姿を消したのだ。トータスにでも勇者として彼だけが召喚されたのだろうか…それはわからない。警察も血眼になって探しているらしいし時期、異世界召喚されてない限り見つかるだろう。だとしても心配だ…

しばらくすると、式場に白崎と南雲が入場する。南雲の髪の毛が黒い。物凄く違和感がある。こう…なんというか…白かったような気も…いや、奈落に落ちてないのならこれが普通なのか…あの時俺が同行していればこの南雲のように穏やかな暮らしが…

最初の主賓スピーチとケーキ入刀が終了し、料理が運ばれてくる。うん、美味い。そろそろ南雲と白崎…結婚したからどっちも南雲か…ややこしい。下の名前で呼ぶか…

まぁ二人に挨拶しに行こうとすると、目の前で綺麗な白髪の女性が思いっきり顔面を床に叩きつけた。

「ちょっ!?大丈夫ですか!?」

「はい～…大丈夫ですぅ…あ、すみません、ありがとうございます!」

彼女は手を差し出すと、礼を言いながら立ち上がる。

「私は志愛・ハウリアと申します。あ、これ名刺です」

「これはご丁寧に…ほう…南雲の後輩さんでしたか。南雲の高校時代のクラスの担任として出席した守山誠です。よろしくお願いします。……」

「あのー…どうされましたか…？」
「いや、すみません。少し知人に似ていたものですからなぁ。ハッハッハ！」
マズいな…少しジロジロと見過ぎでしまった…愛子には冷たい目線で射抜かれてるし…
しかし志愛・ハウリア…ハウリアは聞いたことがなかったが志愛という人物は何処かで会ってある気がする…あー…何処だったか…
「あ、ハウリアくん！また他所様に迷惑かけて！」
「ぶ、部長!?す、すみませんすみません!!」
他所のテーブルから小走りでやって来た、着物を着た黒髪の女性は志愛を叱り俺に頭を下げてくるが、何もされていないし迷惑にもなっていないと言うとかなりホッとした顔になっていた。普段から何をやらかしているんだ彼女は…
どうやら着物を着た黒髪の女性は志愛の上司のようだ。名前は天尾（てお）　黒流（くろな）というらしい。かなりのベッピンさんだ。まぁ俺の愛子には敵わんが。
しかし志愛に天尾……あと少しで出て来そうなのに出てこない。彼女たちのような存在と一度何処かであったような気がするのだ。恐らくだがもう既に殆どの記憶が飛んでしまっているトータスに何ら関わりがあるのだろう。

結局この日には思い出すことが出来なかった。一体何だっただろうか…これは思い出さなければ駄目なような気がする。けど思い出せない…何か一つ、ピースが欠けているかのように…

その日の夜、近所の公園のベンチで物思いにふける。今の生活は充実している。幸せだ。来年には子供も産まれる。…だが本当にこれでいいのだろうか。

本当に…俺には何か大切な使命…というか何かしなければならないことがあったはずだ。先生として…生徒を守る…

ワンッ!!

犬に吠えられる。ふと下げていた顔を上げるとそこには大きな犬が舌を出しながらこちらを窺っていた。リードが付いていることから飼い主が綱を手放してしまったのだろう。するとすぐにトットットッと人が走る音が聞こえて来た。街灯に照らされ姿を見せたのは金髪赤目の少女だった。

「…メルド!!…私を置いていったら…メッ！」

そう言い犬を叱りつける少女。どうやらこの犬はメルドというそうだ。しかし何故こんな遅い時間に幼い少女が一人で出歩いているのだろうか…親御さんは何を考えているんだ。

「…私、これでも成人してます…」

その言葉に愛子と初めて出会った時と同じ単語が頭を過ぎる。ご、合法ロリだとッ!?

「…貴方は何故こんな時間に黄昏てるの?…まさかリストラ?」

「いやいや違うよ!?…まぁちょっと悩み事がね」

「悩み…事?」

ゆったりとした口調でとんでもないことを口走る少女…じゃなくて彼女。名前は優恵というらしい。金髪に赤目というのは生まれ付きらしく、これでも生粋の日本人なのだとか。

しかし優恵か…やっと欠けたかピースが揃った。ユエにシアにティオ。彼女たちは

南雲に助けられ、恋慕の情を抱いていた女性たちだ。そして騎士団長のメルド。何故か犬になっているが。そうだ、思い出した。全てとはいかないがトータスでの出来事を…殆どを思い出すことが出来た。

「…で、百面相してるけど。…悩み事って？…話せば楽になる」

「まぁ…そうだな。吐いちまうのもいいかもな…。これでも教師をしていてな…生徒たちに頼られて…自分でも俺を、先生を頼れと言って…けど肝心な時に俺はその場にいなくて…生徒を守れなくて…次こそはと決意して……ふとそこで疑問に思ったんだ。俺がいて何になるんだろうって。俺がいても守れなかったかもしれない。逆に俺がいたせいで犠牲になった命が増えたかもしれない。俺が…いなければもっと上手く回っていたかもしれないって…

最後の最後にはこうしてここに俺だけが幸せな生活を送っているんだ。彼らは今危機に立たされている。けど、俺がいないほうがいいかもしれない。いない方が、俺よりももっといい指導者がいればこうはならず、犠牲になった命も少なくなっていたかもしれない。俺以上に上手くやっていけたのかもしれない…

あぁ、すまない。少し取り乱してしまった。ありがとう、少し楽になったよ」

礼を言いその場から去る。俺は他人に何を言っているのだろうか。似ていると言ってもただの他人だ。彼女からしても俺が何を言っているかわからないだろう。きっと

頭の逝かれた奴とでも思われているだろう。

「…待って」

そう優恵の口から溢れる。俺は振り向くと、彼女の真紅の瞳が俺を射抜く。

「…貴方のそれは逃げてるだけ。たられば なんて存在しない。…ただの都合のいい妄想。それに今は幸せって言ってたけどそれは本当?

…はい、鏡。自身をしっかりとみて。…酷い顔。そんな顔でよく幸せだなんて…

…さっき言ってたこと…本当にそうなの? 生徒たちが危機に瀕しているのに貴方はここで何もせずにただただ生きている。それで満足? 貴方は一度決めた信念を曲げられる程柔な人間なの?…けど私は貴方のような人間を否定するつもりはない。…だって私も同じだから。多分それ以下…信じてたおじ様に裏切られた…国に裏切られた…一度は自分の命を削ってでも守ろうと思っていた国民をあっさりと殺そうと思った。決して許さないと思った。復讐してやるとも思った…けど長すぎる空白の時間の中で廃れたけど…」

クルリと身を翻し優恵は俺の反対側へと歩いていく。

「…貴方はどうするの? 逃げる? 私と同じようにその信念を曲げてでも今の仮初の幸せで悦に浸るの?…それとも、本来の貴方が進む道、歩む運命…その全てを受け止めてでも信念を曲げずに突き進むの?…まぁ、私にはどれでもいいけど」

そうして彼女は闇に呑まれ姿を消した。そんなことわかっている。逃げたってことはこの俺が一番理解している。だけど俺はどうすればいいんだ!?ここが仮初って言うのならこの半年間…いや、この世界での出来事はただの夢だって言うのかよ!?

熱もあった…愛もあった…生命の終わりも…生命の誕生も…そんなこの世界が仮初の世界であり俺の都合のいい夢だってのか!?

「誠くん」

バッと振り返るとそこには愛子が佇んでいた。何故愛子がここに…?家に先に帰るって…

「すみません、心配でつけてきちゃいました」

そういって微笑む愛子。どうやら全て聞いていたようだ。この世界が俺の思い描いていただの夢だったということに…

「誠くん…貴方の気持ちはよくわかりました。頼られて、その期待に応える難しさ。私にも同じような経験があるのでわかります。けどですね…私は誠くんのその考え方には賛同できません。貴方は結果を求めすぎてるんです。どんな最善な行動をとったとしてもそれが誠くんの望む結果にならないことだって十分にあり得ます。極論を言うと結果とそれに至るまでの過程…そんなものどうでもいいんです。

結果を分ける分岐点。そこで貴方が絶対に…年を隔てても後悔しない選択をとるこ

とが大事なんです。未来なんて誰にもわからないんです。誰から何を言われようが自分の芯を貫き続ければそれは自ずとより良い道へと進んで行けます。

逃げる？結構です。それに後悔がなければ。けど誠くん。後で絶対に後悔するんじゃないですか？そのぐらい私でもわかります。貴方を私はずっと見てきたんですから。貴方は優しい人です。逃げてしまえば必ず貴方は後悔します。

貴方が私たちと別れたくないという気持ちもわかります。私たちも貴方と別れたくなんてありませんから」

そう言って最近膨らんで来たお腹を撫でる。

「けど、私たちは貴方の苦しむ顔が見たくありません。知ってましたか？貴方、いつもいつも辛そうな顔をしてます。自分では気づいてなかったかもしれませんが…

けどこの世界が貴方の思い描いた世界…というのはとても安心しました」

「何で…」

「それは勿論…私たちが貴方の心の中で一生一緒に居られるのですから。だから行ってください。誠くんに挫折は似合いませんよ！猪突猛進当たって砕けろ！それがお似合いです！」

褒められているのかよくわからないが落ち込んでいた気分は吹き飛んだ。クスッと微笑む。やっぱり愛子はいい女だ。俺には勿体ない程の…

愛子の唇と俺の唇を合わせる。決してこれが別れではない。彼女は俺の夢の中の存在だとしても、たしかに俺は彼女と触れ合い共に生きたのだ。

俺が存在する限り彼女は俺の心の中にあり続ける。

世界が歪む。夢が終わり掛けているのだ。愛子から唇をそっと離す。

「また会おう、愛子」

「いいえ、貴方とはもう会いません」

そうピシャリと言われ俺は固まる。

「…貴方には現実に別の私がいます。私はもう貴方に幸せにしてもらいました。次は彼女を幸せにしてあげてください。誠くんが私のことをずっと想ってくれるのは嬉しいのですが…浮気みたいになるのも嫌ですし…だから誠くん。私たちの分まで現実の私を愛してください。泣かせたら容赦しませんからね！

ずーっと…見守っていますので…どうか本当の幸せを手に入れてください」

愛子を抱きしめる。

「あぁ…その約束…決して破らないと誓うよ。けど一つ訂正…愛子といたこの夢も…俺は幸せだった…!!本当にありがとう…ッ!!」

抱きしめていた感触がなくなっていく。ついに俺は夢から俺は覚めるのだろう。

世界は純白に包まれ何も無い空間に変化する。

するといつの間にか目の前に一人の男性が佇んでいた。
「ついに我の力を取り込むことに成功したか…長かった…
改めて誠…我が真名を名乗ろう。ドラ・グァンズ改め、ドラ・バーン。解放者の一人、ラウス・バーンより名を受け継ぎし竜人族である」
何となく、ティオとの遭遇後、彼が竜人族なのではないかと思っていたためそこまで驚かなかったが、解放者の一人であるラウス・バーンから名を受け継いでいることには驚きを隠せない。マジかよドラさん!?お口アングリになった俺は悪くない。
「さぁ、目覚めよ。目を覚ませばもう我に会うことはないだろう。だが悲しむことはない。貴様が言ったように我たちは貴様の中で生き続けるのだ。
行け、進め若人よ!」
視界は真っ白な光に飲み込まれ何も見えなくなる。

そして戻ってきた。現実へ。

「行くか」

影分身に命令する。そして俺は神山から消え去った。

「俺が進む道は…既に決まっていたんだ…!!」

～～～

〜〜〜

爆発する。

生命が息絶える。

同胞が息絶える。

敵が己の吐いたブレスで消し飛ぶ。

あぁ、神よ…何故貴様は我々をこうも争いをさせたがるのだ…ッ!!

我の翼が消し飛んだ。敵の人間族にやられたのだ。空から蹂躙していた我は遂に地へと引き摺り落とされる。それを好機と見た兵士たちが我の体に纏わり付く。しかしそこで諦める我ではない。重い体を鞭打ち纏わり付く人間を振り落としていく。そして口から大規模なブレスを吐き出し当たり一帯を消し飛ばす。わざと出力を高めに撃ったおかげか黒煙がモウモウとたち、その煙に紛れて竜の姿から人型へと戻り、兵士の死体から装備を奪い身に付ける。

何故このようなことをするのか。それは逃げるためだ。何故我はこうも戦わねばな

らん。何故殺さねばならん。
我を動かしたのは何だったのだろうか。消え行く兵士の断末魔からか…それとも恐怖からか…どちらにせよ、我は戦うこと自体に嫌気がさしたのだ。

逃げた。

逃げた。

逃げた。

我は逃げ続けた。何処に潜んでも人間族は我を見つけ襲い掛かってくる。もう嫌だ…もう散々だ…我を…休ませてくれ…
だが今奴らに捕まってしまえば確実に尋問され、さらに生かされたまま実験と評して様々なことをされるだろう。
我はそれが嫌で逃げ続けたが遂に追い込まれる。我が選んだ逃げ先は人間族の言う神山だ。先延ばしにしかならないだろうが少しでも長く逃げたい、希望に縋りたい…そう思い近くにあった神山に隠れた。

だが考えが甘かった。山は包囲されすぐに隠れていた洞窟が見つかった。そこから逃げる、また逃げる。しかし逃げ場はない。目の前に人間が現れた瞬間、もう諦めようと考えた時、その人間は我に手招きをしたのだ。そして一つの巨大な洞窟がそこにはあった。

もう半端諦めていた我はもうどうにでもなれと指示に従い人間が指定した洞窟へと入り込む。なかなかの魔力密度だ。かなり心地良いい。

兵士たちの騒がしい声が外で聞こえるが、この洞窟にくる気配は一切ない。どうやらこの洞窟には隠蔽の魔法がかけられているようだ。

奥へと進んでいく。奥へ進むにつれて洞窟は次第に広くなっていき、我が竜化しても暴れられる程広い場所に出ると、その中央に先程の人間が突っ立っていた。魔法陣が男の真下に突如浮かび上がり姿を消す。一瞬彼は我を見た。ということはついて来いということなのだろう。不思議と彼を疑うことはなかった。今まで敵だった人間族を信じるというのも妙な話だが…

魔法陣の上に立つと我の頭に様々は記録…彼の記憶が流れ込んでくる。反逆者ではなく解放者という存在。神の目的。そして彼からの願い。

どうやらここに後何千、何万と長き年を経つ頃に勇者とその一行が異世界からエヒトにより召喚されるという。そしてその中の一人がこの我のいるこの洞窟に力を求めて

現れるという。
その人間を我が力を持つにふさわしいかどうか試してほしいという。なるほど…我がかの人間を見極めるということか。
そして最後に彼は名乗った。ラウス・バーン…と。そして我に名を継承させて欲しいと。
彼は我の恩人だ。断る理由もない。彼のいう人間…その人間が我の力と彼の力…その二つの膨大な力を受け継ぎ、世に平定を齎してくれるのなら我の命や魂程度、犠牲になれど何の後悔もないわ。
ここで我、ドラ・グァンズはラウス・バーンより名を継承し、ドラ・バーンとなった。

あれから如何程経っただろうか…千年…？今までの間、我は全ての時間、魔力を操ることに専念していた。そして大気の魔力の中にある微量の新たなエネルギー。それを見つけた我はずっと…我が体に溜めて溜めて溜め続けた。

ここに来た頃の我とは魔力の格が別次元となっているだろう。それ程までに我は鍛え続けた。希望ある未来を信じて。彼の言っていた人間を見極めるため…

そして遂にその時が来た。勇者一行の一人が神山へと登り始めたのだ。千里眼で彼を覗き込む。どうやら彼は力を求めてこの山で武者修行を行いにきたらしい。しかし彼の上達の速さには舌を剥く。我が何百年とかけて使えるようになった魔力循環をほんの数日で終わらせていた。それだけでは終わらない。我が見つけた自然の中にある微量のエネルギー。彼が言うには自然エネルギーらしいが、それをすぐに見つけ習得している。まだ扱うには至っていないが驚異的な速さであることには変わらない。

後ろにいつの間にか現れたラウス殿も満足そうに彼を見ている。一時的に隠蔽の魔法を解くのだろう。

ラウス殿が魔法を解いた一時間後、すぐにこの洞窟が彼に見つかる。速い。そして彼はようやっと我の前に姿を現した。

人間にしては高い身長。少し跳ねた黒髪。目付きはキリッと鋭く目の下には薄らと隈が出来ている。無茶をし過ぎてロクに休めていないのだろう。

彼は赤い装甲を身に纏い、彼の周辺には濃密な魔力が溢れ出ている。面白い。久しぶりに滾る戦いが出来そうだな…

彼は会話を試みるが、我はそれを相手にしない。我が意思疎通が出来るとなれば彼は我を殺すつもりで戦うことはしないだろう。それではダメだ。我は本気で戦う彼の姿を見たい。彼の生き様を、彼の理想を…!!

先手必勝とばかりに我の尻尾を彼に叩きつけるが、彼はそれを簡単に避けてみせ、手に風の螺旋状の魔法を創り出し投げ付けてくる。かなりの威力だ。今の彼なら昔、我が戦った人間供も一人で殲滅することぐらい訳ないだろう。

すこし気が飛んでいた瞬間、我の視界を埋め尽くすほどに彼は増えた。分身したのだろう。しかし魔力が無尽蔵での分身は悪質過ぎるッ!!

「グルァァァァァァッ!!!!」

口から暗黒のブレスを吐き出し分身を殲滅していく。全体の八割を削り切った辺りでまた周囲に白い煙が立ち上がり、視界を埋め尽くすほどに彼が増えていた。正直に言うと少し絶望しかけた。しかしそんな猶予を彼は与えてくれない。

数千の分身達から続々と螺旋丸を投げ付けられる。それを捌きながら我は紅蓮の炎

を口から吐き出し一帯を焼き尽くす。しかしどうやら彼には分かっていたようで壁に張り付き燃え盛る炎を回避、そしてまた我に螺旋丸を投げつける。これはまさにジャイアントキルの動きだ。我の攻撃が全て上手く対処されていく。

水を使い辺り一体を水浸しにし、氷結のブレスで凍らし動きを阻害しようとしても、彼は我と同じように口から炎を吐き出し足場を作る。空を跳ぶ彼らを撃ち落とさんと暴風を創り出すも、螺旋丸を巨大化させ相殺してくる。何とも戦い辛く小賢しい戦い方だ。

そして戦いは数週間続いた。

そろそろ精神的に辛くなったのだろう。彼は数十の分身達と巨大な螺旋丸を創り始める。あの技で決着を決めるつもりだろう。ならば我も出さねば無作法というもの…

口内にあらゆる属性の魔力を注ぎ込み圧縮する。まさにその魔法は全てを呑み込む我最大にして最強の奥義。といってもまだ一回も撃ったことはないが…

すぐに彼が動いた。大きな螺旋丸は…螺旋丸…？いや…あれは…太陽…なのか…？

「〝太陽滅災〟」

彼から繰り出されたのはまさに太陽。流石にこの魔法を無防備に喰らうのは悪手だ。口内に溜めていた魔力を一気に放出し結界を創り出す。

『〝竜纏〟』

白い我が鱗は輝き、更に全属性の魔力のコーティングがなされ元より強固だった鱗は難攻不落の要塞と化した。

そして我に降りかかる厄災を、腕をクロスさせることによって受け止める。凄まじい魔力量、そして威力。徐々に我が巨体が押され始める。このままでは…致し方なし…ここで…!!

腕に体をコーティングさせていた全ての魔力を回し、新たに口内に魔力を溜め始める。そして溜まったと同時に全ての魔力を腕に回す。運が悪ければ腕が吹き飛ぶ…これは戦いだ…意地の張り合いだ…!ここで我は…ッ!?

太陽の魔力が一瞬にして一点に凝縮される。それと同時に次に起きる事態をすぐに予測し、すぐさま太陽を全力で地面へと叩きつけその場から離脱する。

次と瞬間、膨大な魔力が爆発し、辺り一帯が吹き飛ぶ。我の肌は火に強く、殆どダメージを通さない筈だというのにかなり火傷のダメージを受ける。彼は…

そう思い半壊した洞窟を見回すと、地面が盛り上がり、その中から姿を表す。なんて無茶苦茶な奴だ…だか面白い。気に入った。

しかし彼も激しくやったものだ。我が常日頃から洞窟を強化していなければ神山は吹き飛び近くの王国に被害が出ていただろう。あの威力でもまだまだ試作段階のよう

なため、完成すれば我では防ぎきれぬやもしれん。まぁ自然エネルギーとやらを使えば止められるがな。

我が彼に話しかければかなり驚愕した表情で我を非難する。だが知ったことか。彼にはこれから我と一緒にこの洞窟を修理してもらうのだから。

彼は守山誠というらしい。強さは自分で確認し、十分な力を身につけている。なら精神はどうかと話すがとくに悪いところはない。己より他を重んじることが出来るまさに聖人のような存在だ。本人にそう言うと本気で嫌がっていた。何故だろうか…

しかし我も彼と同じように人間の姿になって語り合いたいが、自然エネルギーの取り過ぎか、竜化が解けなくなっており、まだ誠は我が竜人族ということは知らない。別に自分から教える必要もなし、聞かれれば答えよう。

遂に誠は自然エネルギーを使いこなせるようになった。と言ってもまだまだ未熟。これからもまだまだ修練が必要だろう。

一度王国へと戻ると言い出した。我は誠をここに縛り付ける理由もないため笑顔で送り出した。といっても隣では分身が自然エネルギーを取り込んでいるのだが。

自然エネルギーを扱えるようになった誠は既に仙人の域に足を踏み込んでいる。恐らく我の力を受け継げばこの分身のように毎回取り込まずとも我のようにその場その場で自然エネルギーを扱えるようになるだろう。それが極めるということだ。

しかし今の彼に我が膨大な力は耐えられるのだろうか…

遂にこの時が来たか…本来ならこのようなことで我が誠と融合する予定ではなかったのだが…まぁいい。誠の瞳には確固たる覚悟が宿っている。これならば我が力に飲み込まれぬやもしれん。

我は昔遊び心で作った隠し部屋に誠を入れ、我が力を誠に流し込んでゆく。最初は不完全だったものの、ついに魔力の波長が完全に同調し、我の意識にモヤがかかり始める。遂に…ようやくラウス殿との約束を果たす日が来た。誠にバーンの名を継承する。これからはバーン・誠だ。光栄に思うがいい。

え？いやだ…だと？（´・ω・｀）ソンナー

俺はロリコン?違うね!ロリコンはお前の方だなッ!!

魔法陣が守山先生の手が触れた地面に浮かび上がる。青く輝き、濃密な魔力が辺り一体を包み込む。そして役目は終わったとばかりに戦闘中だった先生の分身は守りを固めるように私たちの方へと駆け寄る。光輝も〝限界突破〟が覚醒し、凄まじい勢いで魔物たちを駆逐していたが、時間制限で今やダウンし私たちが光輝を囲み守る。

「ーーーーー〝口寄せの術〟!!」

先生が叫ぶと同時に魔法陣が輝き始め、思わず目を閉じてしまう。そして光が収まり目を開けるとそこには…

「待たせたな。安心しろ、今度こそ俺が守るッ!!」

「「「「「先生ッ!!?」」」」」

そこには先生がいた。いや、本当に先生なのかしら…いつもと雰囲気が違うし、隣に立っている先生の分身とも姿に差がある。もしかしたら新手の魔人族?まさか擬態する魔物!?いや、けど口寄せってことは先生が呼んだのよね…じゃあまさか本物の…

「さーて…諸々の事態は把握している。ちょっくら一掃するぜっと…!!」

先生の姿が一瞬ブレる。

キュゥアッ!?

次の瞬間、気配を消して迫っていたキメラのような魔物の顔面は陥没し、悲鳴と共に後方に吹き飛ばされていた。

そして元々魔物がいた場所、つまりは魔物が屯っているど真ん中にいつの間にか佇み、ブアッと凄まじい威圧を周囲に放つ。すると本来自我の薄い魔物たちが、その威圧に恐れ動くことさえ出来ていない。魔人族の女の命令も受け付けていない。

その中で唯一動くことが出来たのは砲台を背負った大きな亀型の魔物だ。照準を震える体で合わせ、そして撃ち出す。

しかし、砲弾は先生によりあっという間に無力化される。先生は片手でそれを受け止め、更にそれを投げ返したのだ。

その砲弾は撃ち出した亀に直撃し無惨に飛散する。

しかしその亀の一撃は無駄になったというわけではなかった。亀が撃ち出した砲弾の音で正気に戻った魔物たちが一斉に先生を屠らんと襲い掛かる。

だがそれは既に遅過ぎた。既に先生の攻撃準備は完了していた。先生が手に螺旋丸のようなものを創り出し、それを地面に押し付けると、風の螺旋が一気に高まり、先生を中心に周り一帯を巻き込んだ。風が止むとそこには細切れになった魔物と無傷の先生の姿があった。しかし魔物細切れとは言ったが血は殆ど残っていなかった。何故な

のかしら…

そして先生は口から業火を吐き、残っていた殆どの魔物が焼き尽くされる。

ほぼ全ての魔物を一瞬にして屠った先生が魔人族の女に歩み寄る。魔人族は震えながら叫んだ。

「アンタは…アンタは一体何者なのさ…ッ!?」

「俺か…?俺はただの教師だ。守山誠…そして友から名を受け継いだバーン・誠さ」

次の瞬間、魔人族の前で主人を守ろうと構えていた魔物の頭上から極太の光が突き抜けた。

「そう来たか…というか遅ぇんだよな。もうほぼほぼ終わっちまったぜ」

「んだよ。せっかくあんたが泣きそうになりながら俺に頼んで来たから来てやったってのに。骨折り損じゃねぇか…」

砂埃が舞い、声の主が見えない。しかし先生は誰だか知っているようだった。隣にいた香織の目が見開き、その声の発生源を凝視している。

砂埃が収まり、そこに現れたのは白髪の青年と金髪の女の子だった。

「ハジメくんッ!!」

私はギョッとして香織の顔を見る。あぁ、完全に恋する乙女の顔だ。へ?じゃあ彼が南雲くん?えっ?それにしては変わり過ぎじゃない?それになんと言うか…なんか厨

二っぽい…
「ガハッ!?」
「ハジメッ!?…大丈夫!?」
「あ…あぁ…何処からか攻撃を受けた…まさか今ここに俺にダメージを与えられる奴がいるとは…この魔石の眼をもってしても…ガクッ」
「…は、ハジメェェェェ!!」
これって私が悪いのかしら…

〜〜〜

格段と強くなっている…一体何をしたんだ…?

まぁ今はそんなことどうでもいい。まずは俺がここに来た経緯から話そう。長くなるので3行で。

○色々あってホルアドに到着

○ギルドにいると先生が突如現れ救援要請

○先生と共に大迷宮を駆け抜けていると「すまんがもう解決するわ」と言われたが少し腹立ったので大穴を開けてショートカット

というわけだ。

「南雲くんッ!!」

彼女…白崎はそう言った。何故今の俺の姿を見てそう言えるのか…髪色が違う、雰囲気が違う、口調が違う、目つきが違う。それなのに彼女は俺の正体を一瞬で見破った。周りの反応からして先生は何も話していないだろう。何故彼女は俺の名前を…っと、今はそんなことどうでもいいか。

ドパンッドパンッ!

ドンナーで魔人族の側にいた魔物を一掃し、魔人族の女に歩み寄る。

後ろではシアが振ったドリュッケンにより、ピンポールのように魔物の頭が吹き飛んでいる。エグい…クラスメイトたちはその光景を直視出来ず目を背けている。

「あ、あぁ…アンタたちは一体…」
「あぁ？俺たちか…？そうだな…何がいいんだ…先生、何かあるか？」
「俺？うーん…そうだな…位置的には反逆者って感じでいいんじゃねぇか？」
「神に逆らって日本に帰るってやつ？いいと思う」
先生と相談し、これからは反逆者と名乗ることなった。何かカッコいいしな。別にオスカーたちの意思を継ぐって気はない。エヒトが俺の敵になるというのなら容赦なく潰すが。
「〝落牢〟!!」
先程から逃げるために用意していたであろう魔法を魔人族は放つ。後ろでは白崎たちが危ないと叫んでいるが俺を甘くみないでもらいたい。
魔人族が放った球体の魔法は俺の目の前で弾け砂煙が舞うが、〝飛爪〟で難なく振り払う。
そして背中を見せ逃げる魔人族の足をドンナーで撃ち抜く。
「あがぁあ!!…はは…既に詰みだったわけだ」
「その通り」
バタッと顔面から倒れた魔人族が俺たちを、まるで化け物を見るかのように睨みつける。

「さて、普通はこういう時、何か言い遺すことは?と聞くんだろうが…生憎、お前の遺言なんぞ聞く気はない。

それより、魔人族がこんな場所で何をしていたのか…それとあの魔物を何処で手に入れたのか…吐いてもらおうか?」

「あたしが話すと思うかい?人間族の有利になるかもしれないのに?馬鹿にされたもんだね」

嘲笑するように鼻を鳴らす魔人族。まぁコイツに何も聞かなくても大体コイツらの目論見は分かる。恐らく本当の…奈落にある大迷宮を攻略しに来たんだろう。そして魔物は神代魔法の産物…おっと図星のようだな。

これで大体分かった。

「南雲、銃を貸してくれ」

声を掛けて来たのは先生だった。今から俺がする行動を予測し、生徒に目の前でそんなことをさせたくないと言う。俺はコイツの死に別段何も感じないのでドンナーを渡し後ろに下がる。あ、そう言えばあれ魔力操作がなかったら起動出来なかったはずだ…が…

問題なく動いているな…先生は魔力操作を会得しているのか?まさか…俺と同じよ

うに魔物でも喰らったのか!?いや、神水が無ければあの激痛に耐えられるものか…ならどんな手を…

そう考えていると先生はドンナーを魔人族の眉間に当てる。

「お前には二つの道がある。捕虜…敗北者へと成り下がり生き延びるか…ここで誇り高き魔人族の戦士として死ぬか…

さぁどっちに…って聞くまでもねぇよな…」

「せ、先生!!待ってください！彼女はもう戦えないんですよ!?殺す必要なんてありま…!?」

ドパンッ!!

迷宮に銃声が鳴り響いた。

〜〜〜

南雲から借りた銃で魔人族の眉間を穿つ。魔人族の頭部は吹き飛び見るも無惨な光景へと変わる。引き金を引く瞬間、生徒たちとの間には土遁の術で壁を創り視界を遮る。こんなもの…生徒たちに見せていいものじゃない…

頭部が弾け飛び、死体となった魔人族の姿を見る。正直に言うと見たくなかった。すぐに顔を背けたかった。だが駄目だ。目を逸らすな、自覚しろ…

俺が魔人族を殺したのだ。

すぐさま壁を防音にし、思いっきり吐く。吐き気は治らない。胃の中のものは全て吐き出され、今朝食べた蟹さんがこんにちはと挨拶をしてくる。

まだ治らない。遂には胃液をも吐き出し、ようやっと吐き気が治る。ここまで違うものなのか…魔物を殺した…ウルで何万という魔物を殺した。もう魔物に関しては殆ど殺すことに関しては抵抗は薄まって来ており、いずれ来たるこのような出来事が起こっても耐えられると思っていた…

だが全然違った。彼女は自我があった。魔物よりも大きく、それは人間とまったく変わらない…魔物数万よりも人間一人、この手で殺すことの方が辛いなど知らない…現実から目を背けたい…

だが事実なのだ…

落ち着いてからすぐにゲロを埋め、魔人族の死体を迷宮の床に穴を開けそこに埋葬する。これは仕方がないことなのだ。それに彼女の為でもある。

俺の分身は帝国にも潜伏している。その分身の情報からは、奴隷として亜人族は性処理の道具としても使われているらしい。ならば魔人族の彼女はどうだろう。大変見麗しい姿をしていた。それに人間の姿とそう大差無く、嫌悪する存在だとしても欲情する人間は確実に出るだろう。そうなれば尋問と称し、死ぬよりも、死んだ方がマシとも思うようなことをされるだろう。人間の欲望というものはそんなものだ。

そう自分に言い聞かせて壁を崩すと天之河が俺に詰め寄ってくる。何故殺したのか、彼女はもう戦う意思はなかったのだから殺す必要はなかった、先生はそこまで外道に落ちたのか…

俺は反論出来ない。俺じゃなく違う誰かがここにいればこのような結末にはならなかっただろう。…いや、その考えは駄目だ…言われたじゃないか。それは逃げだって…後悔しない選択をしろって…

俺は後悔はしていない。死は彼女が望んだことなのだから。これから戦争が起きるというのなら数多くこのような場面に出会すだろう。だが逃げては駄目だ。今回、彼女を捕虜として城に持ち帰ったとしても先ほど語ったようにロクな目には合わないだろう。逃せば生徒たちへの危害を加える存在としてまた襲撃してくるやもしれない。な

ら、ここで殺すしか方法はない。
尚も俺のことを責め続ける天之河を、何かを感じ取った雫と龍太郎…違った。八重樫と坂上が天之河を止める。鼻がピクピクしていたから胃酸の酸っぱい匂いを嗅いでしまったのだろう。
南雲に銃を返すと、無理すんなと気を遣われてしまった。面目ない…

ひとまずその後、地上へと戻りメルド団長に今回あった出来事を話す。また頭を下げられてしまった…
ティオとも再会し、少し話していると南雲目掛けて青髪の少女がパパァ!と言い突進していった。
あの子は?と聞くと奴隷商人に連れ去られた海人族の女の子で保護しているのだとか…
まぁ知ってたが。忘れたか?俺はウルで南雲と再会した時に分身を一人尾行させてたんだぜぇ?南雲の行動なんて本体の俺にゃあ筒抜けよぉ!!しかしパパ呼びとはけし

からんッ!!羨ましい…ンンッ!!ゲフンゲフンッ!!

どうやら白崎が般若のスタンドを背中に出してると思いきや、南雲たちのパーティーについていくらしい。昔から好きだったと告白し、天之河が驚愕している。いや、気付こうよまったく…そんなところで鈍感発揮してたらこれからヤバイの引っ掛けちゃうぞー!

俺?俺は別にどちらでも構わない。俺は基本、生徒本人が自分の意思で決めたことにはなるべく口を出さない。口を出すのはアドバイスか余りにも無茶なことだけだな。

渋々と白崎を受け入れる南雲。ツンデレだね、わかるとも。

最後に南雲が自分で作ったという黒刀を八重樫にあげた。そういうとこやぞ南雲。親友の白崎とユエに睨まれ若干涙目になっている。可哀想に…

▽▽▽

本格的に魔人族が動き始めている。それに警戒し、清水には神山で待機を命じた。何か嫌な予感がする…

ひとまず俺は分身をライセン大峡谷に向かわす。目当ては勿論神代魔法だ。既にグリューエン大火山には攻略分身が向かっている。絶賛攻略中だ。

ライセン大峡谷、そこは全ての魔法を制限する対魔法の大迷宮。充分な威力の魔法にかかる魔力はなんと数倍以上にも及び、ベテランの戦士でも攻略できた者はいない。南雲は攻略したらしいが。

分身から連絡が入った。最初は普通に攻略していたらしいが、ウザすぎるトラップに堪え兼ねて分身による人海戦術に切り替えたようだ。そして現在涙目のミレディ・ライセンの目の前にいるとか。

口寄せの術で大峡谷へと転移する。同じ解放者として挨拶に行く所存だ。もっとも、

俺は名前だけだが。
本体の俺を見るなりゴーレムの姿をしたミレディは驚愕したような声で騒ぎ出した。それが数分経つと次は真剣な声色で勝負するようにお願いされる。
戦って…いいとも!!というか戦って神代魔法手に入れるために来たわけだし当然だよなぁ?
となると分身は余り使わずに戦うとしよう。使うのはドラから受け継いだ力をメインに…
このドラの力だが、扱えるのは俺のみである。俺の分身は、俺だけを分身として生み出す。つまり、別の存在であるドラの力は分身には影響しないのだ。これで分身が俺の完全なる下位互換となったが、その厄介さや便利さは一切変わっていない。
さあ…やろうかミレディ…神代魔法寄越せッ!!

～～～

「ププーッ!!ビビってるビビってるぅ!!」

ミレディはいつものように爆笑していた。今回の挑戦者は魔力を使った罠は全て避けているが、魔力を使わない古典的な罠にはよく引っかかるのだ。そして今は最後の扉だ、というところで入り口に戻し、ポカンと口を開けている挑戦者の姿を見て笑っている。

「あはははははッ!!あは…んん…?え、嘘でしょ…!?」

怒り心頭といった様子の挑戦者は魔法を使い、さらに数万の分身を生み出し迷宮を蹂

躙する。
「や、やめてぇ!!私が悪かったから迷宮を破壊しながら進むのはやめてぇ!!というかなんでアイツはこの大峡谷でそんなに魔法を使えるのよーッ!!」
すぐ様ミレディは迷宮内部を弄り挑戦者を最深部に迎え入れる。人をおちょくるのは好きだが、自分がやられるのは勘弁、というのがミレディであった。
挑戦者はミレディの仮初の姿、巨大ゴーレムを見るや否や、ミレディの話もロクに聞かず詠唱を始める。なんて非常識な奴だ!とブーメランな怒りを抱きながらも警戒していたミレディだったが、その魔法の詠唱を聞くごとに、それが攻撃魔法ではなく召喚に関する魔法とわかり、ハテナを頭に浮かべる。
そうこうしている内に詠唱は終わり、彼の下に大きな魔法陣が展開され、膨大な魔力の嵐がこの空間に吹き荒れる。
「ドーモ。ミレディ・ライセン＝サン。守山誠です」
綺麗なお辞儀をして現れたのは先程までこの迷宮を攻略していた人物…いや、違う。彼らは彼の分身だったのだろう。この前に来た南雲ハジメと謙遜ない程の力を持つ人間が現れたのにミレディは驚きを隠せない。さらにだ。魂魄魔法を習得しているミレディは気づいた。彼の魂は三つにより構成されている。一つは彼の、そしてもう一つが竜人族のもの、そして最後はミレディもよく知っている人物、ラウス・バーンの魂だ。

ミレディは理解した。彼はラウス・バーンの後継者なのだと。彼もこの世界を動かす人間なのだと確信する。

「ふ、ふぅーー…私はご存知ミレディ・ライセンだよぉ～。…君のことは大体察しがつくよ。あのクソ神を滅殺するために神代魔法を手に入れにきたんだよねぇ～？」

「いや、違うが…」

「え!?そうなの!?アイツに続いて貴方もなのー!?」

「あぁ。俺は生徒を守るために力を求めているからな」

「そ、そっか～…そうだよねぇ～…」

ガックシとした態度を1ミリも隠さないミレディに誠はイラッとしながらも話を続ける。異世界召喚、ドラの存在、そしてバーンの名を受け継いだということを全てミレディに説明した。

「うんうん…なるほどねぇ…まぁーたあのクソ神はそんなことやってくれてたんだねぇ…面白くないねぇ…ところで君は元の世界に戻りたいんだよね？なら神との対立は免れないけど…それは大丈夫なのかい？」

「当然だ。俺が犠牲になってでも大切な存在は守り抜く。いざとなればエヒトも殺す。出来るだけしたくねぇけどな」

「フーン…じゃあ私が君の力を見極めてあげる！本当に全てを守り抜ける力が欲しくば

戦え!!我が名は解放者が一人、ミレディ・ライセン!!私に見事打ち勝てば、神代魔法が一つ、重力魔法を君に授けよう!!って感じかな」

「そうか…なら承る。行くぞ…〝竜化〟」

誠は灰竜となり凶悪な装備をしている巨大ゴーレムと対面する。

「「いざ…勝負…!!」」

竜と巨人が衝突した。

人が鯨を見てデカイと言うように！海は深いと言うように！俺はロリコンではない!!

俺の口から吐き出された灼熱の炎をミレディは空間を歪め逸らす。そしてミレディは魔力の弾幕を放ち俺から距離を取る。非常に戦いにくい。

図体はデカいくせに俊敏に動くゴーレムの姿は圧巻だ。いや、動くと言うよりは落ちているの方が正しいだろう。重力魔法を巧みに扱い俺を翻弄する。一撃だ。一撃さえ喰らわせれば決着がつく。しかしそれは叶わない。

それは進撃する兵団顔負けの立体起動を可能としたゴーレムが遠距離から狙撃、安堵俺の攻撃が当たる直前で重力を変え別方向に落とすからだ。完全には落とすことは出来ず幾度となく喰らってはいるが、全て再生している。やはり体の中に核があるのだろう。と言っても場所は既に把握している。

問題はそこに当てられるかどうかだ。この竜の体は力は大幅に上がるが小回りは効かず、精密な動きをすることが難しい。南雲の銃があればもう少し楽に倒せたかもしれない。

「そ～れそれ～!!当たらないよぉ～!!」

気の抜けた声を出しながら弾幕を放ち続けるミレディ。それを強靭な鱗で弾きながら考える。現在、俺はドラと超融合した影響で魔力操作を行えるようになった。本来、魔物しか持っていないものだが何故かドラはそれを持っていた。共有された限りの情報では始めから、産まれた時から既に持っていたようだ。先祖返りとかそんなものか？それとも竜人族は皆元々持っているのか…まぁそれで、だ。これは魔力を直接操作する。つまりは魔法陣とかそう言う過程を吹っ飛ばすことが出来るものだ。

しかし元々俺は魔力操作なしで周囲の魔力を操ることが出来ていた。それどころか常時発動し魔力供給している。魔力操作を会得し授かったもの…それは精密性だＮＡＲＵＴＯの傀儡糸のようなものを魔力で強靭に創り上げ、ミレディに悟られないように周囲一帯に張っていく。勿論、通常の魔力なら即バレるので自然エネルギーを混ぜることによってあやふやな存在へとすり替えることで糸の存在を気付かせない。竜の姿では細く、そして強靭な糸は作れない。人の体なら問題ないが、竜の姿だとどうしても強靭にするには太くするしか方法がない。太さで言えば電柱よりもちょっとだけ太いぐらいだ。だが問題ない。これに気付けるのはドラだけ…つまり俺だけだ。

「な、何これェエ!?」

「ＨＩＴ!!」

グイッと糸を引っ張ると、ミレディのゴーレムの体に極太の魔力糸が絡まり、俺に向

けて引き寄せられる。
そして向かってくるミレディに拳を振り上げ…殴り…抜けるッ!!
「甘いッ!!」
ミレディはガクンと上に落ちることで軌道を修正し、俺の一撃は空振りに終わる。そしてカウンターとばかりに俺の顔面にゴーレムの拳が振り下ろされた。

「やった…?……な、何ィィィィィ!?私の…私の渾身の一撃を…!!」
ミレディが驚愕し叫ぶ。
「口で受け止めただってェェェェ!?」
俺はミレディの腕を咥えてミレディの逃げ道を潰す。土遁で俺たちを囲み、〝竜纏〟を唱える。すると魔力が俺の体全体を纏わり付き、燻んだ灰色だった鱗は純白となり輝く。この魔法、ドラから受け継いだものだが、防御面に関しては他の魔法の追随を許さない。〝聖絶〟などが主に有名かつ強力な結界だが、それを遥かに凌ぐ強力な結界が〝

竜纏〟である。膨大な魔力で結界を張り、それを見に纏うという簡単そうに聞こえるが、実際に使ってみると制御するのはかなり難しい。まだ俺も完璧には扱いきれていないが、使いこなせれば俺の全力の一撃も耐えられるかもしれない。欠点としては周囲に展開出来ず、自分しか守ることが出来ないといったところだろうか。

しかし何故今この魔法を出したか…そう疑問に思っただろう。理由は簡単、こういうことさ!!

口から業火を吐き出す。それはまさに太陽、使い古すようだが太陽とほぼ同レベルの温度を持つ業火だ。それを密室となった空間で、尚且つ超至近距離で受けたミレディはひとたまりもない。数十秒後、ミレディだったものはその場から消え去り、残ったものは俺と土壁だけだった。今回〝竜纏〟を使ったのは俺へのダメージを無くすためだ。俺の体から出てる以上、大丈夫だとは思うがコーティングしておいたのだ。火傷とか下手すりゃ痕が残っちゃうしね。

ということで土壁を崩し、人型に戻って小さな生命反応を感じる場所に向かう。そう、ミレディの反応は二つあったのだ。と言っても巨大ゴーレムはお粗末と言っていいほどの反応だったが…

そして現れたのはニコちゃんマークの顔をした小型ゴーレムの姿をしたミレディ・ライセン。生命エネルギーは微々たるものだが、彼女から溢れ出る魔力は相当なものだ。

「さっすがラーくんの後継者だね！実力も十分!!せっかく演出も用意してたのに最初から全部見破ってるなんて酷いなぁ!!」

プンプンと頬を膨らませ可愛らしく怒るミレディ。さぞ昔は魅力的な女性だったに違いない。

「しっかしラーくんが後継者なんてねぇ…ま、考えても仕方ないか、うん！ようし、神代魔法を喰らえぃ!!」

すると俺の足元に魔法陣が浮かび上がり、脳内に神代魔法の知識と使用方法が直接刻まれていく。ああ…なんか癖になりそうな快感…

というわけで南雲から聞いていた通り重力魔法を習得したＺＯＹ!!というか俺に適正ありまくって怖いんだが…

「うわぁ…流石のミレディちゃんもドン引きレベルの適正だよ…普通に少し練習したら私以上に使いこなせるかも…ミレディちゃん大ショックッ!!授けた本人が負けるなんて…!!」

打ちひしがれるミレディ。ボス戦の後は報酬ということで貴重な鉱石を幾つか貰う。貰っても俺には必要ないので返却し、代わりに武器となるアーティファクトを貰う。それは大きな大剣。背中に背負うタイプのやつだ。カッケー、やっぱ漢は大剣だよなぁ？異論は認める。

よし、じゃあこれで試したいこともあるしここでお暇させてもらおう。
「もう行っちゃうの?……え?分身を置いていくって!?フフフ…これで退屈しなくて済むよ。ありがとう」
上目遣い（雰囲気）で可愛らしく泣きそうな声でそう言われたので分身を置いていくことにする。まぁ一人でここにずっと居たら狂っちまうかもしれねぇしな。
では、チャオ!!

俺は神山へと戻った。

▽▽▽

ウルから帰還した先輩が消えた…書き置きと共に姿を消した。何者かによる誘拐と俺は当たりをつける。場所はわかる。神山の頂上付近にある聖教教会の一部である建物に幽閉されているのだ。今すぐにでも助けに行きたいのだが、残っていた書き置きのせいでそうも行かなくなった。

書き置きには俺が何かしら怪しい行動をすれば、即先輩を神の名の下に断罪すると書かれていたのだ。俺は激怒した。だが今はその時ではない。すぐに先輩を護衛していた分身を調べると、どうやら厳重に封印されているようだった。やられた…俺の分身は消えなければ本体に情報は共有されない。まさか俺の分身とは言え不意打ちで封印できる輩が存在するとはな…

不意打ちなど、誘拐した下手人の情報は、その現場を目撃していたリリアーナ王女から聞かされたため、信頼に値するだろう。幼女は正義！俺はロリコンじゃないけど。

落ち着け…落ち着け…熱くなったら全てがご破算になる…ビークール…ビークール…よし。

リリアーナから聞いた話では、王の様子がおかしいらしく、その他の兵士達も様子がおかしくなっているようだ。今すぐ行動に移したいが恐らく俺は監視されているだろ

う。仕方ない…ここは信頼する生徒にでも頼もうか!!

しかし南雲を異端認定か…王国やらどっかの国が南雲に滅ぼされなきゃいいが…

～～～

その恩が返せるのなら、俺はどんなことでもやってやる…！さらに報酬として俺の気になっている女性を紹介してくれるなんてモチベ上げ上げなんだが。

一生ついて行きます先生！

取り敢えず俺、清水は城に帰還しメルド団長を探す。そこらにいる兵士やらに場所を聞いても知らないの一点張りで教えてくれなかった。その為、ネズミやら虫やらを洗脳し、メルド団長を捜索する。今は既にこの世界では深夜。起きてるのはよっぽどの仕事熱心の人間か日本からの転移者だけだろう。

しばらくすると、洗脳していたネズミがメルド団長を見つけた。新たに手に入れた派生技能〝視覚共有〟を使い確認すれば、そこには副団長のホセと共に話し合っている二人の姿が。

黒いローブをはためかせその一室へと向かう。向かう最中に話し合いが終わったのか、メルド団長達は部屋を出て別れる。

そして角、俺が走り抜け、見たものとは…

「だ…大介…お前…まさか…!?」

メルド団長に短剣を突き刺す檜山の姿だった。

「何してんだ檜山ッ!!」

「な…!?清みグワプッ!?」

俺が現れたことに驚愕している檜山は俺の一撃を交わすことが出来ず、顔面に俺の拳をモロに喰らう。そして檜山は変な声を出しながら地面に倒れ込む。すぐさま檜山を魔法で拘束し、メルド団長の容態を確認する。よかった…急所には当たっていなかったようだ…

回復のポーションをメルド団長に飲ませ、檜山に洗脳をかける。先生とはもう人間に洗脳をかけないと約束したが今は緊急事態だ。そんなこと言っている暇はない。先生もそこらへんはキチンと理解してくれる筈だ。

本来、人間のように意志のある生物には洗脳は効きづらいという欠点があるのだが、運良く地面に倒れ込んだ檜山は後頭部を強打しており、意識朦朧の状態だ。その状態なら洗脳もたいして時間は掛からない。檜山は何故メルド団長を殺そうとしていたのか…

洗脳が成功し、その真実を聞き出そうとした次の瞬間…

ドパァンッ!!

檜山の体が爆散した。

「う、うわぁあああああああああああ!!?」

「お、落ち着け幸利!!く…、情報を渡さぬように自爆…いや、洗脳なら自爆は出来ないはず…まさか外部のだれかが…!!いかんッ!!すぐここから離れるぞ!!敵の親玉が現れるかも知れんッ!!」

肉片と大量の血が宙を舞うといくショッキングな光景を見て発狂する俺をメルド団長は焦り、腰を抜かした俺を背負いその場から退散した。

〜〜〜

「いいよ。流石にあいつらを殺したら先生が暴走しそうだしね。あと絶対愛ちゃん先生は殺さないでね。あれは守山先生への切り札だから」
「分かっています。人質は生きていなければ意味はない。それに殺してしまえば奴はすぐに感知して暴走するでしょう。そうなればこの世界に甚大な被害が出ます。しかし全く…どうしてイレギュラーがこう多いのか…我が主の駒に相応しくない屑どもが…」
「ははは…流石に僕の傀儡兵でも先生の相手は苦しいからね…」
「……我が主も貴女の計画の完遂を願っておいでです。精々もしくじらないようにお願いします」
　そう言うと銀髪のシスター服を来た女は姿を消す。そして残されたもう一人の女はギリっと歯で音を立てた後、ニンマリとドス黒い笑みを浮かべた。
「待っててね光輝くん…!!」

だから俺はロリコンじゃないって……ん？また俺何か言っちゃいました？

ここはアンカジ公国。砂漠のど真ん中に建っており、巨大なオアシスを水源とし多くの人間族が生活していた。

今は…

「おい！早くこっちに来てくれ!!このままじゃ息子が死んじまう!!」

「お母ざん!!お母ざん!!」

「だずげて…だずげ…」

まさにそこは地獄絵図。正体不明の病に国中が侵され、国民の殆どが既に病に伏している状態だ。そんな国に一人の男が訪れた。

「そうか…静因石とやらがあれば治るのだな…俺が行こう」

金色の髪を逆立て、大剣を背負い青い瞳を輝かせ、彼はグリューエン大火山へと歩を進めた。

胸元には銀色の冒険者の認識票がぶら下がっていた。

〜〜〜

金に次ぐランクであり、相当な実力者なのだろう。しかしその程度の実力で大迷宮を攻略出来る程甘くはない。静因石を採りに行くということは、宝物庫を持つ俺でなければ荷物が増え動きが少なからず阻害されてしまう。しかも国全体に配る程となると大量の数の静因石が必要となり、何度も往復しなければならないだろう。

そして一つの結論に辿り着く。既に何処かで死んでいるだろうと。

まぁ俺には関係ないがな。もしそうなら途中まで集めた静因石を回収したい。採取がてら探してみるとしよう。

進むにつれて冒険者の死は濃厚となってきた。ここに出てくる魔物はほぼ全てマグマをその体に内包しており、切れば弾け自身に降りかかるのだ。今の俺たちでは何ら特に問題ではないが、さすがに銀の冒険者にはこの魔物たちの相手は無理だろう。話によれば大きな大剣を背負っていたと言うしな。魔法ならまだしも剣ならばあのマグマをモロに喰らうだろう。

もしかすれば静因石もマグマに呑まれて流されていっただろうな。

現在俺達はマグマの上を赤銅色の岩石で出来た小舟のようなものに乗ってどんぶらこと流されている。といっても先程激流に呑まれて現在地がわからない状態だがな…っと、そうこう言っている間に住処らしきものを発見した。

まぁこれで終わる程甘くはないということは勿論知っている。さぁ、ラスボスの登場といこうか!

俺はドンナーを構えてマグマから現れた魔物を睨み付けた。

〜〜〜

白髪に眼帯を当て、金髪の少女と白髪の兎人族、そして黒髪の人間族。女を侍らせ行動していると聞いていたが、現れた人間族は金髪の男かつ、たった一人だったのだ。そして…

（我々が苦労して倒した魔物をあっさりと…!?）

マグマの蛇のような姿をした魔物。マグマの体の何処かにある核を砕かねば倒せない魔物をものの数分で倒してしまったのだ。しかもただの剣で。報告にない新たなる脅威に晒されるが、そこは使徒。イレギュラーには崩されない。

（まだだ…まだその時ではない…人間族に空間魔法が渡るのは看過したくはないが…ここで出てしまえば神々の最終兵器が仕留められなくなってしまう…!）

そう、もしあの人間族を倒せたとしても本命の神々の最終兵器を名乗る人間族が来るのだ。もし不意を付けず、倒しきれず合流されれば人間族である彼らは手を組みフリードたちに襲い掛かるだろう。フリードはその計画が破綻してしまう方法は取らず彼を見逃す。生憎、神々の最終兵器がここに現れるのにはかなり時間がかかるだろう。きっとその間にあの人間族はこの迷宮から去っているだろう。

そう考えていたフリードはまたもや裏切られてしまう。

「オラァッ!!」

「…んッ!!」
「ですゥ!!」
「のじゃあッ!!」
先に来ていた金髪の男が迷宮主の住処に入ったと同時に、流れるマグマに船を浮かべ報告にあった人間族が現れたのだ。正規ルートとは余りにも掛け離れた方法で攻略している人間族を見て驚く。確実にこの男は我々魔人族にとっての脅威になるとフリードは考えた。
神々の最終兵器は圧倒的な強さで魔物を蹴散らしていき、侍らせていた女共もかなりの実力者で、金髪の少女など神々の最終兵器に並ぶほどの脅威である。
そして最後のマグマ蛇を男が止めを刺す瞬間…
「放てッ!!」
騎乗していた灰竜が、口から光の極光を放ち、魔物ごと最終兵器を呑み込む。咄嗟にガードした彼の反射神経には驚かされるが、重傷を負わせられたことには変わりない。

煙が晴れた。そしてそこには…無傷の男がフリードを睨み付けていた。

～～～

ファンファーレだ。いや、まて。何故彼がここにいる!?架空の存在のはずだろ!?

しかも首に掛けている銀色の認識票。それは冒険者ギルドで受け取れるもので、付けるもの付けないも本人の自由、そしてステータスプレートと連動しており、認識票を持つその本人のランクに合わせて色を変える特別なものだ。今まで付けている奴で見たのはただただ高いランクで威張り散らしている奴しか見なかったが彼はどうなのだろうか。

閑話休題。話が逸れた。彼が剣から衝撃波を放ち俺の目の前で炸裂し俺を吹き飛ばし、天から迫っていた極光から俺を助けてくれたのだ。

光が降り注いだ天井付近を睨み付けるとそこには無数の灰竜とそれに騎乗する一人の魔人族。奴は神の使徒とほざきながら灰竜に命令し、今度は雨のように極光が俺たちに襲い掛かる。一発一発がオルクスでのヒュドラの光線を超える威力。ユエが咄嗟に間に入り聖絶を発動する。

ドドドドドドドドッ!!

範囲を狭めることで聖絶の出力を上げ、全ての極光を食い止めた。俺はチラリと後ろにいた男に目を向けるが、既にそこから姿を消していた。まさか今のでやられたかッ!?

「…あれは…重力魔法…!?」

ユエの呟きを聞き魔人族がいる上空に目を向ける。するとそこには宙を飛び灰竜の

首を斬り落とす男の姿があった。

速いッ!!そして…強い…!!

男は新たに襲い掛かる灰竜を一瞬で斬り刻み、次の灰竜へと向かっていく。それはまさに仕事人のような無駄のない動きだ。そして何より目を引くのは彼が握る大剣だ。それは剣と言う割にはあまりにも大きすぎた。大きく、分厚く、重く、そして大雑把すぎた。まさに鉄塊のような大剣だった。しかしそれ以上に異様なのはあの大剣に内包されている魔力量だ。恐らくだがあの剣は所有者の魔力を代償とし強化される国宝級、いや、解放者が持っていてもいいレベルのアーティファクト級の代物だろう。あれ程の魔力を内包出来るのだから、何処かの大迷宮の住処で手に入れたのだろう。重力魔法を使っているあたり、あのミレディが気まぐれに渡したのかもしれないが…

しかしそうなると気になってくる点がある。あれ程の魔力を一人で放出することが出来るのだろうか…俺でもあれ程の魔力はキツい。

フリードと名乗った魔人族はここの神代魔法であろう瞬間移動を使い応戦するも、出現する場所、時間。精密な機械の様に正確に先読みしフリードを狙い撃つ。するとフリードは狂ったように叫びながら撤退していく。最後に極光を男にではなく、あらぬ方向へと放つが、それを男は切り裂き無効化する。いや、光線を切り裂くってお前人間じゃねぇ!!

「ぐ…グソォオオオ!!邪魔をするな異教徒!!最後に要石だけでもッ!!この火山と共に永遠に眠れィッ!!」

再度、フリードは撤退しながらも残った少数の灰竜に極光を放たせ、火山の要石とやらを狙うが、それを全て男が斬り払う。

どうやら要石はこのグリューエン大火山の噴火をせし止めている岩のようだ。それを破壊すれば暴発し辺り一帯が吹き飛ぶだろう。危なかったがアイツはそれを知っていたようだな…何故奴は知っている…彼は何を知っている…何者なんだ…

やがてフリードは諦めたように悪態を吐き虚空へと消える。撤退したようだ。

「助けてくれたことには感謝するがお前は何者だ?その姿…まさか転生者か?」

ドンナーを突き付け男を問い質す。不確定要素が高すぎる彼にはこれぐらい警戒しておかねば何かあった時手遅れになる。

「……俺はクラウド、クラウド・ストライフ。転生者とやらは知らんが見ての通りただの冒険者だ」

クラウドと名乗った男はドンナーを突き付けられているのにも関わらず、指をクイッと動かす。すると住処から巨大な黒い球体が現れた。

「俺は今から依頼完了の報告に行かなければいけない。ここで俺はお暇させてもらう」

「動くなッ…お前は俺が持っているこのアーティファクトを知らないのか?」

「知らん。もういいか?」
「……チッ、もういい…あと、俺たちと一緒にこないか?……いや、俺たちの護衛に雇われないか?報酬はお前が欲しいものなら出来る限り用意するが…」
「興味ないね。それに既に次の依頼がある」
「そうか…」
　クラウドは俺がドンナーを降ろせば、すぐに上昇し黒い球体と共に天井に空いた穴へと姿を消した。転生者なら転生者で裏でコソコソされるのも面倒だったので近くで監視したかったが…あれ程の力を持っているからな…しかしやっぱり無理だったか…
「…本当によかった?」
「まあな。出来ればもっと情報を引き出したかったが…時間の無駄だ。それにあの実力…今奴を敵に回すのは愚策だ。やるなら万全の状態でないとな…それでも苦戦は免れんだろうが…」
「ハジメさぁん!!」
　シアとティオが足場を使い俺たちに手を振りながら駆け寄ってきた。まあ取り敢えず試練はクリアした。神代魔法を手に入れてすぐにアンカジ公国に帰るとしよう。
　俺たちは質素な建物に向かって歩き始めた。

～～～

もらった武器も持ってるし当然だよね！因みに剣は前の世界では触れたこともなかったので分身修行法で我流で…というわけにはいかなかったので、ブルックの町にて冒険者向け服屋の店主にして元金ランク冒険者であるクリスタベルさんに剣技を教わった。時々体を撫で回してきたが、それに目を瞑れば騎士団顔負けの指導者となる。とてもわかりやすくほぼ素人だった俺もかなり腕は上達した。だが最近は南雲達によって漢女が増え、ジロジロの視感されるので行きたくない。

因みに全ての分身には正体を隠匿するように命じている。何処からか知られ、銀髪のシスターの耳にでも入ったらまずいからな。

しかしそれよりも…だ。奴は檜山を殺した。これは到底赦される行為ではない。先輩を幽閉するだけに飽き足らず俺の生徒にまで手を出すとは…

メルド団長曰く口封じのために殺されたらしい。最近檜山の様子がおかしかったのはあのシスターに関わっていたからなのだろう。もっと疑って陰で調べていれば彼を救えたかもしれない…ッ!!これから俺は本腰でシスター討伐の為に動く。一つのミスも許されない。下手すれば先輩と生徒達の命に関わる。それだけはダメだ。今の俺は新しく分身創り出しシスターを捜索することは出来ない。清水も今は目の前でクラスメイトが爆散したのだ。メンタル的な問題でまだ動けないだろう。メルド団長も命を狙われているから無理だ…こうなれば…トータス中の分身を王国に集結させるしかあ

るまい…!!

俺がロリコンと言われるのは間違っている

あれから数十日経った。そろそろ殆どの分身達が王国へと集う。そして先輩を救う方法、それは一応あるにはあるが、すぐに動くことが出来ない以上、余計な危険を伴う為実行していなかったが、そろそろ頃合いだろう。南雲達を尾行していた俺の分身が神代魔法の再生魔法を習得したというのもある。

既に変化した分身は王宮内に身を隠し生徒達を守っている。これで生徒達への心配は殆ど無くなった。そして次の問題は銀髪シスターだが、それは本体の俺が相手をする。俺直々に檜山の、俺の教え子に手を出した報いを与えなければ…随分好きにしてくれたなぁ…檜山は悪ガキだったがそれでも俺の大切な生徒だ…!!

生かしては置けない……!!奴は確実に…俺が『殺す』…!!

……落ち着け。素数を数えよう。一度冷静になった方が良さそうだ。俺が南雲に言った言葉を忘れてどうする?ダメだ…ウップ…

魔人族を殺した時の感覚を思い出し吐いてしまうがそれでも…俺は銀髪シスターを

殺したい。先輩を監禁し、そして檜山を手駒として扱い殺した…

俺が奴を殺したいと思うのは間違っているのだろうか…

頬を思いっきり叩く。そうだ、忘れてはいけない。後悔しないよう行動するのだ。奴を止められるのは現状俺ただ一人。南雲なら戦えるとは思うが危険なことはさせたくない。俺が止めるしかない。銀髪シスターの企みは未だ分からないが、奴を激情に駆られ殺せば確実に俺は後悔するだろう。…するだろうか…

いけない…やはりこの世界に来てから命に関しての認識が軽くなっている…取り敢えず奴の処遇は保留だ。捕縛して情報を引き出した後に処遇を考えよう。そうしよう。それがいい。

俺は重要な今後の選択をせず逃げた。

▽▽▽

作戦決行の日、待ってましたとばかりに王国へと魔人族率いる魔物の軍が侵攻を始めた。王国の周囲には強力な結界が張られているのだが、それは容易く破られ侵攻を許してしまう。しかしこれは想定外ではあるがまだどうにかなる。城下町にいる分身達に命令を出し撃墜に向かう。更にこれ以上のイレギュラーを起こさない為に南雲を呼び出す。彼には冒険者としての依頼という形で応援に来てもらった。報酬は俺に出来る範囲のことをなんでも…だ。

と言っても南雲を最前線に立たせるつもりはない。援護だけでいいとも既に伝えてある。今回の依頼は救助優先として伝えている為、最前線に立つのは俺の分身と王国兵達だ。後は冒険者か。

さて、俺もそろそろ動くとしよう…

俺は待機していた自室で装備を身に付ける。真紅の鎧を着込み、額にバンダナを巻き付ける。鎧は軽硬石という魔石で作られている。軽くて硬い、そして魔力の影響を受け

易い性質を持っており、俺がドラの力を解放し竜化すると、竜の姿に合うように鎧が変形するのだ。しかし防御力はマチマチといったところだが…装備を身につけ終わると、脚に魔力を込めて床を蹴り、神山へと超高速で飛び立つ。まさか襲撃に遭っているというのに無視してくるとは思っていなかったのか、妨害も何もなく、一際魔力が高く、上空にて待機している人物の前へと躍り出た。そこは雲の上、通常なら索敵系の技能の範囲外である高度に奴はいた。

　睨み付けるとそこにいたのは銀の鎧を纏った銀髪の女…リリアーナから聞いていた通りの、さながらワルキューレのような容姿をした女が浮かんでいた。

「イレギュラー…やはり来ましたか…まさか樹々を操りあの駒を救出するとは思ってもいませんでした…」

　ノイントの真下にはある建物を守るように大樹が覆いかぶさっている。そして異様なのはその大樹に大きな穴が、ヴァニラ・アイスのクリームが通った後のように綺麗にポッカリと空いている。更に建物の床には更に大きな空洞が空いている。まぁ一部は俺の仕業なのだが。

「ノイントと申します。神の使徒として、主の盤上より不要な駒を排除します」

　ノイントと名乗った神の使徒とやらの身に付けている銀の鎧がキラリと輝いた瞬間、両者は動き出した。

「〝影分身の術〟!!」
「消えなさい!!」
　次の瞬間、辺り一帯が白い煙幕に覆われた。俺の分身を、ノイントが銀羽を背後にある羽から撃ち抜く。すると一撃の威力はそれほど高くなかったが、分身は消え去ったのだ。理解出来なかったが、消滅系の魔法を使っているのだろうと当たりをつける。それ以外に考えられない。そう考えた俺は消え去る分身に発生する白煙に合わせ、水遁で深い霧を生み出す。この霧には俺の魔力が含まれており、感知系統の技能は使い物にならなくなる筈なのだが…
　ノイントは白銀の双剣を携え、霧を斬り裂き飛び出す。
「〝求道玉〟」
　重力魔法を使い、球体の黒い球を生み出す。するとそれは棒状に変形し俺の右手に収まる。これは所謂ブラックホールのようなものだ。触れたもの全てを消滅する滅の力。無論、魔法も全てだ。
　ノイントが繰り出した双剣を、まるで包丁で豆腐を切るかのように簡単に両断する。するとノイントは顔色を変え、距離を取り銀の羽を某弾幕ゲーのように美しく繰り出すが、求道玉を盾のように薄く広げ、迫っていた弾幕を全て相殺する。しかし何故か求道玉が少し欠けてしまった。本来のＮＡＲＵＴＯの求道玉は仙道以外の攻撃を全て無効

化するが、この重力魔法の派生技では消滅であろう奴の魔法は完全には打ち消せないらしい。
「なるほど…これなら効くようですね」
ノイントの手には先程両断したはずの双剣が握られている。先程と違うのは、全て消滅の魔法の魔力で形成されているところだろう。これで奴の武器を破壊出来なくなっただろうが…それでも関係ない。ここで俺が奴を裁く…!!
「ゼリャアッ!!」
「はぁっ!!」
白と黒の魔力が光速でぶつかり合う。それは幻想的で、王国でこの光を見た逃げ惑う民、争い合う人間族と魔人族、その全てがその光の軌跡に見惚れた。

求道玉を振り上げればノイントは双剣で受け流し、その隙に銀羽の弾幕撃ち出す。すぐ様俺は求道玉を広げ相殺すると、背後に現れたノイントに螺旋丸を放つ。
「な!?」
だが、俺の螺旋丸は分解された。消滅するのなら少しの時間で消滅出来ぬようかなりの魔力を込めたのだが、それは一部の魔力を分解され、柱とも言える部分の魔力が消え去り螺旋丸は飛散する。

ノイントは剣を振るった反動を利用し、回転すると同時に俺の腹へと重い蹴りを放つ。
「がはッ!?」
口から中の空気を吐き出し、神山へと叩きつけられる。口から血が出るがダメージはそこまで負っていない。さて…しかし俺は奴をかなり侮っていた。いつものように全力で無くとも対処できると。だが、今回は違う。生徒たちを危機に晒しておいて俺は何を悠長に戦っているのだろうか。すぐに奴を倒さねばいけないというのに俺は…
周囲の自然エネルギーを取り込み、仙人モードへ姿を変え、ノイントを睨み付ける。ノイントの周囲には銀羽で巨大な魔法陣が描かれており、すぐにでも大技が飛んでくるだろう。
「〝劫火浪〟」
発動された魔法は、天空を焦がす津波の如き大火。そして対抗する俺は右手に魔力を込める。
「〝太陽滅災ーー・」
それは太陽のように全てを焼き尽くす災厄。災害の如き二つの炎が衝突し大気を揺るがす。一見競り合っているように見えるが…この勝負、俺の勝ちだ。
「ー照射ー〟ッ!!!」

太陽の如きその炎の球の中に一筋の極光が現れ、ノイントの放った劫火を軽く貫く。
そして当たる……

その瞬間、神山に歌が響き渡った。
「ッ!?」
体から力が抜ける。そして魔力が飛散する。あともう少しで貫いた極光はノイントの魔法に押し返され、太陽と津波の劫火が俺に襲い掛かった。
「がァァァァあああああああああああああああああッッッ!!?」
尋常でない痛みに悶えながら神山に墜落した。

～～～

あるのだが、その時以上に危機感を抱いていた。
（イシュタルの妨害を入れて今の彼と五分五分といったところでしょうか…まだ彼の技術には練がない。まだ勝機はあるはずですが…いざとなればあの手を使うしかありませんね）
　ノイントが双剣を握り直したその瞬間、背後に空間の歪みが生じる。ノイントはすぐ様体を逸らして回避し迎撃態勢に入るが、飛翔した物体を見て体が一瞬硬直する。
「あれは…まさかあの時の…!?マズイ…!!あれは何としても回収しなければ…!!」
　飛翔したものは大剣だった。それはただの大剣ではなく、守山がミレディ・ライセンより賜ったオスカー・オルクス作の最終兵器。かつての戦いで使われる直前でなんとかノイントが封印し使えなくしたものであるが、既にミレディが百年以上掛けて封印を解除している。そしてその大剣の脅威は封印したノイント自身が一番理解している。
　守山に向けて一直線に向かうバスターソードを迎撃するために、ノイントは先程守山に放った以上の弾幕を放つ。威力はそこまで高くないが、この弾幕の真骨頂は量である。あらゆる角度から３６０。絶え間なく標的を穿つ数の暴力とも言えるこの弾幕。ノイントの思惑通り、弾幕は見事バスターソードの軌道を変え、あらぬ方向へと落ちていく。すぐ様ノイントはバスターソードを再度封印するために落ちた場所へと急降下するが、バスターソードに気を取られすぎたのがいけなかったか、守山への注意を疎か

にしてしまった。

ノイントの腕が胴から離れ宙を舞う。次の瞬間にはノイントの周りには囲むように空間の歪みが生じている。するとそこから黒い棒状のものが次々と射出される。ノイントは驚愕の表情を浮かべながらも残った片腕で剣を振り回し叩き落としていく。彼女にとってこれほどの攻撃では傷一つ付かない。そう思考した次の瞬間、淡く発光したバスターソードを手に、守山がノイントに迫る。

（クッ!!それだけは使わせませんよッ!!）

ノイントは守山から逃げるかのように上昇しながら、守山に向けて上空から分解の銀光を放つ。さらに属性魔法をありったけ使える魔法を全て撃ち込む。

しかし守山はバスターソードを一振りするだけで全ての魔法を打ち払う。だがそれはノイントの予想通りだった。

魔法と共に急降下していたノイントがバスターソードを振り終えた守山に迫る。すぐに守山は求道玉で防御の姿勢に入るが、意表を突いたノイントの攻撃が一瞬速く、剣を持つ右手首が斬り裂かれる。ちょうど防御するために片手で持っていたバスターソードは、守山の右手から零れ落ち深い山の中へと落ちていった。

「〝元界〟」

しかし守山がそう呟いた直後、右手付近の空間が歪み、そこから落ちた筈のバスター

ソードが手元に戻る。
「空間魔法……!!」
「ゼェァァアアッ!!」
雄叫びを上げてバスターソードを振るうが、ノイントは腰が折れるかと思うほどに海老反りになり躱す。バスターソードから放たれた衝撃波は神山を削り、それを見たノイントは冷や汗を流す。
「〝魔鏡氷晶〟」
ノイントが神山に気を取られた隙をつき、守山は忍術を繰り出す。ノイントの周囲に浮かぶ氷で出来た鏡が幾つも並べられ、囲むようにドーム型となる。
「これしきの氷…!! 〝劫火…っ!!?」
意表をつかれたノイントだったが、すぐに冷静になり氷を溶かそうしたが、鏡に守山が写っており、求道玉で出来た苦無を投げる体勢であった為、詠唱の中止を余儀なくされ、鏡から飛んできた苦無を大剣で叩き落とす。
次の瞬間、バスターソードを構えた守山が鏡から現れノイントに迫る。ノイントは躱そうと身をよじるが避けきれず脚を切断される。
「グゥッ!!」
悲痛な声を上げ、夥しい量の血を流すが、まだ守山の攻撃は終わっていない。ノイン

トを斬り終えた守山は再度向かい側の鏡の中に入り込み、再度鏡から姿を現しノイントに迫る。しかし今度は守山の手にはバスターソードは握られておらず、何も出来ずまんまと懐に入られたノイントの腹に手を押し当て、魔力を込めた発勁を繰り出す。

「コフッ……まさか…こ…の…私が…」

ノイントは崩れ落ち、地へと落ちていく。守山はノイントの腕を掴み落ちるのを阻止し、質問を投げ掛ける。

「今、分身から連絡が入った。中村が王国の人間を殺し傀儡人形にしてたってな…テメェも関わってんだろ。俺の生徒を利用して何をしようとしていた？断言するが中村一人であの数の傀儡人形を用意するのは無理がある。さあ、全部吐いてもらおうか」

「この…私が貴方の…ような我が主に従わぬイレギュラーの質問に答える…とで思っ…ていたのですか？それに…まだ私は…負けていませんよ…？」

「なんだと？」

負け惜しみにも聞こえるノイントの言葉。だが、守山は何かを理解し狼狽する。

「ま、待てッ!!」

「貴方の世界で…こういうものがあるのですよね？『負けそうになったら台をひっくり返す』…いっそ貴方方に盤を荒らされるのなら、全てを破壊しゼロから始めた方がいいとのことです。さぁ…自爆しなさい……ッ!!」

けたたましい爆発音が神山に響いた。